茨城県教育財団文化財調査報告第56集

主要地方道大穂千代田線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

松原古墳群
松原遺跡
南谷津遺跡

平成2年3月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第56集

主要地方道大穂千代田線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

松原古墳群
松原遺跡
南谷津遺跡

平成2年3月

財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は，産業・経済の発展に伴い，交通量の著しい増加による交通渋滞の緩和と地域の活性化をはかるため，県内の道路網の整備を進めております。主要地方道大穂千代田線道路改良工事もその一環として計画されたものです。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び，昭和62年（4月～9月）から同63年（4月～5月）にかけて，主要地方道大穂千代田線道路改良工事地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

このたび，松原古墳群外2遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりましたが，本書が学術的な資料としてはもとより，郷土の歴史の理解を深め，広く教育文化の向上の一助として活用されますことを希望いたします。

なお，発掘調査及び整理に当たり，委託者である茨城県はもとより茨城県教育委員会，つくば市教育委員会をはじめ，関係各位から御指導・御協力を賜りましたことに対し，深く感謝の意を表します。

平成2年3月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　礒田　　勇

例　　言

1　本書は，茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が，昭和62・63年度に発掘調査を実施したつくば市大曽根外に所在する松原古墳群・松原遺跡・南谷津遺跡の発掘調査報告書である。

2　松原古墳群外2遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		川又友三郎	～昭和63年5月
		礒田　勇	昭和63年6月～
副理事長		礒田　勇	～昭和63年3月
		小林　元	昭和63年4月～
常務理事		滑川貞雄	～平成元年3月
		小林　洋	平成元年4月～
事務局長		坂場庸克	～平成元年3月
		一木邦彦	平成元年4月～
調査課長		青木義夫	～平成元年3月
		石井　毅	平成元年4月～
企画管理班	班長	水飼敏夫	昭和62年4月～
	主任調査員	山本静男	～平成元年3月
	〃	小河邦男	平成元年4月～
	係長	園部昌俊	昭和63年4月～
	主任	山崎初雄	～平成元年3月
	主事	富永　明	昭和62年4月～昭和63年3月
	〃	大部　章	昭和61年4月～
	〃	吉井正明	平成元年4月～
調査班	班長	加藤雅美	昭和62年度
	〃	倉本冨美男	昭和63年度
	主任調査員	小山映一	昭和62年4月～昭和62年9月調査
	〃	鈴木美治	昭和63年4月～昭和63年5月調査，平成元年10月～平成2年3月整理・執筆
	調査員	吉川明宏	昭和62年4月～昭和62年9月調査
	嘱託調査員	黒沢春彦	昭和63年4月～昭和63年5月調査
整理班長		加藤雅美	平成元年度

3　本書は，発掘調査担当者の協力を得て，鈴木美治が執筆・編集を担当した。

4　本書に使用した記号については，第3章第1節の記載方法の項を参照されたい。

5　発掘調査及び整理に際して御指導・御協力を賜った関係機関，各位に深く感謝の意を表します。

目　　次

序
例　言
第１章　調査経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査方法 …… 2
　　1　地区設定 …… 2
　　2　基本土層の検討 …… 2
　　(1)　松原古墳群・松原遺跡の基本層序 …… 5
　　(2)　南谷津遺跡の基本層序 …… 6
　　3　遺構確認 …… 7
　　4　遺構調査 …… 7
第２章　位置と環境 …… 8
　第１節　地理的環境 …… 8
　第２節　歴史的環境 …… 9
第３章　松原古墳群 …… 14
　第１節　遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法 …… 14
　　1　遺跡の概要 …… 14
　　2　遺構・遺物の記載方法 …… 14
　第２節　調査経過 …… 17
　第３節　遺構と遺物 …… 18
　　1　土坑 …… 18
　　2　遺構外出土遺物 …… 18
　第４節　まとめ …… 20
第４章　松原遺跡 …… 21
　第１節　遺跡の概要 …… 21
　第２節　調査経過 …… 21
　第３節　遺構と遺物 …… 22
　　1　古墳 …… 22
　　2　溝 …… 24

3　堀 …… 35
4　道路状遺構 …… 37
5　土坑 …… 42
(1)　墓壙 …… 42
(2)　墓壙の可能性のある土坑 …… 45
(3)　その他の土坑 …… 46
6　遺構及び遺構外出土遺物 …… 49
第4節　まとめ …… 58
1　古墳について …… 58
2　地割と遺構について …… 61
3　土坑について …… 66
第5章　南谷津遺跡 …… 67
第1節　遺跡の概要 …… 67
第2節　調査経過 …… 67
第3節　遺構と遺物 …… 68
1　溝 …… 68
2　土坑 …… 76
3　炭窯 …… 80
4　遺構及び遺構外出土遺物 …… 83
第4節　まとめ …… 92
終　章　むすび …… 93

挿　図　目　次

第 1 図　調査区呼称方法概念図 …… 2
第 2 図　遺跡関連図 …… 3・4
第 3 図　大穂の地質断面図 …… 5
第 4 図　基本土層図（松原遺跡） …… 6
第 5 図　基本土層図（南谷津遺跡） …… 7
第 6 図　周辺遺跡分布図 …… 12

松原古墳群

第 7 図　第 1 号土坑実測図 …… 18
第 8 図　遺構外出土遺物実測・拓影図 …… 18

松原遺跡

第 9 図　第 1 号古墳実測図 …… 23
第 10 図　第 2・3 号溝実測図 …… 25・26
第 11 図　第 6・7・13 号溝実測図 …… 27
第 12 図　第 10・11・12 号溝実測図 …… 29・30
第 13 図　第 1 号堀（SD 5），第 14 号溝，第 5 号道路状遺構実測図 …… 31・32
第 14 図　第 15 号溝実測図 …… 34
第 15 図　第 2 号堀（SD 4）実測図 …… 36
第 16 図　第 1 号道路状遺構実測図 …… 38
第 17 図　第 2 号道路状遺構実測図 …… 39
第 18 図　第 3 号（SD 8）・第 4 号（SD 9）道路状遺構実測図 …… 41
第 19 図　土坑・墓壙実測図 (1) …… 47
第 20 図　土坑・墓壙実測図 (2) …… 48
第 21 図　土坑・墓壙実測図 (3) …… 49
第 22 図　出土遺物実測・拓影図（縄文式土器）(1) …… 50
第 23 図　出土遺物実測図（土師器・須恵器）(2) …… 52
第 24 図　出土遺物実測・拓影図（土師質土器・陶磁器・土製品・石製品）(3) …… 54
第 25 図　出土遺物実測図（石器・石製品）(4) …… 57
第 26 図　出土遺物実測図（石製品・鉄製品）(5) …… 58
第 27 図　古墳分布図 …… 59・60
第 28 図　地割と遺構 …… 63・64

南谷津遺跡

第 29 図　第 1 ～ 6 号溝実測図 …… 69
第 30 図　第 7 号溝実測図 …… 71
第 31 図　第 8 号溝実測図 …… 73
第 32 図　第 9 号溝実測図 …… 75
第 33 図　土坑実測図 (1) …… 81
第 34 図　土坑実測図 (2) …… 82
第 35 図　炭窯（SK 2）実測図 …… 83
第 36 図　出土遺物実測・拓影図（縄文式土器） …… 87
第 37 図　出土遺物実測・拓影図（土師器） …… 88
第 38 図　出土遺物実測・拓影図（陶磁器・土師質土器・石製品・金属製品） …… 89
第 39 図　古銭拓影図 …… 91

表　目　次

表 1　大穂町遺跡一覧表 …… 13
表 2　グリッド別出土遺物一覧表（松原古墳群） …… 19
表 3　土坑一覧表（松原遺跡） …… 46
表 4　古銭一覧表（南谷津遺跡） …… 90

付　図

付図 1　松原古墳群・松原遺跡・南谷津遺跡遺構配置図

写真図版目次

PL 1　遺跡全景（松原古墳群・松原遺跡・南谷津遺跡）
PL 2　松原古墳群全景－(1)(2)
グリッド調査状況－(3)
第 1 号土坑－(4)
松原遺跡第 1 号古墳－(5)
周溝出土遺物－(6)(7)
PL 3　松原遺跡第 1 ・ 2 号堀，第 6 号溝－(1)
第 1 号堀－(2)
第 3 号（SD 8）・第 4 号（SD 9）道路状遺構－(3)
第 2 号堀遺物出土状況－(4)
墓域－(5)
墓壙群－(6)
第 15 号溝遺物出土状況－(7)
PL 4　松原遺跡第 2 ・ 3 号墓壙－(1)
第 5 号墓壙－(2)
第 4 ・ 8 号墓壙－(3)
第 7 号墓壙－(4)
第 1 号道路状遺構遺物出土状況－(5)
第 15 号溝，第 5 号墓壙－(6)
第 12 号溝，第 2 号堀－(7)
第 7 号溝－(8)
PL 5　松原遺跡出土遺物（土器・土製品）
PL 6　松原遺跡出土遺物（石器・石製品）
PL 7　南谷津遺跡全景（南西側）－(1)
同全景（北東側）－(2)
第 1 号溝－(3)
第 3 ・ 6 号溝－(4)
第 9 号溝遺物出土状況－(5)
第 8 号溝遺物出土状況－(6)
第 1 号溝土層－(7)
第 8 号溝，炭窯－(8)
第 2 号溝－(9)
PL 8　南谷津遺跡出土遺物（土器・石製品・銅製品・鉄製品・古銭）

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経過

主要地方道大穂千代田線は，主要地方道谷田部明野線との合流地点である大穂町長高野を基点とし，国道408号（学園西大通り），一般県道土浦筑波線（学園東大通り），国道125号を横断して，千代田村下土田で国道6号と接続する総延長23.29 kmの県道である。本線は，石岡市・千代田村・つくば学園都市を結ぶ道路として，近年，交通量が著しく増加している。本線のうち，新治村沢辺付近から大穂町若森に至る4.8 kmの区間は，特に道幅が狭くカーブの多い狭隘道路であり，また，太田橋の老朽化が進んでいることもあり，大型車両の交通に支障をきたしていた。このため茨城県では，この区間における道路の幅員の拡張と整備を行い，国道408号と直結させることによって交通量の緩和をはかるべく，昭和55年，主要地方道大穂千代田線道路改良工事を計画した。

茨城県（土浦土木事務所）は工事に先立ち，昭和61年6月18日，大穂町教育委員会に対して，工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無及びその取り扱いについて照会した。また，9月1日，茨城県（土木部道路建設課）は，茨城県教育委員会に現地調査を依頼した。9月11日，茨城県教育委員会は，工事予定地内に松原古墳群を含む周知の遺跡が存在する旨回答し，さらに，9月17日，その取り扱いについて回答した。茨城県教育委員会は，茨城県と文化財保護の立場から埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねてきたが，現状保存が困難であることから，記録保存の処置を講ずることとし，調査機関として財団法人茨城県教育財団（以下，茨城県教育財団）を紹介した。

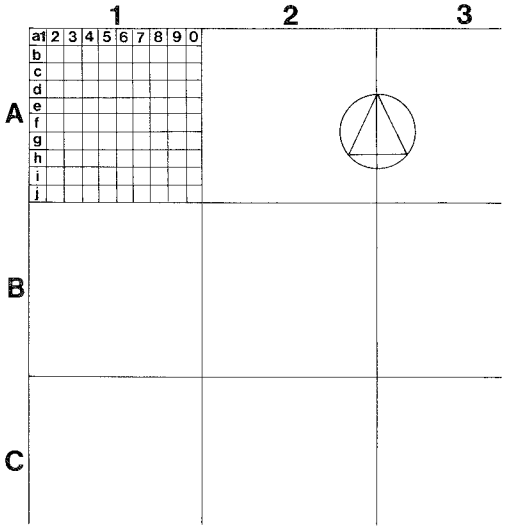
茨城県教育財団は，昭和62年5月1日，茨城県との間に埋蔵文化財発掘調査に関する業務委託契約を締結し，同年4月1日から9月末日にかけて松原古墳群（1,174 m^2）・松原遺跡（5,224 m^2）の2遺跡について発掘調査を実施することになった。同年8月1日，契約変更がおこなわれ，同一路線上に所在する南谷津遺跡（3,240 m^2）の一部1,032 m^2が追加された。南谷津遺跡の残りの部分（2,208 m^2）については，昭和63年4月26日，業務委託契約を締結し，引き続き茨城県教育財団が4月1日から5月31日にかけて調査を実施することになった。

第2節　調査方法

1　地区設定

主要地方道大穂千代田線道路改良工事地内に確認された松原古墳群外2遺跡は，同一路線上に隣接して所在しており，また，密接な関連が窺われるため，地区設定に当たっては，3遺跡を一連の大調査区の方眼の中に組み入れることにした。

地区設定は，大穂千代田線道路改良工事地内のセンター杭No 50（X＝10546.549，Y＝10852.912）を使用し，この測点から北へ13.451 m，南へ12.912 m移動した点（X＝10560.00，Y＝10800.00）を基準として，東西・南北に各々40 mずつ平行移動し大調査区を設定した。



第1図　調査区呼称方法概念図

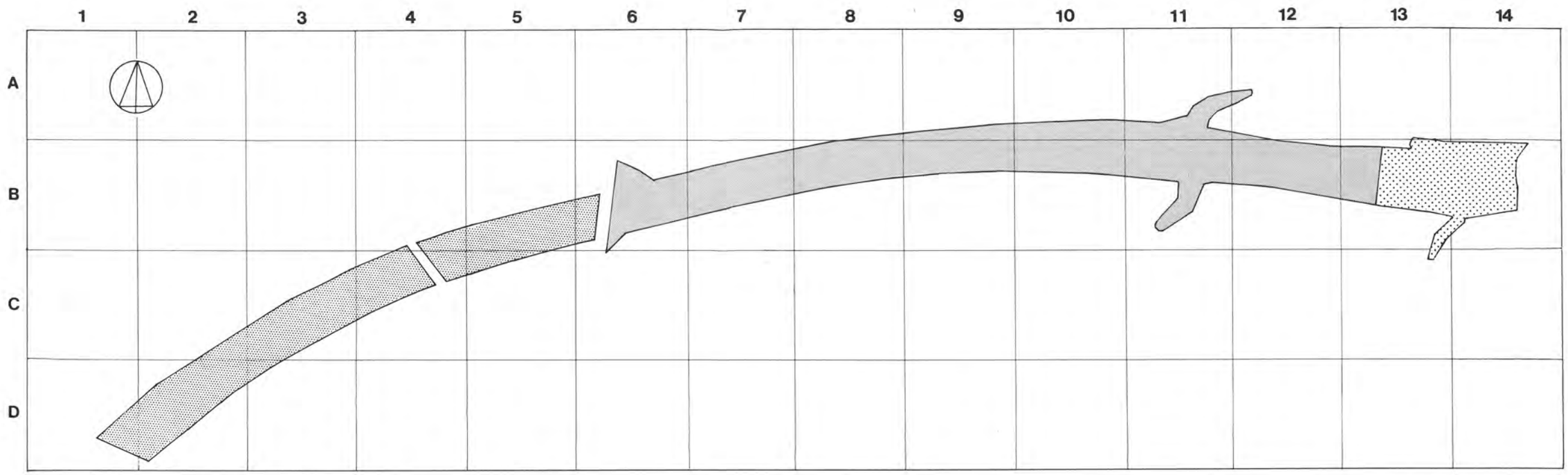
調査区の名称は，まず大調査区を北から南へ「A」・「B」・「C」…，西から東へ「1」・「2」・「3」…「14」と大文字を付して，「A 1」区・「B 2」区のように呼称した。さらに，大調査区を4 m方眼の小調査区に100分割し，それぞれ同様に，北から南へ「a」・「b」・「c」…「j」，西から東へ「$_1$」・「$_2$」・「$_3$」…「$_9$」・「$_0$」と小文字を付した。各小調査区の名称は，大調査区の名称と合わせた四文字で「A1a$_1$」区・「B2b$_2$」区のように呼称した（第1図）。

なお，松原古墳群は大調査区で南北「A」～「C」・東西「13」～「14」，松原遺跡は南北「A」～「B」・東西「6」～「13」，南谷津遺跡は南北「B」～「D」・東西「1」～「6」の範囲に位置している（第2図）。

また，基準点の測量杭打ちは，社団法人茨城県建設コンサルタントに委託した。

2　基本土層の検討

松原古墳群外2遺跡の所在する筑波台地の地質を，主要地方道大穂千代田線にほぼ併走する状況で作成された地質断面図（宇野沢　昭ほか　1988）によって説明する。第3図に見られるように，遺跡の所在する台地は，新生代第四紀更新生（180～1万年前）中・後期に形成されたとされ



南谷津遺跡　松原遺跡　松原古墳群

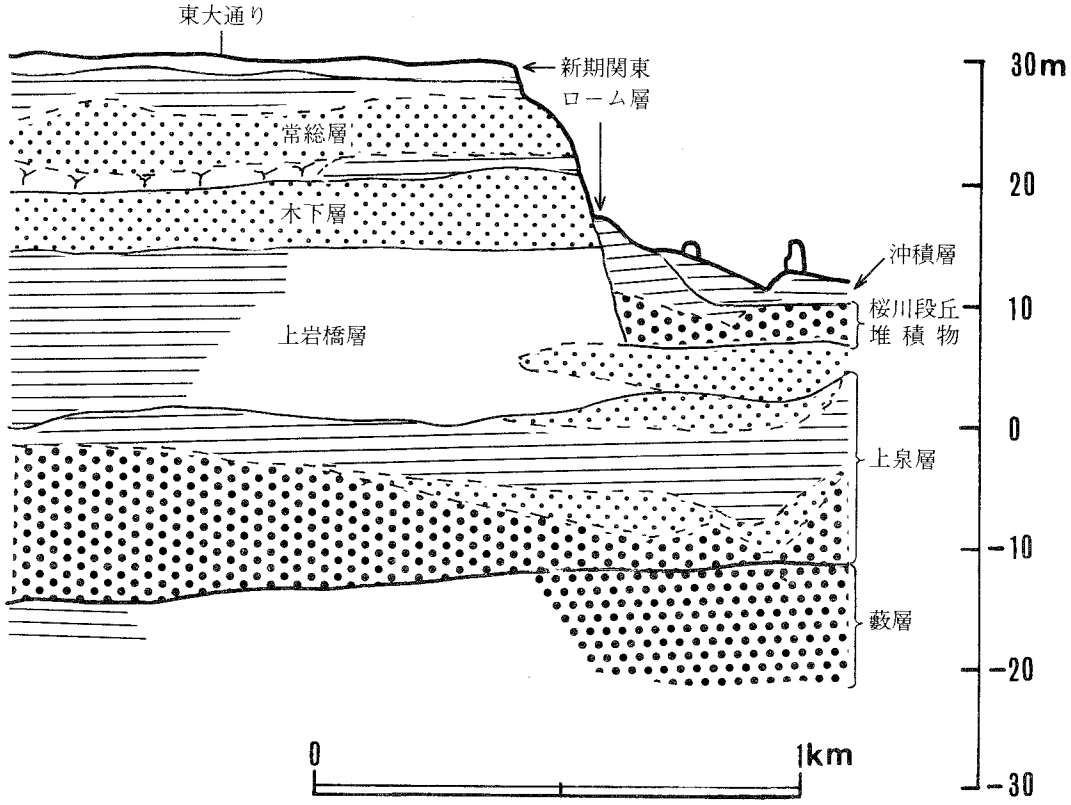
0　40　80m

南谷津遺跡

松原遺跡

松原古墳群

第 2 図　遺跡関連図



第 3 図　大穂の地質断面図

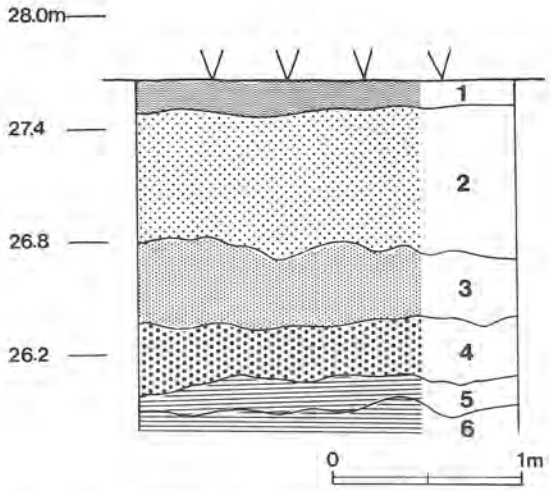
る下総層に属する藪層・上泉層・上岩橋層・木下層・常総層，それに新期関東ローム層の順で堆積している。藪層は層厚 20 ～ 25 m で，下部の陸成砂礫層・砂礫混じり砂層，中部の腐植物混じり泥・砂泥層，上部の貝化石帯を挟む海成の細粒砂層から成る。上泉層は層厚 6 ～ 26 m で，下部の陸成砂礫層，中部の腐植物混じり泥・砂泥層，上部の海成砂泥層から成る。上岩橋層は層厚 1 ～ 3 m で，下部の埋谷性砂礫層と上部の貝化石を含む海成堆積物から成る。木下層は層厚 3 ～ 8 m で，最終間氷期（下末吉海進）極相期の浅海成の砂層を主体とする。常総層は層厚 1.5 ～ 11.5 m で，主に淡水環境下で形成された堆積物である。常総粘土層は本層の最上部，龍ヶ崎砂礫層は同じくその一部に当たる。新期関東ローム層は層厚 1 ～ 3 m で，武蔵野ローム層と立川ローム層に相当する降下火山灰層である。桜川段丘堆積物及び相当層は層厚 0.5 ～ 14 m で，ウルム氷期に形成された堆積物である。古鬼怒川の河成礫層を主体とし，ところにより礫層上位に砂層や泥層を載せている。沖積層は層厚 1 ～ 35 m で，完新世（1 万年前以降）の後氷期に形成されたものであり，腐植土・腐植質泥・砂などから成る。

(1)　松原古墳群・松原遺跡の基本層序

第 4 図は，松原遺跡のほぼ中央部に当たるB10c区で調査したテストピットの土層図である。松原古墳群については土層の調査を実施していないが，同一台地上に隣接して所在しているため基

本土層に大きな違いはないと考えられる。

1層は表土で，桑畑として利用されていた暗褐色の耕作土であり，厚さは12～18 cmである。2層は褐色のソフトローム層であり，65～85 cmの厚さに堆積している。遺構は2層の上面で確認したもので，この層を掘り込んで構築されている。3層は明褐色のハードローム層で，細かい黒色土粒子が含まれ，28～50 cmの厚さで堆積している。2層と3層の間は，鋸歯状を呈している。4層は黄褐色で黒色・黄色の粒子が含まれ，25～35 cmの厚さに堆積している。5層以下は明黄褐色の粘土層である。

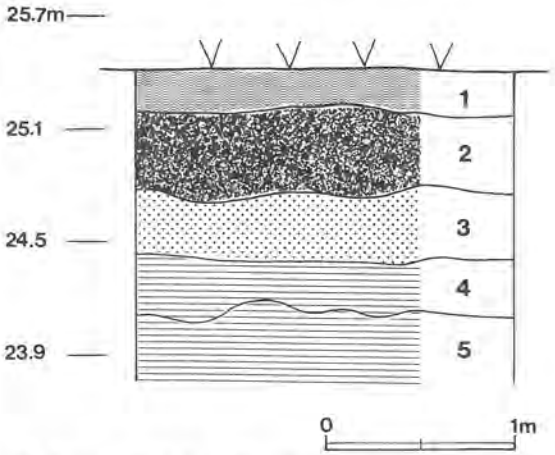


第 4 図　基本土層図（松原遺跡）

(2)　南谷津遺跡の基本層序

第5図は，南谷津遺跡のほぼ中央部に当たるC4b₁区で調査したテストピットの土層図である。

1層は表土で，芝畑として利用されていた灰褐色の耕作土であり，厚さは17～25 cmである。2層は黒褐色で，ローム粒子や焼土粒子を少量含み，37～50 cmの厚さで堆積している。3層は明褐色のソフトローム層で，少量の粘土ブロックを含み，27～38 cmの厚さで堆積している。遺構は3層の上面で確認したもので，掘り込みは一部4層に達している。エリアの境界で観察した溝の土層の状況から，他の遺構についても2層から掘り込まれていたものと考えられる。4層は灰白色の粘土層で，上層に堆積する明褐色土が多量に含まれている。25～35 cmの厚さで堆積する。5層は4層と同じ灰白色の粘土層であるが，4層に比べ明褐色土の含有率は少ない。5層からは湧水が見られた。2層以下は粘性・締まりとも強い。



第 5 図　基本土層図（南谷津遺跡）

3　遺構確認

松原古墳群では，グリッドとトレンチを併用し，調査区域の約4分の1にあたる面積の試掘（確認調査）を実施した。松原遺跡については，路線のセンター杭に沿って南北に幅2mのトレンチを13カ所に設定し，約14分の1にあたる試掘を実施した。試掘の段階でいずれの遺跡からも遺構の存在が確認されたため，調査区全域について重機による表土除去を実施した。南谷津遺跡の昭和62年度調査分については，これと合わせて表土除去を実施した。南谷津遺跡の昭和63年度調査区については，松原遺跡と同様に路線のセンター杭を利用し，グリッドとトレンチを併用して試掘を実施した。調査区域に含まれる水田については，遺構の存在が確認されなかったため，この区域を除く部分について重機による表土除去を実施した。

4　遺構調査

当遺跡における遺構の調査は，次のように実施した。

土坑の調査は，長径方向で二分して掘り込む「二分割法」で実施した。大形のものについては，長径方向とそれに直角に交わる方向に土層観察用ベルトを設定し，四分割して掘り込む「四分割法」で実施し，地区の名称は，北から時計回りに1～4区とした。重複している場合には，新旧関係が把握できるような位置にベルトを設定した。溝の調査は，適宜な位置に土層観察用ベルトを設定し，掘り込みを実施した。

土層観察は，色相・含有物・混入物の種類や量・粘性・吸水性・締まり具合を観察し，分析の基準とした。色相の判定は『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄　日本色研事業株式会社）を使用した。

遺構や遺物の平面実測は，水糸方眼地張り測量で実施した。また，土層断面や遺構断面の実測は，遺跡内の水準点を基準とし，標高を測って水平にセットした水糸を基準にして実測した。遺物は，出土位置・標高・遺物番号等を遺物出土状況図に記載しながら取り上げた。縮尺は20分の1を基本とした。

調査の記録は，土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成→遺物平面（完掘）写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順で行った。

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

松原古墳群は大穂町[1]大曽根字松原116外5筆，松原遺跡は同字松原1－1外31筆，南谷津遺跡は若森字南谷津7外13筆に各々所在している。3遺跡は，主要地方道大穂千代田線道路改良工事地内の路線上，東西約522 m，南北約20 mの範囲内に位置している。3遺跡の所在する大穂町は，関東地方の北東部を占める茨城県の南西部（県南地方）に位置しており，町域は東西10.5 km，南北6.5 km，面積34.01 km^{2}の東西に細長い形となっている。北は筑波町[2]・南は豊里町[3]・谷田部町[4]，東は桜村[5]・新治村，西は小貝川を挟んで千代川村・石下町・下妻市と境を接している。同町は，昭和40年代後半頃までは「純農村地域」であり，かつては「大穂箒」の産地として全国にその名を知られていた。しかし，昭和38年，筑波研究学園都市建設が閣議決定されるに至り，学園都市開発区域に指定された六か町村（筑波・大穂・豊里・桜・谷田部・茎崎）の北部に位置する大穂町は，やがて大きな変貌を遂げることになる。近年では，高エネルギー物理学研究所をはじめとする文部省や建設省等の各種研究機関や，民間の研究施設の移転・新設に伴い，これらの研究機関を結ぶ各種道路網が整備され，一大文化都市として生まれ変わろうとしている。大穂町の中央部には東西に主要地方道大穂千代田線が走り，町役場を起点として東方0.2 kmには一般県道土浦筑波線（学園東大通り），西方0.1 kmには国道408号（学園西大通り）が走っている。また，南東方8 kmには，首都高速道路と福島県いわき市を結ぶ常磐自動車道の桜・土浦ICがある。

大穂町は，筑波・稲敷台地上に位置しているが，町域の一部は東側の桜川低地，西側の小貝川低地に及んでいる。筑波・稲敷台地は，県南の中央部に位置する比較的平坦な台地で，桜川低地と小貝川低地との間にあり，北西から南東方に扇状に広がっている。東は霞ケ浦，南は利根川低地に限られ，標高は南東部が26～29 mで，北西部がやや低くなっている。台地縁辺部は，桜川や小貝川をはじめとして，台地上を流下する花室川・蓮沼川等の小河川群によって樹枝状に開析されている。台地と桜川低地・小貝川低地との境は急斜面を呈しており，比高は10～20mを測る[6]。

松原古墳群外2遺跡は，大穂町役場の北東0.7～1.1 kmの桜川低地を臨む，標高19.5～28 m程の同一台地上に互いに隣接して位置している。松原古墳群の東側は急斜面，南側は緩やかな傾斜地となっているが，松原遺跡や南谷津遺跡はその西側に続く台地の平坦面に位置している。

注・参考文献

(1)～(5)　昭和62年10月31日，大穂町・豊里町・谷田部町・桜村の4か町村が合併し，新しく

「つくば市」が誕生した。翌年の1月1日には筑波町が参入した。つくば市の誕生によって，「大穂町」30有余年の歴史はここに幕を閉じることになった。新しい「市」の誕生によって旧町村名は消滅したが，表記の都合上，本書では旧町村名をそのまま使用することにする。

(6) 居留川正平　青野壽郎 『日本地誌』5　二宮書店　昭和50年

第2節　歴史的環境

松原古墳群外2遺跡の所在する大穂町の洪積台地上には，『茨城県遺跡地図』[1]によれば17の遺跡が認められる。その後，町史編纂に伴う分布調査が行われ，現在では，先土器時代から縄文時代（晩期）までの遺跡が計62か所確認されている。これらの遺跡の多くは，桜川右岸の台地縁辺部に集中している感がある。しかし，いまだ未確認の遺跡が地中に埋もれている可能性も多分にある。ここでは，町の分布調査の結果に基づき，先土器時代～奈良・平安時代にかけての大穂町及びその周辺地域に所在する遺跡について，概観することにする。

先土器時代の遺跡は，昭和21年の群馬県岩宿遺跡[2]の発見を契機として注目を集め，今日までに全国で2,000か所余り，県内では100か所余りの存在が知られている[3]。大穂町の先土器時代の遺跡としては，桜川右岸の段丘上に前野遺跡[4]・大砂遺跡[5]の2遺跡が確認されている。前野遺跡からは，先土器時代終末期の大形石刃石器文化の段階に位置づけられる柳葉状尖頭器・有舌尖頭器など7点の石器が，大砂遺跡からは同時期の尖頭器が1点出土している。

縄文時代の遺跡は，早期～晩期にかけての16遺跡が確認されている。早・前期の遺跡としては，早期後葉の茅山式・前期前葉の関山式土器が出土した池の下遺跡がある。前期の遺跡としては寺山遺跡があり，前葉の黒浜式土器が出土している。また，大曽根A遺跡(10)・大曽根B遺跡(11)・西高野遺跡(52)等からも同期の遺物が出土している。隣接する豊里町の大境遺跡[6]からは，前期前葉の植房式期の住居跡が1軒検出されている。中期の遺跡としては，前述した大曽根A遺跡・大曽根B遺跡・西高野遺跡を始め，瓦塚(2)・佐(5)・若森西(7)・若森池西(8)・若森谷津[7](9)・八幡神社東(16)・鹿島台(17)・明戸北(25)・田倉(33)・（吉沼）大六天(34)・熊野(36)の各遺跡や大曽根吹上貝塚[8](6)等があり，遺跡数が増加する。大曽根吹上貝塚は，同町役場の東約1.5kmの桜川右岸の舌状台地上（標高約25m）に位置する鹹水産の貝塚である。田倉遺跡[9]と（吉沼）大六天遺跡[10]は，古くから知られていた遺跡である。田倉遺跡は中期から晩期にかけての遺跡であり，広大な遺跡の一部に3地点からなる貝塚が存在している。この遺跡からは，阿玉台・加曽利E・称名寺・加曽利B・安行I・安行II式などの土器と共に，ニホンシジミを主体として，カクタニシ・ハマグリ・オオタニシなどの貝類が出土している。（吉沼）大六天遺跡は，田倉遺跡の北方数100

mにあり，広大な遺跡の一部に小規模な貝塚を伴う遺跡である。後期の加曽利B・安行式土器を主体として，阿玉台・加曽利E・堀之内・安行Ⅱ・安行Ⅲ式などの土器が見られる。貝類は，オオタニシ・ヤマトシジミを主体とし，他にサルボウ・マツカサガイなどが見られる。この貝塚は，小貝川流域に現存する上限の貝塚として知られている。隣接する豊里町の大境遺跡からは，阿玉台期の住居跡20軒，加曽利E期の住居跡1軒が検出されている[11]。後期の遺跡は，前述した中期の遺跡から継続するもので，大曾根吹上貝塚を始めとして瓦塚・若森西池・鹿島台・田倉・（吉沼）大六天の6遺跡が確認されている。晩期の遺跡数は激減し，前述した田倉・（吉沼）大六天の2遺跡が確認できるだけである。

弥生時代の遺跡は確認されていないが，桜川に面する鹿島台遺跡・松原古墳群付近や熊野夫婦塚古墳周辺から，弥生時代後期の土器片が数点採集されている[12]。

古墳時代の遺跡は，佐(4)・玉取(13)・松原(14)・向山(49)の4古墳群のほかに，熊野夫婦塚古墳(1)を始めとする12基の古墳の存在が確認されている。佐古墳群からは，安政2（1855）年9月耕作中に石棺が発見され，人骨三体のほか勾玉・管玉・鉄刀等が出土したとの記録が残されている。佐古墳群・玉取古墳群の中には，石棺が現存しているものもある[13]。大穂地区においては，これまで組織的な発掘調査はあまり行われておらず，この時代の集落の様相は明らかでない。しかし，土師器片が確認されている遺跡は40か所余りに上り，今後の調査によっては古墳時代の集落跡が確認される可能性は大きい。

律令制の施行された奈良・平安時代，大穂町の大部分は筑波郡に属していた。筑波郡には大貫・筑波・水守・三村・栗原・渚蒲（すかま）・清水（しみつ）・佐野・方穂（かたほ）の九郷が置かれており，大穂町は筑波郡域の西方を占める方穂郷・水守郷・渚蒲郷等に属していたものと考えられる。筑波郡衙の所在地については，近年の調査によって，7世紀後半から8世紀前半に位置づけられる掘立柱建物跡12棟余が検出された，筑波町平沢字平地内であることが明らかにされた。現在，この地一帯は『平沢官衙遺跡[14]』として，国の指定史跡となっている。また，桜村には奈良時代後期の瓦が出土する九重廃寺跡[15]がある。

以上のように，大穂町及びその周辺地域は，太古から郷土の先人達の生活の舞台となり，数多くの貴重な生活の足跡が記されている。しかし，未だ不明な点も数多く残されており，今後の調査・研究が待たれる。

注・参考文献

(1) 茨城県教育委員会「茨城県遺跡地図」昭和62年3月

(2) 群馬県勢多郡笠懸村岩宿。我国旧石器時代研究の端緒となった，旧石器時代から縄文時代にかけての複合遺跡。1947年相沢忠洋氏が発見する。

(3) 高萩市赤浜遺跡・山方町山方遺跡・勝田市後野遺跡・日立市鹿場遺跡・鹿島町伏見遺跡・大宮町梶巾遺跡等が知られている。

(4)(5) 前野遺跡・大砂遺跡から出土した先土器時代の石器については，『茨城県史料－考古資料編－（先土器・縄文時代）』（茨城県史編さん第一部会原始古代専門委員会　昭和54年3月）に掲載されている。しかし，前野遺跡や大砂遺跡の位置については，前者が大穂町前野地内，後者が池の下遺跡付近とされているものの，正確な位置については特定されていない。

(6) 「研究学園都市計画手子生工業団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書」大境遺跡　茨城県教育財団　昭和61年3月

(7) 旧谷津遺跡。大形の石棒が出土した若森遺跡と同一遺跡と考えられる。

(8) 旧吹上貝塚。

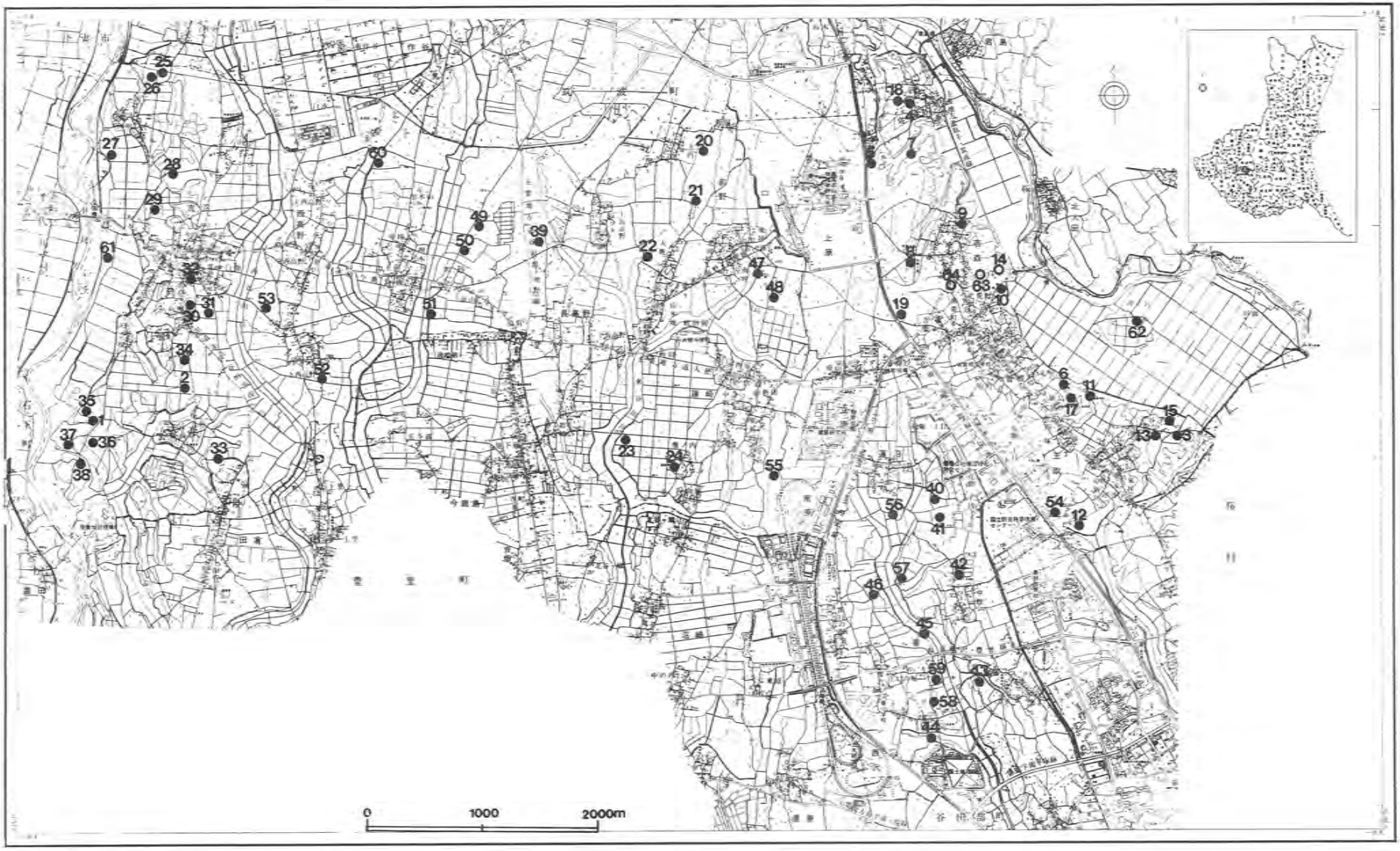
(9)(10) 斎藤弘道『県内における動物遺存体の研究(1)』　茨城県歴史館　昭和53年　中村盛吉・藤田　清『常総文化研究』昭和47年

(11) (6)に同じ。

(12)(13) 大穂町史編纂委員会『大穂町史』平成元年3月

(14) 筑波町（現つくば市）平沢にある官衙（役所）跡。遺跡は東西約210 m，南北約110 mの広さを有し，周囲に幅3 m，深さ1.5 mの溝が巡る。昭和55年国の指定史跡となる。

(15) 新治郡桜村（現つくば市）東岡に所在する奈良時代後期の寺院跡。古代の河内郡に属し，筑波廃寺の南方9 km，桜川低地を隔てた対岸の台地縁辺にある。



第 6 図　周辺遺跡分布図

表1　大穂町遺跡一覧表

図中番号	遺跡名	遺跡の時代					図中番号	遺跡名	遺跡の時代				
		先土器	縄文	弥生	古墳	奈・平			先土器	縄文	弥生	古墳	奈・平
1	熊野夫婦塚古墳				○		33	田倉遺跡		○		○	
2	瓦塚遺跡		○				34	(吉沼)大六天遺跡				○	
3	玉取古墳群				○		35	夫婦塚西遺跡				○	
4	佐古墳群				○		36	熊野遺跡		○		○	
5	佐遺跡		○				37	浅間塚遺跡				○	
6	大曽根吹上貝塚		○				38	能田遺跡				○	
7	若森西遺跡		○				39	長高野遺跡				○	
8	若森池西遺跡		○		○		40	中井遺跡				○	
9	若森谷津遺跡		○				41	猿塚遺跡				○	
10	大曽根A遺跡		○		○	○	42	中根遺跡	湮滅				
11	大曽根B遺跡		○		○		43	猿壁遺跡				○	○
12	玉取山遺跡		○		○		44	弥平太遺跡				○	
13	玉取遺跡				○		45	本屋敷遺跡				○	
14	松原古墳群				○		46	大道端遺跡				○	
15	先手堂遺跡				○		47	南坪遺跡				○	
16	八幡神社東遺跡		○		○		48	南山遺跡				○	○
17	鹿島台遺跡		○				49	向山古墳群				○	
18	佐B遺跡		○		○	○	50	向山遺跡				○	
19	大日塚古墳				○		51	向山南遺跡				○	
20	上内東遺跡				○		52	西高野遺跡		○		○	
21	赤城神社遺跡				○		53	西高野古墳				○	
22	大鹿遺跡				○		54	八坂神社境内古墳				○	
23	篠崎西遺跡				○		55	東新田原遺跡				○	
24	鹿島神社遺跡				○		56	元屋敷遺跡				○	
25	明戸北遺跡		○		○	○	57	矢先遺跡				○	
26	明戸古墳	湮滅					58	熊の山遺跡				○	
27	明戸南遺跡				○		59	精進物遺跡				○	
28	吉沼後田遺跡				○		60	池の下遺跡		○		○	
29	正福寺東遺跡				○		61	オッポレ遺跡				○	
30	向井町古墳				○		62	沖の宮遺跡				○	
31	権ケ久保遺跡				○		63	松原遺跡	縄文・古墳・中～近世				
32	愛宕神社古墳				○		64	南谷津遺跡	縄文・古墳・奈良・中～近世				

第3章　松原古墳群

第1節　遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法

1　遺跡の概要

当遺跡は，大穂町大曽根字松原（現つくば市大曽根字松原）116外5筆に所在する遺跡であり，昭和62年4月1日から同年9月30日にかけて調査を実施した。調査の結果，溝1条・土坑1基が検出された。また，これらの遺構とともに土師器（38点）・須恵器（1点）・陶磁器（9点）・内耳土器（5点）・土師質土器（1点）等の土器片や，石片（雲母片岩）が少量出土している。

溝は，隣接する松原遺跡の東端から当遺跡の南端部にかけて北西から南東方向に延びており，その両端はいずれも調査区外に延びている。調査の過程では第1号溝として取り扱ったが，遺構確認の段階で地表面が窪んでいたことや，畑の地境とほぼ一致すること等から，近・現代の地境溝あるいは根切溝と考えられるため，これを欠番とした。土坑や出土遺物については，第3節で扱うことにする。

2　遺構・遺物の記載方法

本書で使用した遺構・遺物の記載方法は，次の通りである。

(1)　使用記号

遺構	名称	土坑	溝	古墳	道路状遺構	その他
	記号	SK	SD	TM	SF	SX

遺物	名称	土器	石器	石製品	鉄製品	古銭	骨·骨粉
	記号	●	△	▲	□	■	B

(2)　遺構・遺物実測図中の表示

焼土範囲　繊維土器　須恵器（断面）　施釉部分　粘土

(3)　土層の分類

松原古墳群外2遺跡から検出された遺構の土層の色調は，『新版標準土色帖』（小山正忠　竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用し，以下のように分類した。また，土層中に含まれている含有物についても分類して記号化し，土層の色調と組み合わせて「2ac…」のように表記した。なお，詳しくは本文中で解説することとした。

番号	土　色　名	色相（Hue）	明度／彩度	含　　有　　物
1	明褐色	7.5YR	5/6　5/8	a　ローム粒子
2	灰褐色		4/2	b　ロームブロック
3	褐色		4/3　4/4　4/6	c　ローム粒子・ロームブロック
4	黒褐色		3/1　3/2　2/2	d　粘土ブロック
5	暗褐色		3/3　3/4	e　焼土粒子（焼土ブロック）
6	黒色		2/1	f　炭化粒子（炭化材）
7	極暗褐色		2/3	g　焼土粒子・炭化粒子
8	明黄褐色	10YR	7/6　6/6　6/8	h　ローム粒子・焼土粒子
9	にぶい黄橙色		6/4	i　ローム粒子・炭化粒子
10	黄褐色		5/6	j　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子
11	暗褐色		3/3	k　撹乱
12	赤褐色	5YR	4/6	l　ローム粒子・ロームブロック・焼土
13	黒褐色		3/1	粒子・炭化粒子
14	暗赤褐色		3/2　3/3	m　灰
15	暗赤褐色	2.5YR	3/6	n　砂
16	灰白色	2.5Y	7/1	o　黒色土（黒色土ブロック）
				p　暗褐色土（暗褐色土ブロック）
				q　礫

※含有物の量については，少量（5～10%）を基準とし，それよりもやや多いもの（11～25%）には「′」，多いもの（26%以上）には「″」をアルファベットの右上に付加し，a′・a″のように表記した。

(4) 遺構実測図の作成方法と掲載方法

①土坑の図版は，縮尺20分の1の原図をトレースし，版組後，それを更に3分の1に縮小して掲載することを基本とした。

②溝の図版は，縮尺20分の1の原図をトレースし，版組後，それを更に3分の1に縮小して掲載することを基本とした。

③実測図中におけるレベルは，標高であり，m単位で表示した。

④遺構から出土した遺物は，平面図及び断面図に，位置を記号化したドットで落とした。

⑤遺構実測図の掲載については，できるだけ遺構番号順とした。

(5) 遺物実測図の作成方法と掲載方法

①土器の実測は，中心線を挟んで左2分の1に外面，右2分の1に内面及び断面を図示した。

②土器拓影図は，右側に断面図を図示した。

③胎土に繊維を含む土器については，断面図中にドットを落とし図示した。

④遺物の版組は，3分の1に縮小したものを掲載することを基本とした。

(6) 表の見方

土坑一覧表

遺構名	位　置	長径方向	平面形	規　　模（m）		覆　土	出土遺物	備　　考
				長径×短径	深　さ			

①遺構名は，SK・SDのように略号で表記した。

②位置は，小調査区（グリッド）で表示した。他の調査区にまたがる場合には，遺構の占める面積の割合が大きい小調査区名をもって表示した。

③方向は，長径方向が真北からみてどの方向にどれだけ傾いているかを，角度で表示した（N－20°－W）。（　）を付したものは推定値を表す。

④平面形は，円形・楕円形の場合に下記の分類基準を設けて表示した。

・円形（短径：長径＝1：1.2未満のもの）

・楕円形（短径：長径＝1：1.2以上のもの）

⑤規模の欄の長径・短径は，上端面の計測値であり，深さは，確認面からの計測値である。

⑥覆土の欄のNは自然堆積，Aは人為堆積を示す。

⑦出土遺物は，遺物の種類とその出土点数を記した。

⑧備考は，重複関係や特徴等を記した。

第2節　調査経過

松原古墳群及び松原遺跡の2遺跡については，昭和62年4月1日から同年9月30日迄の半年間の予定で調査を開始した。しかし，確認調査の結果，両遺跡とも遺構・遺物が比較的希薄であることが明らかになったため，先にも述べたように，一部契約変更が行われ，同一路線上に所在する南谷津遺跡の一部（3,240 m^2 のうちの 1,032 m^2）についても，併せて調査を実施することになった。南谷津遺跡の残りの部分（2,208 m^2）については，翌年の4月1日から5月31日にかけて調査を実施した。

松原古墳群及び松原遺跡，南谷津遺跡の3遺跡については，並行して調査を実施したが，ここでは，松原古墳群の調査経過について記載し，松原遺跡については第4章第2節，南谷津遺跡については第5章第2節で扱うことにした。また，記載内容が他の2遺跡にも及ぶものについては，松原古墳群の項で記載することにした。

4　月　発掘調査に伴う調査の諸準備（事務所・現場倉庫等の建設，発掘器材類の搬入，作業員の雇用，関係機関との調整）を行う。27日に，土浦土木事務所，県文化課，大穂町教育委員会，地元区長及び教育財団本部等関係者の出席の下で，松原古墳群，松原遺跡の鍬入式を行う。

5　月　調査区内の立木の伐開・焼却，清掃や遺跡の全景写真撮影を行う。1日大穂町文化財審議委員，12日大曽根小学校一年生，15日新治村教育委員会，25日筑波町教育委員会遺跡見学。

6　月　基準杭打ち（茨城県建設コンサルタント），地形測量，調査区設定（グリッド杭打ち）を行い，グリッドによる遺構確認調査を開始する。

7　月　遺構確認調査と並行して，確認された土坑・溝の掘り込みを行う。27日公民館長ほか遺跡見学。

8　月　引き続き土坑・溝の調査を行う。16日大穂町ふるさと少年教室受講生遺跡見学。

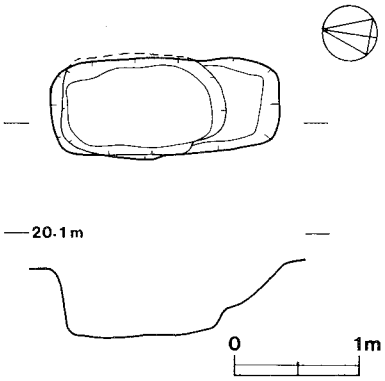
9　月　21日に松原遺跡・南谷津遺跡と併せて航空写真撮影を行う。26日に3遺跡の現地説明会を行い，9月末日をもって予定された全ての調査を終了した。

第3節　遺構と遺物

1　土坑

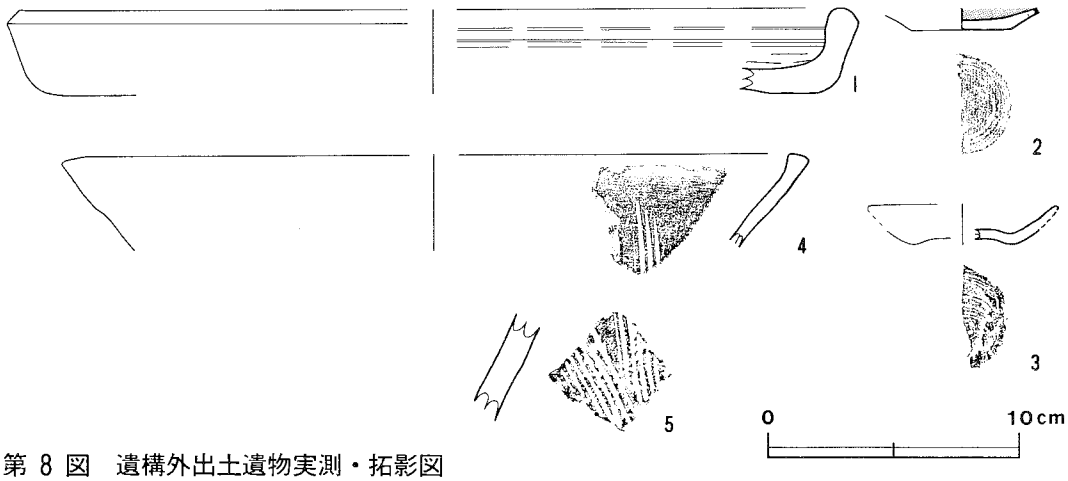
第1号土坑（第7図・PL2－4）

〔**位置**〕調査区の北西端の斜面部B14g7区に位置する。〔**重複関係**〕無し。〔**方向**〕N－13.8°－W。〔**平面形**〕隅丸長方形。〔**規模**〕長径1.83 m，短径0.82 m，深さ0.64 mを測る。縦断面は南東側が「⌐」のような階段状を呈し，北西側は底面から中位にかけてほぼ垂直に，中位から上位にかけて外傾しながら立ち上がっている。横断面は南西側がほぼ垂直に，北東側は底面から中位にかけてオーバーハングし，中位から上位にかけてやや内傾気味に立ち上がっている。底面は長径1.13 m，短径0.58 mの楕円形を呈し，平坦である。本跡は，灰褐色の砂層を掘り込んで形成されており，壁及び底面は極めて硬く締まっている。〔**覆土**〕下層から上層にかけておおよそ黒褐色土，褐色土，暗褐色土の順で堆積しているが，各層には多量の砂粒や粘土ブロックが含まれており，人為堆積と考えられる。〔**遺物**〕無し。〔**時期**〕本跡に伴う遺物が出土していないため，時期や性格については不明である。しかし，確認調査の過程で，本跡が確認されたB14g4グリッドから近世の擂鉢片や瓦片等が出土していることを考え合わせるなら，時期は近世以降の可能性が高い。



第7図　第1号土坑実測図

2　遺構外出土遺物（第8図）



第8図　遺構外出土遺物実測・拓影図

表面採集及びグリッド発掘中に出土した遺物は，土師器片38点，須恵器片1点，陶磁器片9点，内耳土器片5点，土師質土器片1点である。そのほかに雲母片岩や瓦片が数点出土しているが，いずれも小破片であり，器形の窺えるものは極めて少ない。拓本・実測可能なものを以下に掲載した。

表2　グリッド別出土遺物点数

グリッド名	土師器	須恵器	陶磁器	内耳土器	土師質土器	その他
B13c4	3					2
B13c6	15	1	1	2		6
B13c8	1					
B13e4	3		3	1		5
B13e6	2					
B14a2	2		1	1		6
B14a4			1	1		
B14a6			1			1
B14c2	1					
B14c6	3					
B14e2	2					
B14e4	1					
B14g4			2			6
B14g6	2					4
表　採	3			1		

1～3は，いずれもグリッドから出土したものであり，遺構に伴うものではない。1は内耳土器片（無耳式）である。体部は直線的に外上方に立ち上がり，口唇部はやや丸みを持ち，縁は面取りされている。底部外面には細かなヒビ（ちぢれ目）が見られる。体部内面には，横位のナデ調整が施されている。現存率は5％で，推定口径33.0 cm，器高4.4 cmを測る。胎土に多量の雲母を含んでいる。2は陶器の皿であり，内・外面にロクロ痕，底部外面に回転糸切り痕が残り，内面には鉄釉が施されている。現存率は30％程で，残存高0.8 cm，底径4.0 cmを測る。3は土師質土器の皿である。底部はやや上げ底で，体部は器厚を減じながらやや内湾気味に外上方に立ち上がる。口唇部がわずかに残存する。底部外面には回転糸切り痕が見られる。現存率30％程で，器高1.9 cm，底径4.4 cmを測る。4・5は擂鉢片である。4は口唇部が平坦で，やや内側に突き出している。櫛目は3本1単位である。5は鉄釉の擂鉢片である。

第4節　まとめ

当遺跡の調査区は，桜川に向かって北東方向にやや張り出した台地の斜面部にあり，所謂『松原古墳群』[1] の中心部からは若干外れた位置にある（第27図参照）。今回の調査によって，この斜面部に古墳が築かれていた痕跡は認められず，また，唯一検出された土坑も台地上に確認された古墳群とは時代的に隔たりがある。古墳群は，今回の調査区よりもやや南側によった台地平坦面に所在しており，むしろ隣接する松原遺跡の調査区が『松原古墳群』の範囲に含まれる。

『松原古墳群』については古墳の封土が完全に失われており，これまでその規模や性格が全く不明のままであった。しかし，昭和61年（1986）5月，主要地方道大穂千代田線道路改良工事に先立ち，広範囲にわたり圃場整備事業が行われ，その過程でこれまで地中に埋もれていた古墳の周溝部分が畑の表面に黒く表れ，不明であった古墳の形状や規模がおおよそ明らかとなった。確認された古墳は，前方後円墳1基（全長約34 m），円墳12基（径約7～26 m，1基は松原遺跡内に所在）であり，ほかに箱式石棺2基が発見されている。当台地の古墳群については，第4章第4節（松原遺跡）で触れることにする。

注

(1) 『　』を付した『松原古墳群』は，今回調査した松原古墳群，松原遺跡，南谷津遺跡の所在する台地上から確認された，十数基の古墳の総称である。今回調査の対象となった松原古墳群と区別する意味で，これら十数基の古墳を総称する場合は，以下『　』を付して記載する。また，以下に述べる松原遺跡から検出された円墳（1基）は，所謂『松原古墳群』に含まれるものである。

第4章　松　原　遺　跡

第1節　遺跡の概要

当遺跡は，大穂町大曽根字松原（現つくば市大曽根字松原）1－1外31筆に所在する遺跡であり，昭和62年4月1日から同年9月30日にかけて調査を実施した。調査の結果，古墳（円墳，周溝のみ）1基，溝14条（堀2条を含む），土坑30基（墓壙及び墓壙の可能性のある土坑10基を含む），道路状遺構5条が検出されている。古墳は，既に封土が削平されていたが，周溝によって円墳と確認されたものである。周溝内から出土した遺物（鬼高期の甕・埦・坏）から，古墳時代後期に構築された古墳と推定され，当遺跡の所在する台地上に形成された『松原古墳群』の一部を成すものと考えられる。また，かつて当遺跡の調査区の付近には，寺院が存在していたとの伝承があり，これを裏付けるかのように第4号溝（第2号堀）からは五輪塔が出土している。また，第30号土坑を始めとする数基の土坑（墓壙）からは人骨が出土しており，これらの墓壙群を区画するかのような溝（第13・15号）も検出されている。

これらの遺構とともに，縄文時代前期から晩期にかけての土器片153点，古墳時代後期を主体とする土師器片948点・須恵器片34点，中・近世の陶磁器片177点・内耳土器片24点・土師質土器片12点，五輪塔（地輪を除く）等が出土している。詳細については第3・4節で扱うことにする。

第2節　調査経過

4　月　松原古墳群の調査と並行して，トレンチ（第1～15号）による遺構確認調査を実施する。

5　月　トレンチ（第2～14号）による遺構確認調査を行う。11～18日にかけて遺跡東側の山林の伐開を行う。25日には第12号トレンチから道路状遺構，第13号トレンチからは多量の焼土を検出した。

6　月　前月に引き続き，トレンチ（第2～4，6～11，14号）による遺構確認調査を行う。4日には遺跡東側の傾斜地について地形測量を行い，5～18日にかけて重機による表土除去及び遺構確認調査を行う。遺構確認調査の結果，道路状遺構や古墳の周溝を確認する。18日には，調査区設定を行った。

7　月　テストピットにより基本土層を確認し，SK1～16，SD1～7，SF1～4，TM1の調査を行う。8，10日には，古墳（TM1）の周溝内から古墳時代後期（鬼高期）の坏や甕が，

23日にはSD4覆土中から五輪塔が出土する。

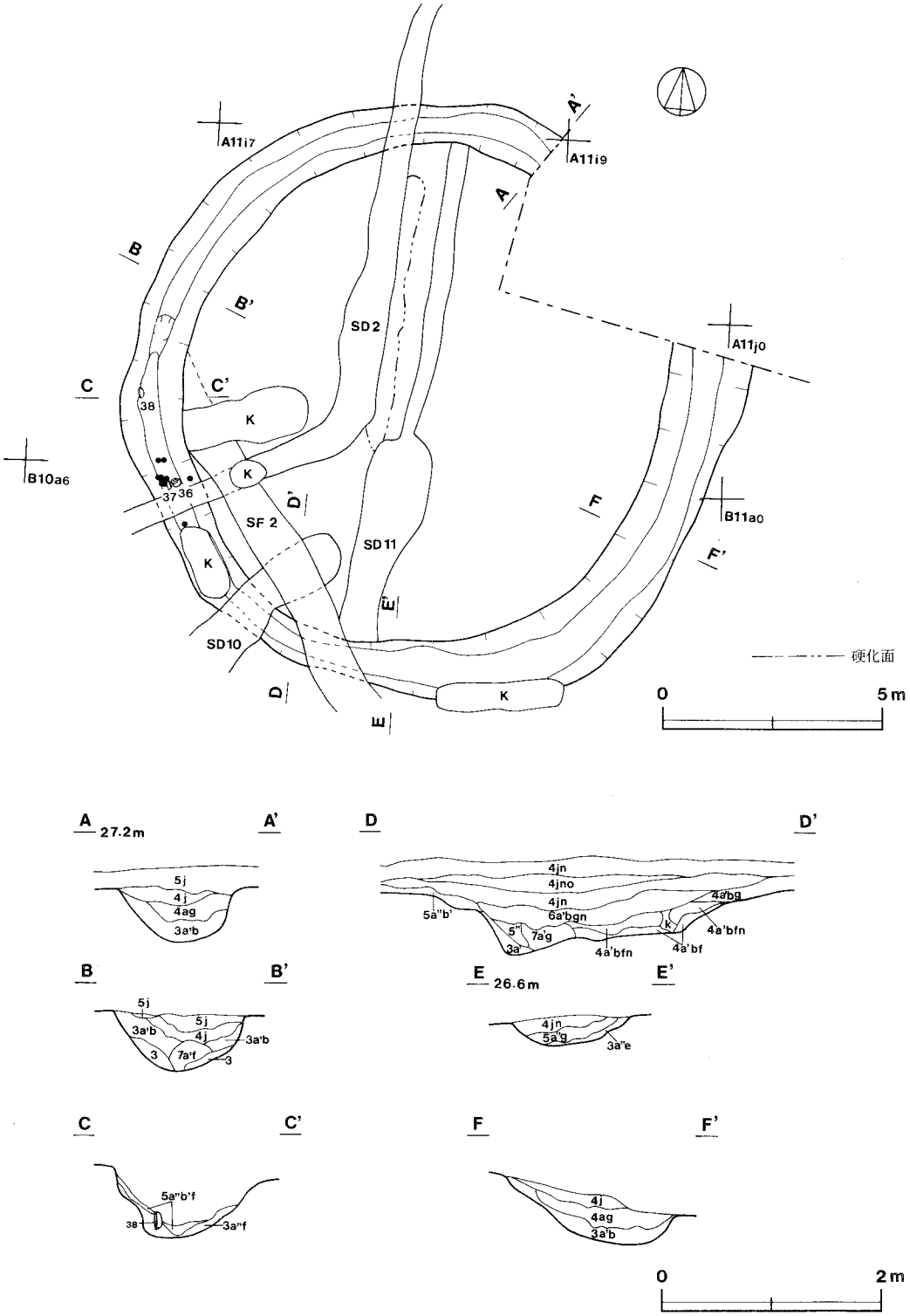
8　月　SK2～5・10～26，TM1，SF2～5の調査を行う。調査と並行して，4，5両日には遺跡西端部について，重機による表土除去及び遺構確認調査を行う。17日にはSD4から五輪塔が出土し，SK17からは骨粉らしきものが検出された。SK13・14・17～30，SD4・5・12・13の調査を行う。14日にはSK26・29から人骨が検出され，18日にはその供養と再埋葬を行った。21日に航空写真撮影，26日に現地説明会を行い，9月末日をもって全ての調査を終了した。

第3節　遺構と遺物

1　古墳

第1号古墳（第9図・PL2－5～7）

〔**現況と確認状況**〕古墳が確認された位置は，調査前まで畑として使用されていた場所であり，古墳の中央部からやや西寄りの部分には，古墳の上を縦断して南北に農道が走っていた。事前調査の段階では，墳丘が既に失われていたため，全くその存在は不明であった。古墳は，試掘・表土除去・遺構確認の一連の調査の過程で，周溝が確認され，始めてその存在が明らかになったものである。〔**位置**〕遺跡東側のA11・B11区にまたがる，台地縁辺部から傾斜地にかけて位置する。〔**重複関係**〕古墳の周溝を切って，3条の溝（SD2・10・11）が走っており，さらに，古墳の周溝及び溝の上に道路状遺構（SF2）が構築されている。〔**墳丘**〕既に湮滅。〔**周溝の規模**〕周溝は，径14m前後の円形状に構築されており，確認面における上幅は0.80～1.90m，下幅0.20～0.80m，深さ0.45～0.70mを測り，「◡」状に掘り込まれている。〔**周溝の覆土**〕部分的にやや差異は見られるが，最下層に多量のローム粒子や少量のローム小ブロックを含む褐色土，中・下層にローム粒子を含む黒褐色土が自然堆積している。最上層は，暗褐色の耕作土である。〔**主体部**〕古墳の中央部からやや南側に寄った位置に，長径5m，短径0.80～1.40m，深さ0.03～0.10m程の長楕円形，もしくは隅丸長方形状の浅い落ち込みが検出された。当初は，主体部を想定して調査を進めたが，覆土（ローム粒子・ロームブロック・粘土ブロックを含む暗褐色土）に締まりがなく，撹乱の状況を示しており，近世の陶磁器片などが出土している状況等から，最終的に主体部ではないと判断した。これ以外には，主体部の痕跡らしきものは確認されていない。〔**遺物の出土状況**〕古墳の中央部から見て，南西側に当たる周溝の底面から，古墳時代後期に比定される土師器の坏（完形）・底部がわずかに欠損する甕・半完形の埦や，土師器片が数点出土している。甕は口を上にして，やや南側に傾いた状態で底面直上から出土し，そのすぐ西側のほぼ同



第 9 図　第1号古墳実測図

一レベルから，割れた埦が正位の状態で出土している。また，その地点から北西に2mほど離れた西壁際の覆土下層（底面から10cm程上位）からは，完形の坏が横位の状態で出土している。これらの土器は，いずれも古墳に伴うものと考えられる。〔**築造時期**〕6世紀中～後半頃と推定される。

2　溝

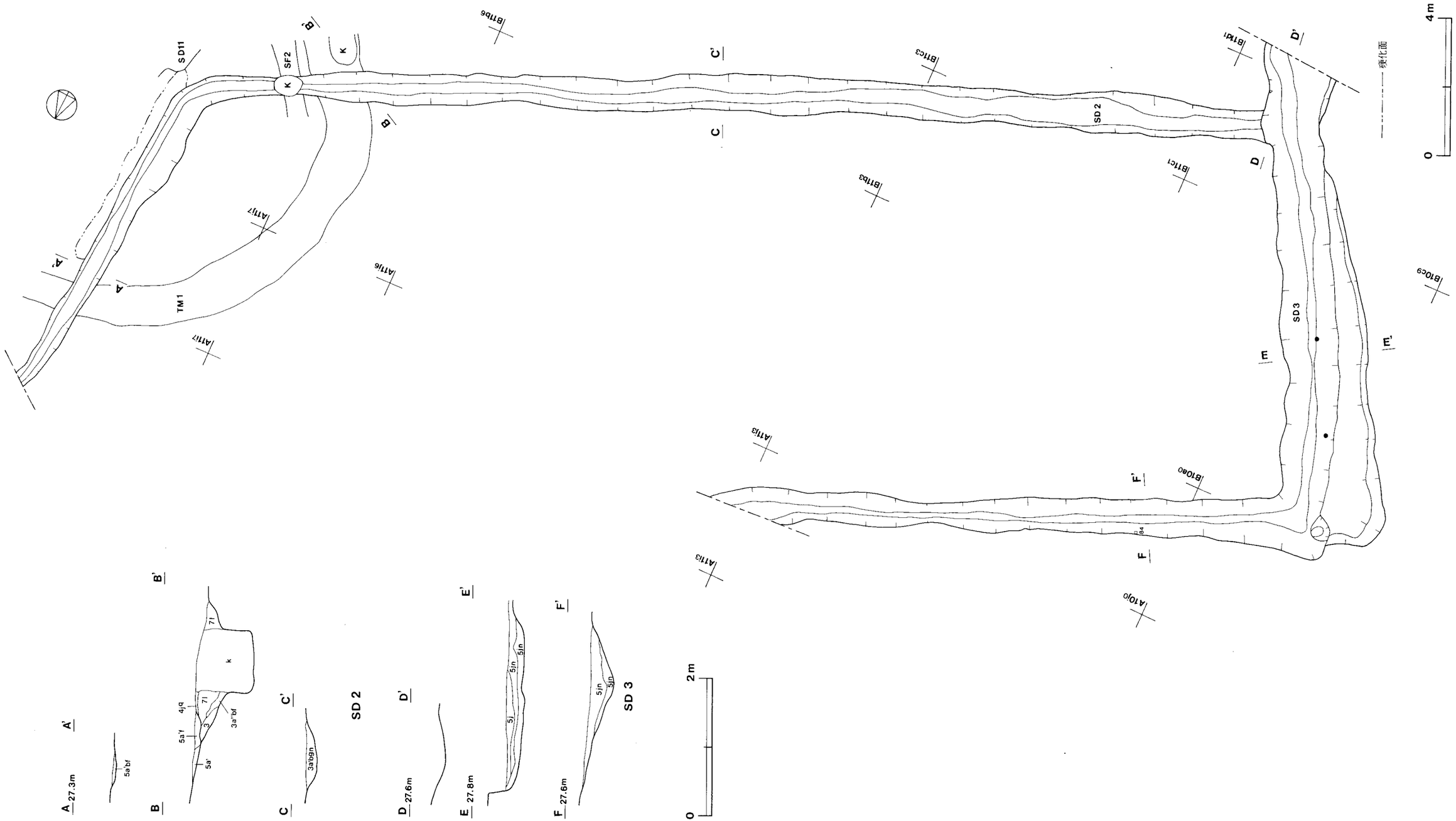
溝は14条検出されたが，整理の過程でSD5を第1号堀，SD4を第2号堀とし，SD8をSF3，SD9をSF4として扱った。また，調査の過程でSX1と呼称した遺構は，SD13と同時期の同じ性格をもつ溝（墓壙を区画する溝）と判断し，新たにSD15と名称を付して記載することにした。溝の名称は，松原古墳群からの継続番号を付して呼称したもので，当遺跡は第2号溝から始まる。

第2号溝（第10図）

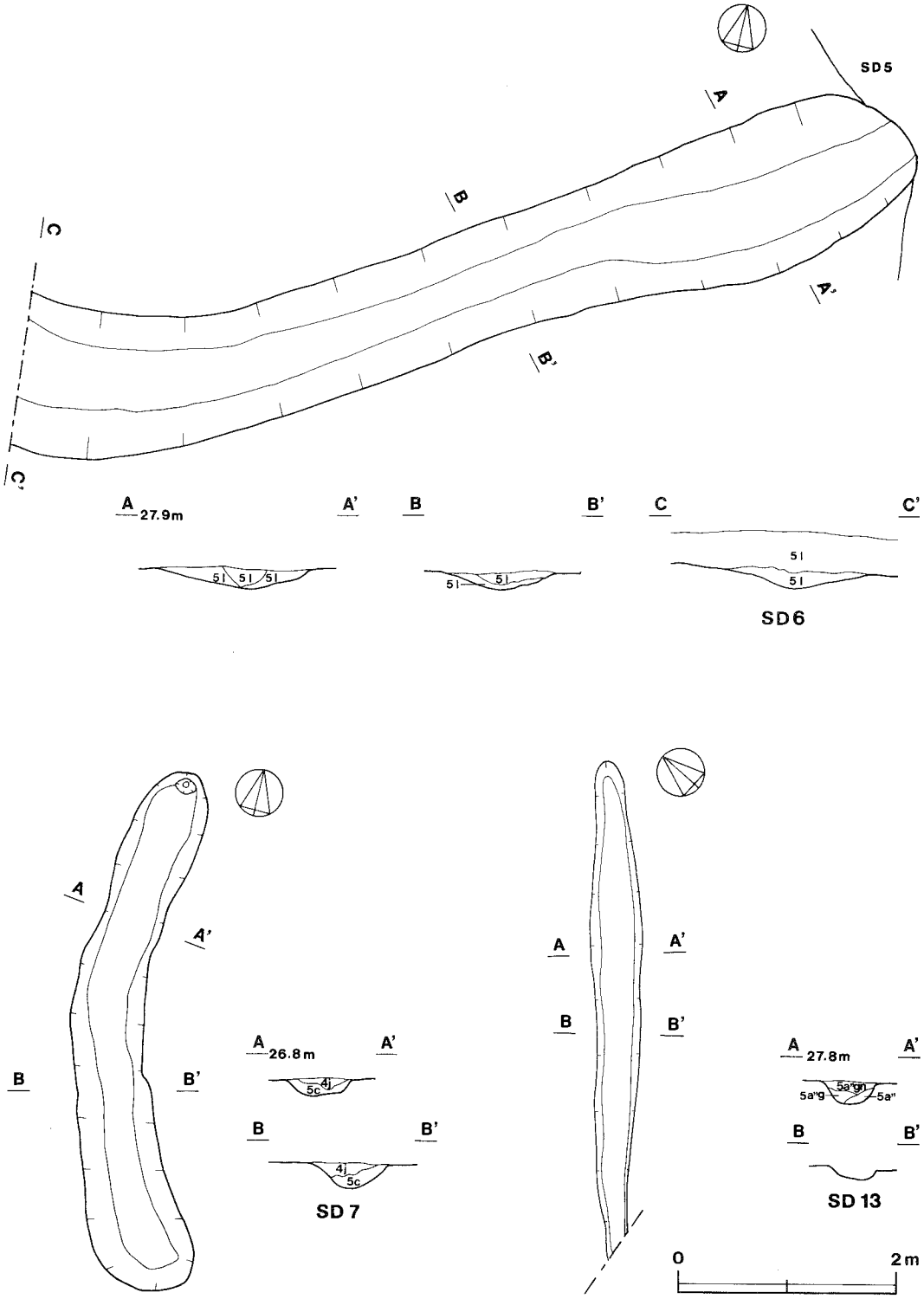
〔**位置**〕調査区の東側A11・B10～11区に位置する。〔**重複関係**〕B10c_0区でSD3とほぼ直交し，A11i_8・B11a_6区付近でTM1と，B11a_7区でSF2と重複する。本跡は，TM1よりも新しく，SF2より古い。SD3との新旧関係は，土層観察によっても明瞭ではなく，覆土の状況から同時期に存在していたものと考えられる。〔**方向**〕SD3との重複部B10c_0区からA11j_7区にかけて，北東方（N－68°－E）に31m程直線的に延び，A11j_7区で北側に60°程の角度で屈曲し，さらに北北東方（N－8°－E）に10m程直線的に延びている。溝の北東端は，さらに調査区外へと延びている。〔**規模**〕全長約41m，上幅0.65～1.23m，下幅0.20～0.85m，深さ0.05～0.16mを測る。〔**形状**〕壁は20～23°の傾斜で緩やかに立ち上がり，断面形状は皿状を呈している。底面は凸凹が激しく，B11c_2区付近が最も高く，南西側及び北東側に緩やかに傾斜している。〔**覆土**〕覆土は1層で，多量のローム粒子・ロームブロックを含む褐色土，または暗褐色土が自然堆積している。〔**遺物**〕覆土中から土師器片21点，須恵器片1点，近世の陶磁器片4点が出土している。

第3号溝（第10図）

〔**位置**〕調査区の東側，A10・11区，B10・11区にまたがって位置する。〔**重複関係**〕A11i_1～i_3区，A10j_8～j_0区，A11j_1区，B10a_7～a_9区にかけて，本跡の上面にSF1が構築されており，B10c_0区でSD2と重複する。SD2は，本跡とほぼ同時期に存在していた可能性が高い。〔**方向**〕A11i_2・i_3区から南西方（N－69°－E）に17m程直線的に延び，B10a_8・a_9区で大きく（約100°の角度）東側に向かって屈曲し，南東方（N－30°－W）に直線的に12.7m程延びている。〔**規模**〕全長29.70



第10図　第2・3号溝実測図



第11図　第6・7・13号溝実測図

m，上幅 0.60 ～ 3.00 m，下幅 0.05 ～ 0.56 m，深さ 0.25 ～ 0.47 m を測る。溝の上幅は，SF 1 との重複部分が狭く，屈曲部から南東方に向かうほど広くなる。本跡の平均的な規模は，上幅 1.50 m，下幅 0.40 m，深さ 0.30 m 前後である。〔**形状**〕壁は 10 ～ 21° の傾斜で緩やかに立ち上がり，断面形状は底がやや丸い「V」字状を呈している。〔**覆土**〕ローム粒子を少量含む暗褐色土が，自然堆積してる。SF 1 との重複部の覆土上層は，本跡の上面が道路として使用されたため，硬化している。〔**遺物**〕土師器片 8 点，陶磁器片 4 点等が出土している。

第 6 号溝（第 11 図・PL3－1）

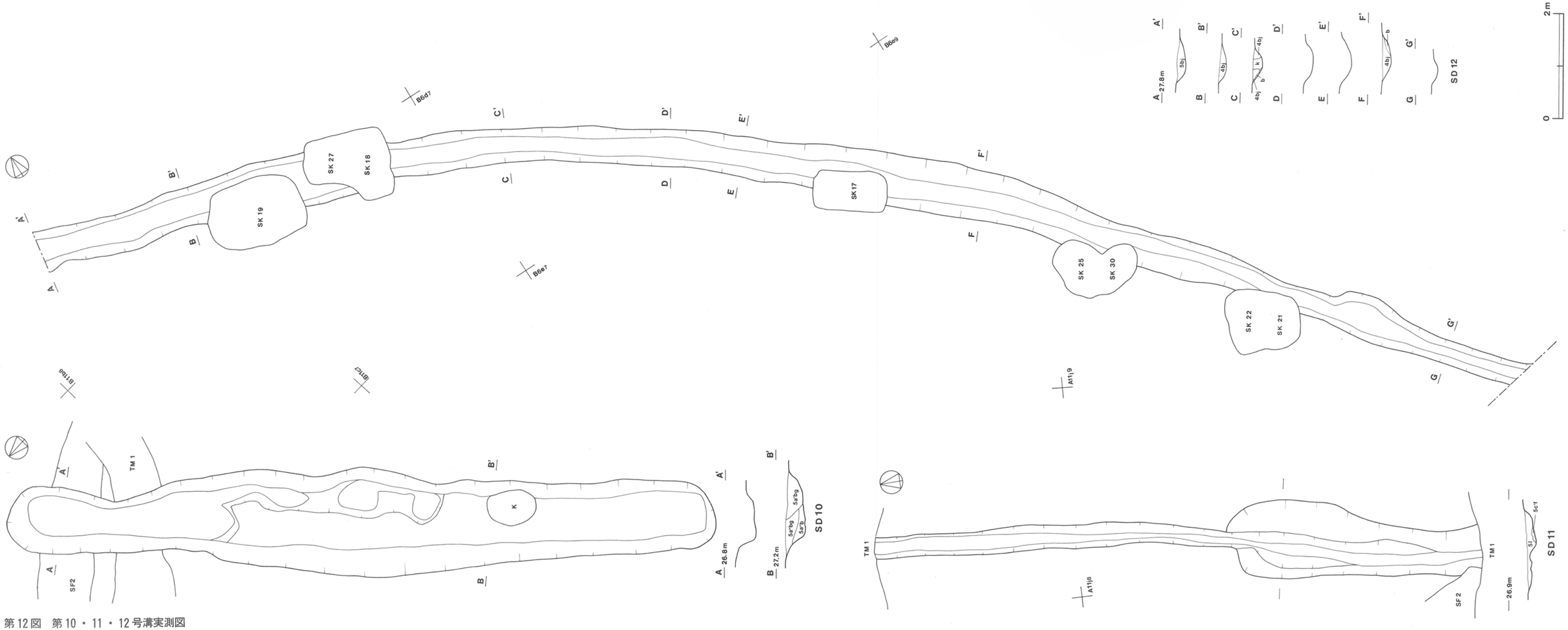
〔**位置**〕調査区の西側，B 7 区に位置する。〔**重複関係**〕B7e4区で第 1 号堀（SD 5 ）と重複し，第 1 号堀の北西壁を掘り込んでいる。〔**方向**〕第 1 号堀との重複部から北西方（N－42°－W）に 7 m 程ほぼ直線的に延び，さらに北側に緩く弧を描きながら北北東方（N－21°－W）に 2 m 程直線的に延びて調査区外に達している。〔**規模**〕全長 9 m，上幅 1.00 ～ 1.42 m，下幅 0.30 ～ 0.60 m，深さ 0.15 ～ 0.20 m を測る。深さは，北西端の調査区外との境界で，現地表面から約 0.5 m を測る。〔**形状**〕壁は 13° 前後の傾斜でなだらかに立ち上がり，断面形は概ね皿状を呈している。〔**覆土**〕1 ～ 2 層からなり，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含む暗褐色土が自然堆積している。〔**遺物**〕覆土中から，縄文式土器片 1 点，土師器片 6 点，鉄片 1 点が出土している。

第 7 号溝（第 11 図・PL4－8）

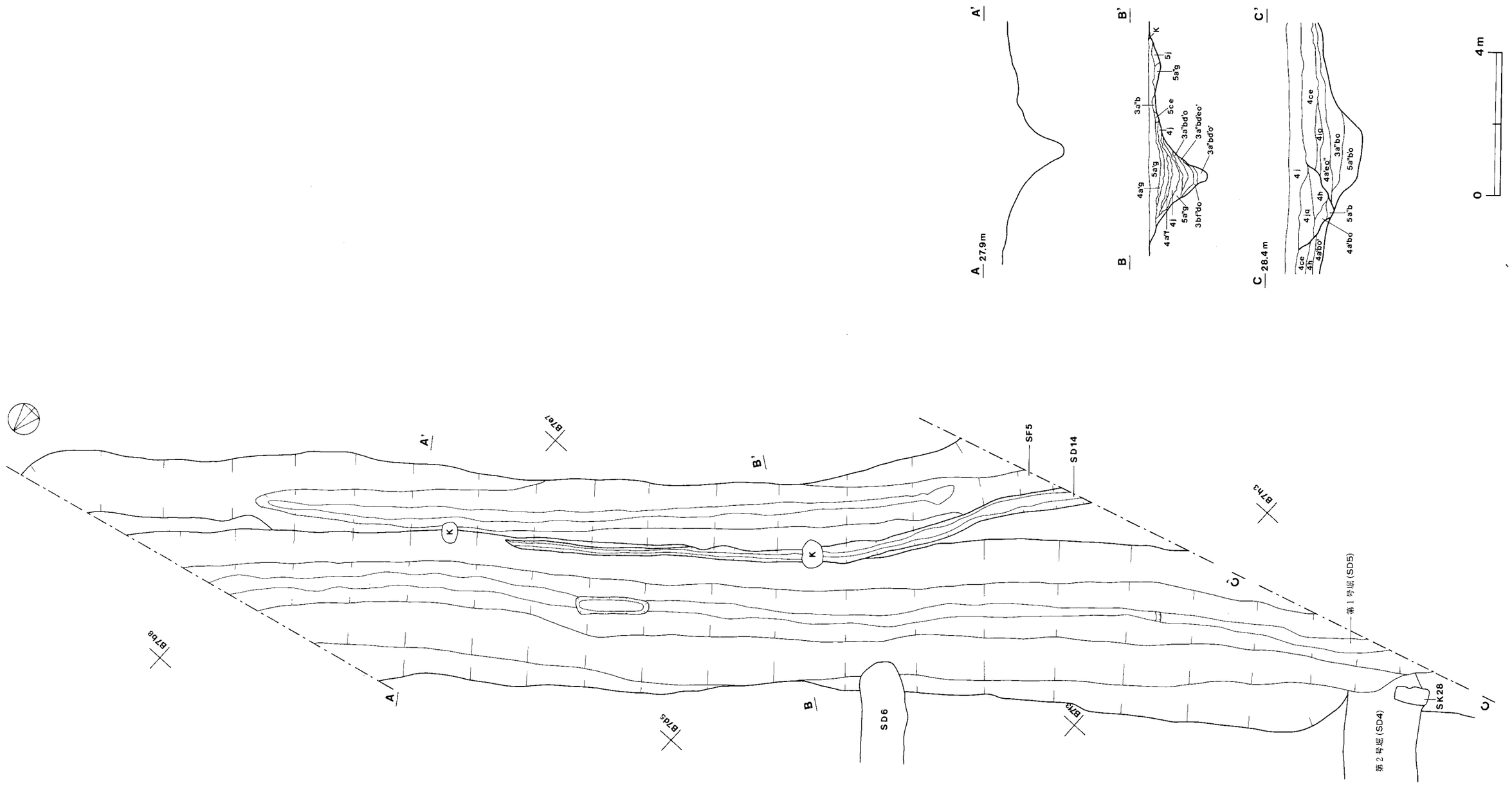
〔**位置**〕調査区の中央部，B 9 区に位置する。〔**重複関係**〕無し。〔**方向**〕B9b7区の溝の南東端から，北北西方（N－23°－W）に 2.5 m 程直線的に延び，中程で北側に向かって湾曲しながらさらに北北東方（N－1°－E）に 2.4 m 程直線的に延びている。〔**規模**〕全長約 4.90 m，上幅 0.55 ～ 0.85 m，下幅 0.20 ～ 0.40 m を測る。〔**形状**〕底面は皿状を呈する部分も見られるが，概ね平坦であり，壁は 41 ～ 47° の傾斜で立ち上がる。断面形状は，皿状または鍋底状を呈している。〔**覆土**〕下層に暗褐色土，上層に黒褐色土が自然堆積している。覆土中には，少量のローム粒子が含まれている。〔**遺物**〕無し。

第 10 号溝（第 12 図）

〔**位置**〕調査区の東側 B 11 区に位置する。〔**重複関係**〕B11a7区で，TM 1 の周溝を底面まで掘り込む。同じ区で，本跡の北東端の上面に SF 2 が走っている。〔**方向**〕B11c5区の南西端部から北東方（N－46°－E）に 13.5 m 程ほぼ直線的に延びている。〔**規模**〕全長 13.50 m，上幅 1.20 ～ 2.10 m，下幅 0.80 ～ 1.30 m，深さ 0.30 ～ 0.38 m を測る。〔**形状**〕本跡は中央部が膨らみ，南東壁際が不定形に細長く掘り込まれている。底面は凸凹が激しく，一部段状を呈している。壁は，北西側が高



第12図　第10・11・12号溝実測図



第13図　第1号堀（SD 5），第14号溝，第5号道路状遺構実測図

く 69° 南西側が低く 48° 前後の傾斜で立ち上がっている。断面形状は「⌣」状を呈し，底面は北東側に向かって緩やかに傾斜している。〔**覆土**〕下層から上層にかけて，多量のローム粒子・少量のロームブロックを含む締まりのある暗褐色土が自然堆積している。〔**遺物**〕無し。

第 11 号溝（第 12 図）

〔**位置**〕調査区の東側，TM 1 の中央部に当たる A 11 ・B 11 区に位置する。〔**重複関係**〕本跡は，TM 1 の中央部をほぼ南北に横断しており，また，本跡の南端部上面には SF 2 が北西から南東方に走っている。〔**方向**〕TM 1 の周溝や SF 2 と重複する$B11b_7$・b_8区から，北北東方（N－3°－E）に 1.65 m 程ほぼ直線的に延びている。溝の両端は不明瞭である。〔**規模**〕全長 11.65 m，上幅 0.25 ～ 0.50 m，下幅 0.05 ～ 0.27 m，深さ 0.05 ～ 0.18 m を測る。〔**形状**〕底面は全体的に凸凹状を呈しており，壁は 45° 前後の傾斜で立ち上がっている。断面形状は「⌣」状を呈している。〔**覆土**〕ローム粒子を含む暗褐色土が，自然堆積している。〔**遺物**〕無し。

第 12 号溝（第 12 図・PL4－7）

〔**位置**〕南谷津遺跡と隣接する調査区の西端，B 6 区に位置する。〔**重複関係**〕本跡は，南東端の$B6h_0$区で第 1 号堀（SD 5 ）と重複し，さらに北西方に向かって$B6g_0$区で SK 21 ・ 22，$B6f_9$区で SK 25 ・ 30，$B6e_8$区で SK 17，$B6d_6$区付近で SK 19 ・ 27 ・ 18 とそれぞれ重複している。本跡は，第 1 号堀より新しく，重複する 8 基の土坑よりは古い。〔**方向**〕第 1 号堀との重複部$B6h_0$区から，西側に向かって緩く湾曲しながら，北西端の調査区外に向かって延びている。主軸方向は，概ね N－38°－W，N－51°－W 前後を指している。〔**規模**〕全長約 30.50 m，上幅 0.50 ～ 1.00 m，下幅 0.20 ～ 0.50 m，深さ 0.10 ～ 0.20 m を測る。現地表面からの深さは，北西端の調査区外との境界で 0.3 m，同様に，南東端で 0.7 m 程である。〔**形状**〕底面は皿状を呈し，壁は 30° 前後の傾斜で立ち上がる。断面形状は，概ね鍋底状を呈している。〔**覆土**〕1 層からなり，ローム粒子を少量含む暗褐色土や黒褐色土が自然堆積している。〔**遺物**〕縄文式土器片 1 点，陶磁器片 5 点，鉄製品 3 点（内，鎌 1 点，用途不明鉄製品 2 点）等が出土している。

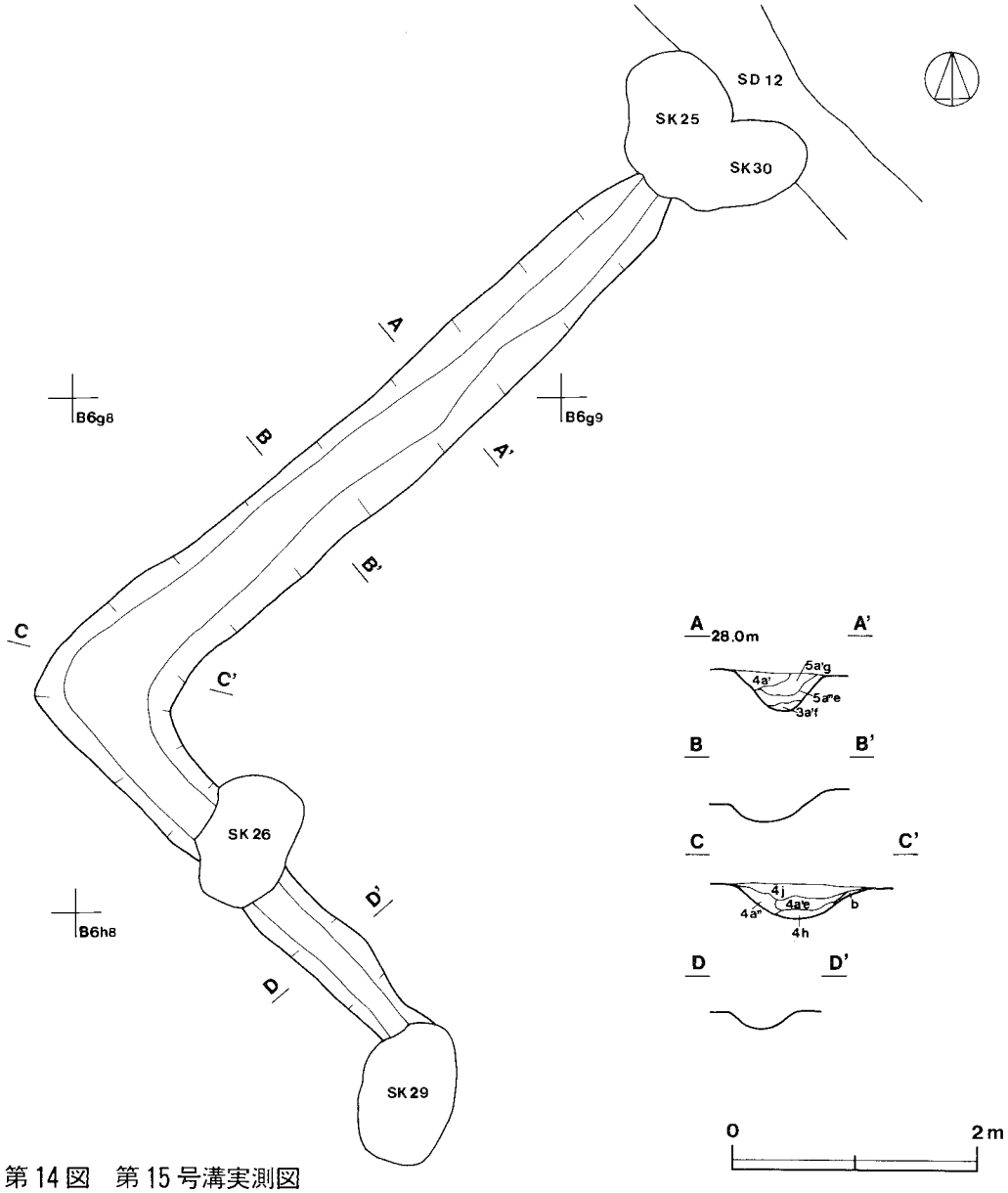
第 13 号溝（第 11 図・PL3－5）

〔**位置**〕調査区の西側，$B6h_9$区，$B6g_9$・g_0区に位置する。〔**重複関係**〕無し。〔**方向**〕$B6h_9$区の調査区外から，北東方（N－50°－W）に 4.5 m 程直線的に延びている。〔**規模**〕全長 4.50 m，上幅 0.20 ～ 0.50 m，下幅 0.12 ～ 0.30 m，深さ 0.10 ～ 0.20 m を測る。〔**形状**〕底面は概ね平坦で，壁は 60° 前後の傾斜で立ち上がる。断面形状は「⌣」状を呈している。〔**覆土**〕下層に褐色土，上層に暗褐色土が自然堆積している。覆土中には多量のローム粒子が含まれており，覆土は全体に締まり

を帯びている。〔遺物〕無し。

第14号溝（第13図）

〔位置〕調査区の西側B7区に確認されたもので，第1号堀とSF5の間に位置する。〔重複関係〕本跡は，第1号堀の南東側の覆土上層を掘り込んでおり，また，本跡の上面にはSF5が構築されている。〔方向〕B7d6区から南側に向かって緩く湾曲しながら，南西方に6.7m程延びている。主軸方向は，N−32°−EからN−50°−E前後を指している。〔規模〕全長6.70m，上幅0.20〜



第14図　第15号溝実測図

0.50 m，下幅 0.10 ～ 0.30 m，深さ 0.10 ～ 0.20 m を測る。〔**形状**〕底面は平坦であり，壁は 65° 前後の傾斜で立ち上がる。断面形状は「 ◡ 」状を呈している。〔**覆土**〕ローム粒子・ロームブロックを少量含む暗褐色土が，自然堆積している。〔**遺物**〕無し。

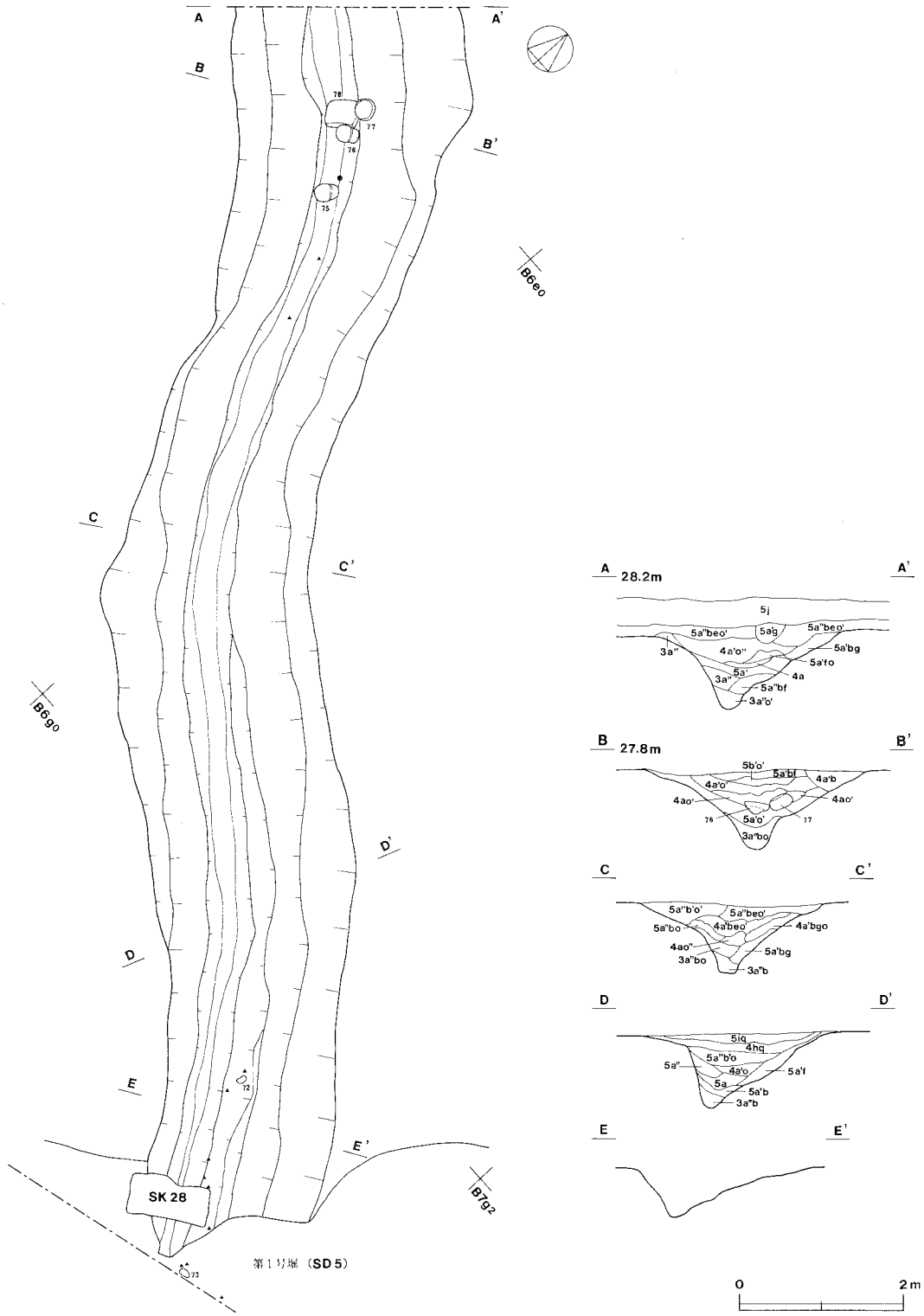
第 15 号溝（第 14 図・PL3－5，4－6）

〔**位置**〕調査区の西側，B 6 区に位置する。〔**重複関係**〕本跡は，北東端の$B6f_9$区で第 4 号墓壙（SK 25）・第 8 号墓壙（SK 30）と，南東側の$B6g_8$区付近で第 5 号墓壙（SK 26），南東端の$B6h_8$区で第 7 号墓壙（SK 29）と重複している。本跡は，これらの墓壙によって掘り込まれている。〔**方向**〕本跡は「 ⌐ 」状を呈しており，$B6f_9$区の北東端部から南西方（N－48°－E）に 7 m 程直線的に延び，$B6g_8$区付近でほぼ直角に屈曲して，南東方（N－42°－W）に 4.5 m 程直線的に延びている。〔**規模**〕全長約 11.50 m，上幅 0.35 ～ 0.90 m，下幅 0.15 ～ 0.50 m，深さ 0.15 ～ 0.30 m を測る。〔**形状**〕底面は皿状を呈し，壁は 28 ～ 55° の傾斜で立ち上がる。断面形状は「 ◡ 」状を呈する。〔**覆土**〕ローム粒子を含む黒褐色土や暗褐色土が自然堆積している。〔**遺物**〕無し。

3　堀

第 1 号堀（SD 5）（第 13 図・PL3－2）

〔**位置**〕調査区の西側，B 7 区に位置する。〔**重複関係**〕$B7g_1$区で第 2 号堀，$B7e_4$区で SD 6 と直交し，さらに，本跡の南東壁に沿って併走する SD 14 ・ SF 5 と重複する。重複するこれらの遺構は，本跡よりいずれも新しい。〔**方向**〕$B7g_1$・g_2区から$B7b_7$・b_8区付近にかけて，北東方（N－50°－E）に約 34 m 程直線的に延びている。溝の両端は，さらに調査区外に延びている。〔**規模**〕全長約 34 m，上幅 1.50 ～ 1.80 m，下幅 0.10 ～ 0.20 m，深さ 1.45 ～ 1.65 m を測る。深さは，南西端の調査区外との境界で，現地表面から 2 m を測る。〔**形状**〕掘り込みは粘土層にまで達しており，底面及び壁面は硬く締まっている。底面はほぼ平坦で狭く，壁は，底面から中位にかけて 52 ～ 73° の急な傾斜で立ち上がり，中位から上位にかけて 28 ～ 43° の緩やかな傾斜で立ち上がる。断面形状が「 ⋁ 」状を呈する薬研堀である。〔**覆土**〕壁際及び下層に多量のローム粒子や少量の粘土・黒色土ブロックを含む褐色土，中・上層にローム粒子を含む黒褐色土が自然堆積している。覆土上層は締まりを帯びているが，下層になるほど締まりが弱い。南東壁際の覆土上層は，併走する道路状遺構（SF 1）によって踏み固められたものと思われ硬化している。また，第 2 号堀と重複する本跡の南端部の土層から，第 2 号堀は，本跡がほぼ埋まった時点で構築されたものであることが明らかとなった。〔**遺物**〕覆土中からは，縄文式土器片 31 点，土師器片 259 点，須恵器片 3 点，用途不明鉄片 1 点が，覆土下層からは陶磁器片 6 点（内，擂鉢片 3 点），動物（牛又は馬）の骨片



第15図　第2号堀（SD 4）実測図

等が出土している。〔**時期**〕近世。

第2号堀（SD4）（第15図・PL3－1，3－4）

〔**位置**〕調査区の西側，B6・B7区にまたがって位置する。〔**重複関係**〕B7g_1区で第1号堀を掘り込んでいる。〔**方向**〕第1号堀との重複部B7g_1区から，中程でやや湾曲しながら北西方に約15mほど延びている。主軸方向は，N－30°－WからN－53°－Wの間を指している。〔**規模**〕全長約20.60m，上幅1.90～2.85m，下幅0.10～0.35m，深さ0.57～0.82mを測る。堀の深さは，南東端部の調査区外との境界で，現地表面から1.35mを測る。〔**形状**〕底面は平坦で狭く，壁は底面から0.3m程の高さまで63°前後の急な傾斜で立ち上がり，そこからさらに確認面まで35°前後の傾斜で大きく外傾しながら立ち上がっている。断面形状が「⋁」状を呈する薬研堀である。〔**覆土**〕壁際及び下層に多量のローム粒子や黒色土を含む褐色土，中層にローム粒子を含む暗褐色土及び黒褐色土，上層にローム粒子や黒色土小ブロックを含む暗褐色土や黒褐色土が自然堆積している。〔**遺物**〕覆土中から縄文式土器片21点，土師器片33点，須恵器片10点，陶磁器片1点（擂鉢），内耳土器片1点，土師質土器片1点，磨製石斧1点，五輪塔（空・風輪2点，火輪1点，水輪1点），石臼1点等が出土している。

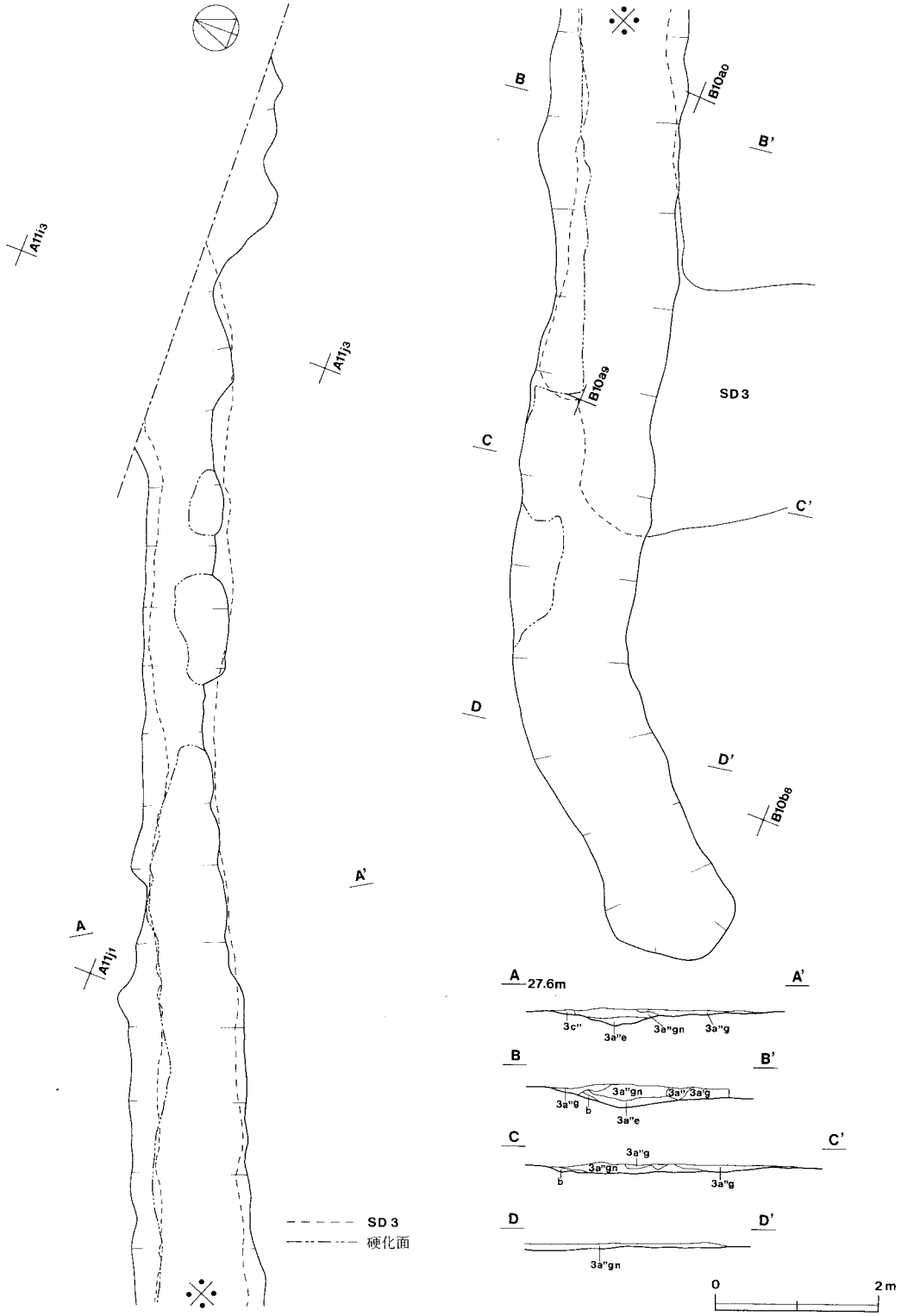
4　道路状遺構

第1号道路状遺構（第16図）

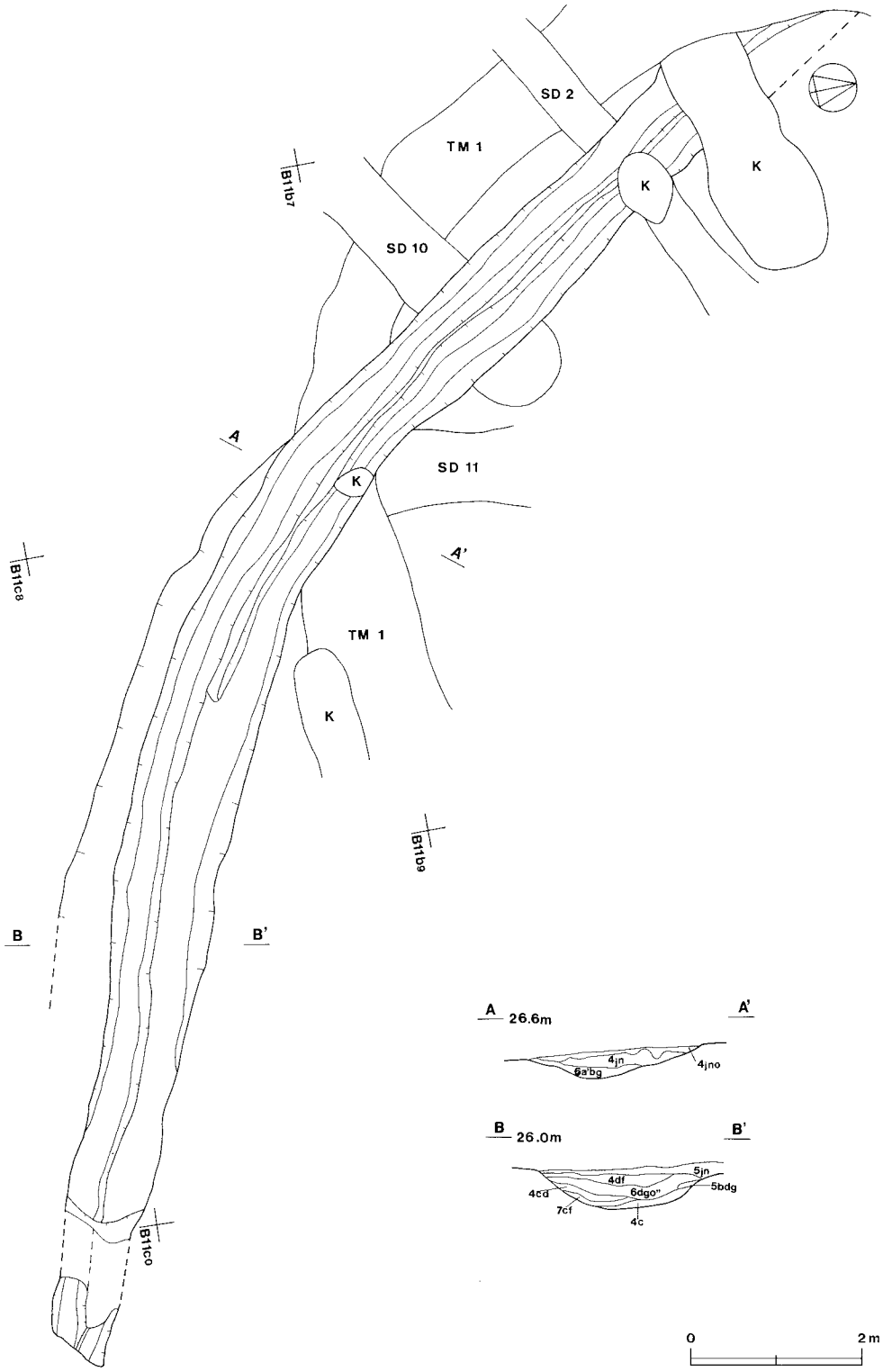
〔**位置**〕調査区の東側，A10・11区，B10区に位置する。〔**重複関係**〕本跡は，SD3の上面に構築されている。〔**方向**〕A11i_3区からB10a_9区にかけて北東から南西方（N－69°－E）に21m程直線的に延び，B10a_9区でやや南側に向きを変え，さらに南西方（N－49°－E）に3.7m程直線的に延びている。〔**規模**〕調査区内における本跡の全長は，23.7mである。最終的な道路幅は0.85～1.75mであり，地山を0.10～0.20m程掘り込んで構築されている。〔**形状**〕道路最下面はほぼ平坦であり，断面形状は概ね皿状を呈している。〔**覆土**〕道路最下面から確認面まで1～3層の堆積層が認められ，最下面には多量のローム粒子を含む締まりのある褐色土，その上には，多量のローム粒子や少量の砂を含む硬化した褐色土が自然堆積している。道路の最終使用面は，確認面とほぼ同一レベルである。〔**遺物**〕覆土中から縄文式土器片9点，土師器片16点，陶磁器片4点，内耳土器片1点，刀子1点等が出土している。

第2号道路状遺構（第17図）

〔**位置**〕調査区の東側，A11区，B11区にまたがって位置する。〔**重複関係**〕本跡は，第1号古



第16図　第1号道路状遺構実測図



第17図　第2号道路状遺構実測図

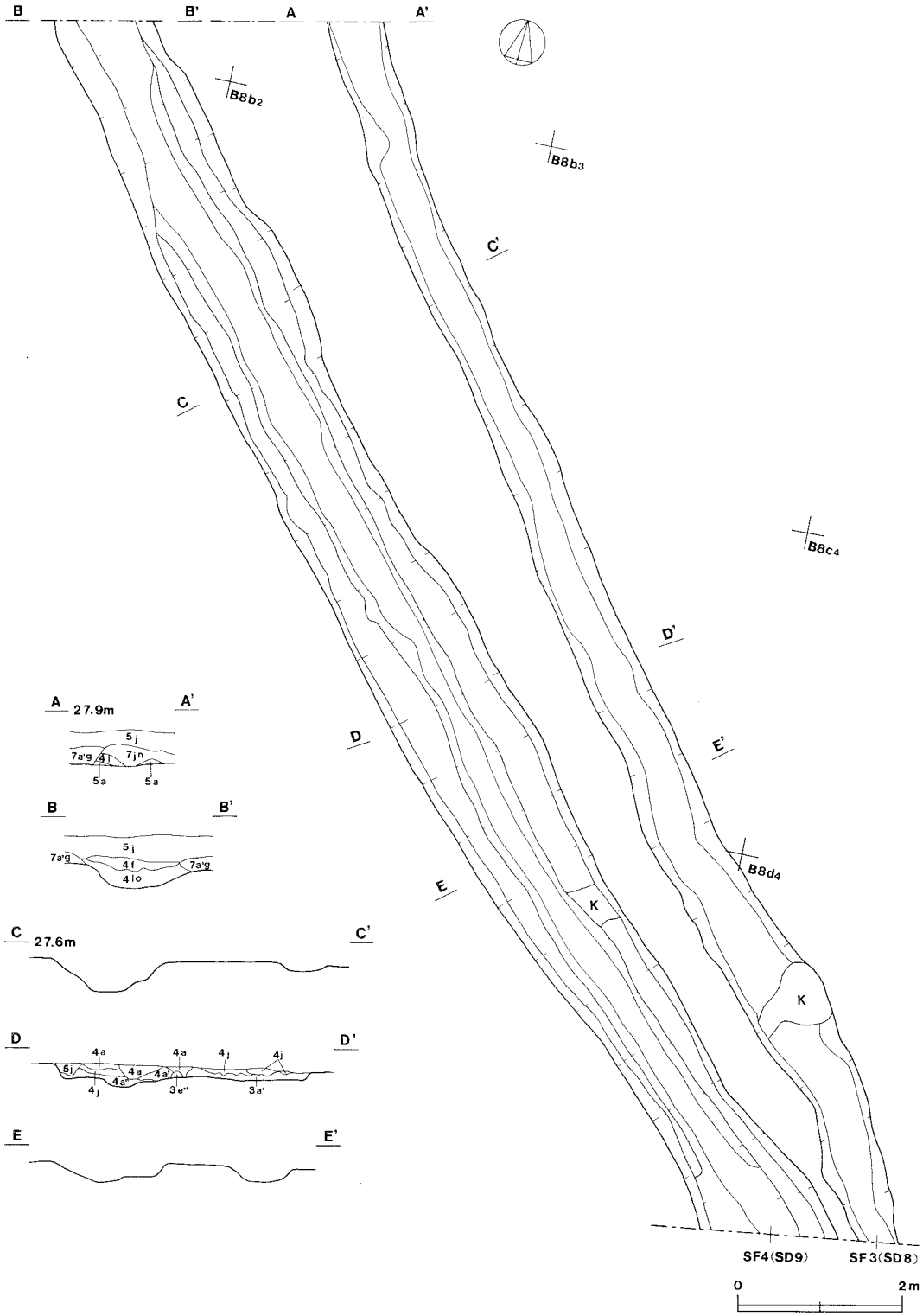
墳（TM１）の周溝，及びSD２・10の上面に構築されている。〔**方向**〕A11j_6区の第１号古墳との重複部から，南東方（N－33°－W）に８m程直線的に延び，中程（B11b_7区）で東側に向かって屈曲し，さらに東南東方（N－65°－W）に向きを変え，10m程直線的に延びている。〔**規模**〕調査区内における本跡の全長は，約18mである。最終的な道路幅は1.00～1.60mであり，地山を0.20～0.45m掘り込んで構築されている。〔**形状**〕底面は皿状を呈するが，掘り込み壁面は階段状を呈しており，断面形状は概ね「レ」状を呈している。壁面の段差は，南東側に行くほど小さくなる。本跡の両端は，不明瞭である。〔**覆土**〕最下面から確認面まで，３～７層の堆積層が認められ，最下層に締まりのある黒褐色土や暗褐色土が５～10cmほど堆積し，その上に15～30cm程の厚さで，粘土小ブロックや砂を少量含む硬化した黒色土や黒褐色土が自然堆積している。本跡の最終使用面は，確認面とほぼ同一レベルである。〔**遺物**〕覆土中から陶磁器片２点，内耳土器片１点，土師質土器片１点が出土している。

第３号道路状遺構（SD８）（第18図・PL3－3）

〔**位置**〕調査区の西側，B８区に位置する。〔**重複関係**〕無し。〔**方向**〕SF４と併走するように，B8a_2区からB8e_4区にかけて主軸をN－35°－W前後に保ちながら，北西から南東方にほぼ直線的に延びている。〔**規模**〕調査区内における本跡の全長は約16.2mである。最終的な道路幅は0.50～0.80mであり，地山を数cm掘り込んでいる。〔**形状**〕本跡は，中央部が全体的にわずかに窪んでおり，断面形状は概ね皿状を呈している。また，本跡の南東側は耕作により，畝状に撹乱されている。地山への掘り込みは数cmに過ぎず，その上位に堆積する旧地表面（極暗褐色土）を10cm程掘り込んでいる。確認面から道路最下面までの深さは，0.40m程である。〔**覆土**〕ローム粒子を少量含む黒褐色の硬化面の上に，極暗褐色土や暗褐色土が自然堆積している。〔**遺物**〕土師器片１点，陶磁器片１点が出土している。

第４号道路状遺構（SD９）（第18図・PL3－3）

〔**位置**〕調査区の西側B８区に位置し，SF３の西側に0.5～２m程の間隔でほぼ併走している。南東端のB8e_4区付近では，その間隔は0.2m前後となる。〔**重複関係**〕無し。〔**方向**〕B8a_1区からB8e_4区にかけて，主軸方向をN－40°－W前後に保ちながら，北西から南東方に17m程直線的に延びている。本跡の両端はさらに調査区外へ延びているが，南東側の調査区外でSF３と重複または交差することも考えられる。〔**規模**〕調査区内における本跡の全長は約16.90m程であり，最終的な道路幅は1.00～1.50m前後である。本跡は，地山を0.20～0.30m程掘り込んで構築されており，現地表面から道路の最下面までの深さは0.60m，最終的な道路面までの深さは0.20m前後を測る。〔**形状**〕SF３と同様に中央部がわずかに窪んでおり，断面形状は概ね皿状を呈してい



第18図　第3号（SD8）・第4号（SD9）道路状遺溝実測図

る。また，南東側は耕作により畝状に撹乱されている。〔**覆土**〕最下層に黒褐色の小ブロック及びローム粒子を少量含む締まりのある黒褐色土が，その上面には硬化した黒褐色土が 0.15 m 程レンズ状に自然堆積している。最上層は耕作土である。〔**遺物**〕無し。

第 5 号道路状遺構（第 13 図）

〔**位置**〕調査区の西側，B 7 区に位置する。〔**重複関係**〕第 1 号堀の南東側，及びそれに併走する SD 14 の上面に構築されている。〔**方向**〕主軸方向をN－49°－E に保ちながら，第 1 号堀に併走するように，南西方に走っている。本跡は，B7f_5区付近で南側に向かって緩く湾曲しながらN－28°－E 前後に向きを変えている。〔**規模**〕調査区内における本跡の全長は約 29 m であり，最終的な道路幅は 1.50 ～ 2.00 m で， 地山を 0.20 ～ 0.25 m 程掘り込んでいる。〔**形状**〕 本跡は第 1 号堀に向かってやや傾斜しており，掘り込みは南西側に向かうほど深くなっている。断面形状は，皿状を呈している。〔**覆土**〕道路の最下面から確認面までの深さは 0.20 ～ 0.25 m 程で， 2 ～ 3 層の堆積層が認められ，ローム粒子を含む硬化した暗褐色土が自然堆積している。〔**遺物**〕縄文式土器片 10 点，土師器片 21 点，須恵器片 2 点，陶磁器片 10 点，内耳土器片 4 点が出土している。

5　土坑（第 19 ～ 21 図）

土坑は 30 基検出されているが，ここでは，そのうち墓壙及び墓壙の可能性のある土坑 10 基について記載し，その他の土坑については一覧表にまとめて掲載することとした。

(1)　墓壙

墓壙は，南谷津遺跡と隣接する調査区の西側 B 6 区から検出されたもので，第 6 号墓壙を除く 7 基の墓壙は，SD 13 と SD 15 によって囲まれた 7 × 8 m 程の方形状の区画内に位置している。

第 1 号墓壙（SK 20）

〔**位置**〕B6g_9区。〔**重複関係**〕無し。〔**方向**〕N－14°－E。〔**平面形**〕隅丸長方形。〔**規模**〕長軸 1.50 m，短軸 1.08 m，深さ 0.34 m を測る。〔**形状**〕底面はほぼ平坦で，壁はやや内湾しながら 46° 前後の傾斜で立ち上がる。南西壁は，他の壁に比べなだらかな傾斜で立ち上がっている。断面形状は概ね「◡」状を呈している。〔**覆土**〕底面に褐色土，中・上層に暗褐色土，最上層に褐色土が堆積しており，覆土中には多量のローム粒子が含まれている。また，底面及び南側の覆土中層には少量の灰が含まれている。覆土は全体に締まりがなく，また，上層に比べ中・下層の締まりが弱い。人為堆積である。〔**遺物**〕人の骨粉が検出されており，また，覆土中からは礫が 2 点出土し

ている。

第2号墓壙（SK 21）

〔位置〕B6g9区。〔重複関係〕SD 12，及び第3号墓壙を掘り込んでいる。〔方向〕N－18°－E。〔平面形〕隅丸長方形。〔規模〕北西壁は不明瞭であるが，おおよそ長軸1.00 m，短軸0.84 m，深さ0.11 m前後の規模と推定される。〔形状〕底面はほぼ平坦であり，壁は60°前後の傾斜で立ち上がる。断面形状は概ね「◡」状を呈している。〔覆土〕底面から上層にかけて，ローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土が堆積している。ローム粒子及びロームブロックは，下層に比べ上層に多量に含まれている。また，上層は締まりを帯びているが，下層になるほど締まりは弱い。人為堆積である。〔遺物〕陶磁器片2点の他に，礫や土師器片・須恵器片が数点出土している。

第3号墓壙（SK 22）

〔位置〕B6g9区。〔重複関係〕第2号墓壙に掘り込まれている。〔方向〕N－20°－E。〔平面形〕隅丸長方形状。〔規模〕長軸1.24 m，短軸0.76 m，深さ0.26 m前後と推定される。〔形状〕底面は南東側に向かってやや傾斜するがほぼ平坦であり，壁は60°前後の傾斜で立ち上がる。断面形状は概ね「◡」状を呈している。〔覆土〕ローム粒子やロームブロックを多量に含む暗褐色土が堆積している。覆土は締まりが弱い。人為堆積である。〔遺物〕礫が数点出土している。

第4号墓壙（SK 25）

〔位置〕B6f9区。〔重複関係〕北東側でSD 12，南西側でSD 15を，また，南東側では第8号墓壙を掘り込んでいる。覆土の状態から見て，第8号墓壙との間には，さほど時間差は感じられない。〔方向〕N－1°－W。〔平面形〕不整楕円形。〔規模〕重複しているため不明瞭な部分もあるが，規模はおおよそ長径1.22 m，短径0.80 m，深さ0.23 m前後と推定される。〔形状〕底面は平坦であり，壁は60°前後の傾斜で立ち上がる。断面形状は「◡」状を呈している。〔覆土〕底面から確認面にかけて，ローム粒子を多量に含む褐色土や暗褐色土が不整合に堆積している。また，上層には多量の炭化物や炭化粒子が含まれている。人為堆積であるが，全体に締まりを帯びている。〔遺物〕底面には25 cm程の間隔で，焼けた2つの石（45 × 15 × 10 cm程の大きさのもの）が並列に北西から南東方向に向けて置かれている。2つの石の間は底面がやや窪み，特によく焼けている。覆土上層からは，人の歯を多数検出する。

第5号墓壙（SK 26）

〔位置〕B6g8区。〔重複関係〕SD 15を掘り込んでいる。〔方向〕N－31°－E。〔平面形〕楕円形。

〔規模〕重複しているため壁の一部が不明瞭となっているが，規模はおおよそ長径 1.11 m，短径 0.80 m，深さ 0.14 m 前後と推定される。〔形状〕底面は平坦で，壁は 43 ～ 62° の傾斜で立ち上がる。断面形状は「◡」状を呈している。〔覆土〕ほぼ中央部に置かれた 2 つの石の間やその周囲には，多量の焼土粒子や炭化粒子・炭化物を含む赤褐色土や暗赤褐色土が堆積しており，壁際や上層には，ローム粒子や焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土・黒褐色土が堆積している。全体に締まりが弱い。人為堆積である。〔遺物〕底面中央に丸みを帯びた 2 つの石（20 × 10 × 3 cm，25 × 15 × 6 cm）が 20 cm 程の間隔で並べられており，覆土下層からは，焼けた人の骨片（基節骨・中節骨等）が多数検出されている。また，覆土中からは石臼が 1 点出土している。

第 6 号墓壙（SK 28）

〔位置〕B7g1区。〔重複関係〕第 2 号堀の調査の過程でその存在が確認されたもので，第 2 号堀によって本跡の上面は掘り込まれている。〔方向〕N－55°－E。〔平面形〕隅丸長方形状。〔規模〕残存規模は，長軸 0.92 m，短軸 0.42 m，深さ 0.41 m を測る。〔形状〕底面は，中央部が第 2 号堀によって一部掘り込まれているが，ほぼ平坦である。壁は，南西壁を除き全体に遺存状態が悪い。南西壁は，65° 前後の傾斜で立ち上がる。断面形状は「◡」状を呈している。〔覆土〕底面上に，ローム粒子や炭化粒子・焼土粒子を多量に含む暗褐色土がわずかに 10 cm 程残存しているに過ぎない。全体に締まりがない。人為堆積である。〔遺物〕覆土中から，焼けた人の骨片が少量検出されている。

第 7 号墓壙（SK 29）

〔位置〕B6h8区。〔重複関係〕本跡は，SD 15 の南東端部を掘り込んでいる。〔方向〕N－17°－E。〔平面形〕楕円形。〔規模〕長径 1.22 m，短径 0.76 m，深さ 0.25 m を測る。〔形状〕底面は凸凹状を呈しており，壁は 70° 前後の傾斜で立ち上がる。断面形状は「◡」状を呈している。〔覆土〕下層に褐色土，中層に暗褐色土，上層に極暗褐色土が人為堆積している。覆土中には多量のローム粒子やロームブロックが含まれており，下層になるほどその量が多くなる。〔遺物〕底面からは，北向きに埋葬（土葬）された人骨が 1 体検出されている。

第 8 号墓壙（SK 30）

〔位置〕B6f9区。〔重複関係〕北西側で SD 12 を掘り込み，南西側で壁及び覆土の一部を第 4 号墓壙によって掘り込まれている。〔方向〕N－64°－E。〔平面形〕楕円形。〔規模〕SD 12 と重複しているため，一部不明瞭な部分もあるが，長径 1.12 m，短径 0.65 m，深さ 0.13 m 前後の規模と推定される。〔形状〕底面はほぼ平坦で，壁は 28° 前後の傾斜で立ち上がる。断面形状は「◡」状を呈

している。〔**覆土**〕壁際に多量のローム粒子を含む褐色土，底面から確認面にかけて多量のローム粒子や炭化粒子・炭化物，少量の焼土粒子を含む黒褐色土が人為堆積している。〔**遺物**〕底面から，西向きに埋葬（土葬）された人骨が1体検出されている。

(2) 墓壙の可能性のある土坑

第23・24号の2基の土坑は，上記の8基の墓壙と同様に，SD 13とSD 15によって囲まれた方形状の区画内（B6g9区を中心とする地区）から検出されたものである。これらの土坑は，検出された位置や土坑の覆土の状態等から，墓壙とも考えられるが，規模や形状が前述した8基の墓壙とやや異なることや，判断しうる資料に欠けること等から，墓壙の可能性のある土坑として扱うことにしたものである。

第23号土坑

〔**位置**〕B6g9区。〔**重複関係**〕無し。〔**方向**〕N－10°－E。〔**平面形**〕隅丸長方形。〔**規模**〕長軸2.40 m，短軸0.95 m，深さ0.67 mを測る。〔**形状**〕底面は平坦で，壁は83°前後の傾斜でほぼ垂直に立ち上がる。断面形状は「◡」状を呈する。〔**覆土**〕底面のほぼ中央部に，径20 cm程の範囲で，灰を多量に含む褐色土が10 cm程の厚さにブロック状に堆積しており，下層から上層にかけて，多量のロームブロックと少量の灰を含む暗褐色土が堆積している。人為堆積である。〔**遺物**〕覆土下層から骨粉らしきものが検出されており，覆土中からは土師器片9点，陶磁器片2点，内耳土器片1点等が出土している。

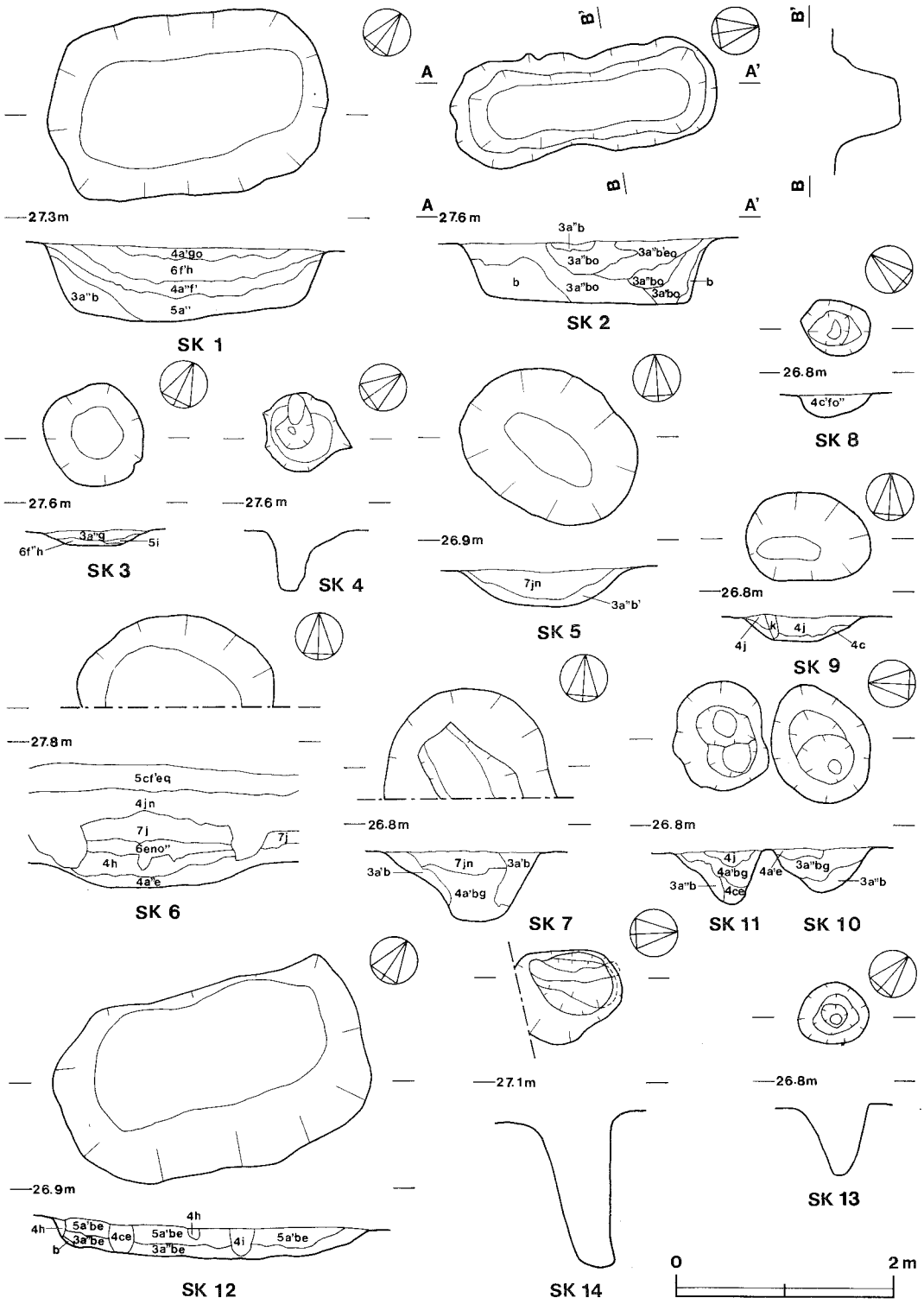
第24号土坑

〔**位置**〕B6g9区。〔**重複関係**〕無し。〔**方向**〕N－9°－E。〔**平面形**〕隅丸長方形。〔**規模**〕長軸4.48 m，短軸1.01 m，深さ1.01 mを測る。〔**形状**〕底面は平坦であり，底面中央よりもやや南西側に片寄った位置に，短軸方向に並列するように径25 cm，深さ20 cm前後の小穴が掘り込まれている。壁は北東・南西壁が67°，北西・南東壁が80°前後の傾斜で立ち上がっている。断面形状は「◡◡」状を呈している。〔**覆土**〕底面及び壁際に，多量の灰やローム粒子・ロームブロックを含む褐色土・暗褐色土が10～20 cmの厚さで堆積し，下層から上層にかけて多量のローム粒子・ロームブロック，少量の灰を含む暗褐色土・褐色土が交互に堆積している。全体に締まりが弱い。人為堆積である。〔**遺物**〕骨粉と思われるものの他に，縄文式土器片3点，土師器片3点，陶磁器片6点，用途不明鉄製品等が出土している。

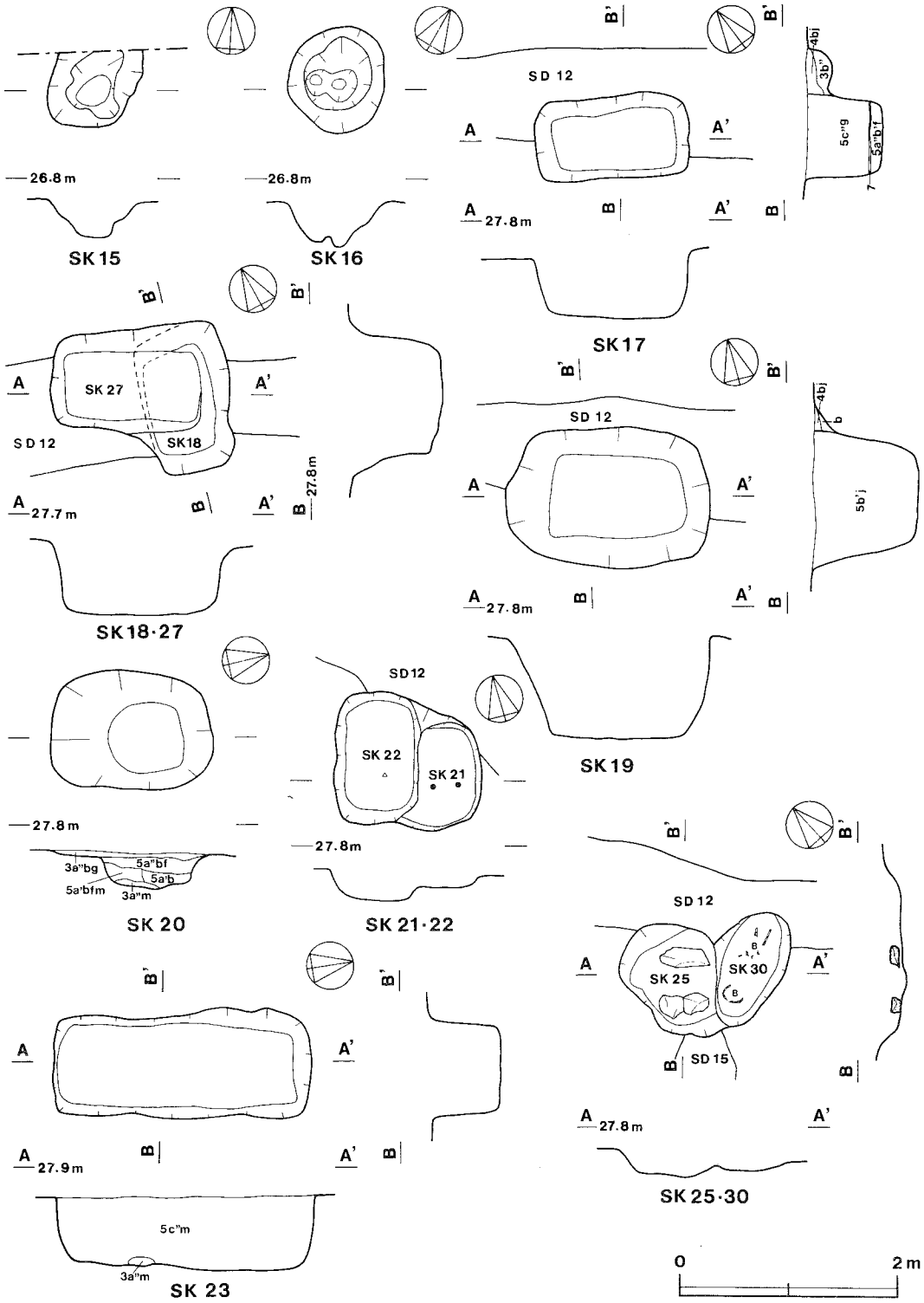
(3) その他の土坑

表3　土坑一覧表

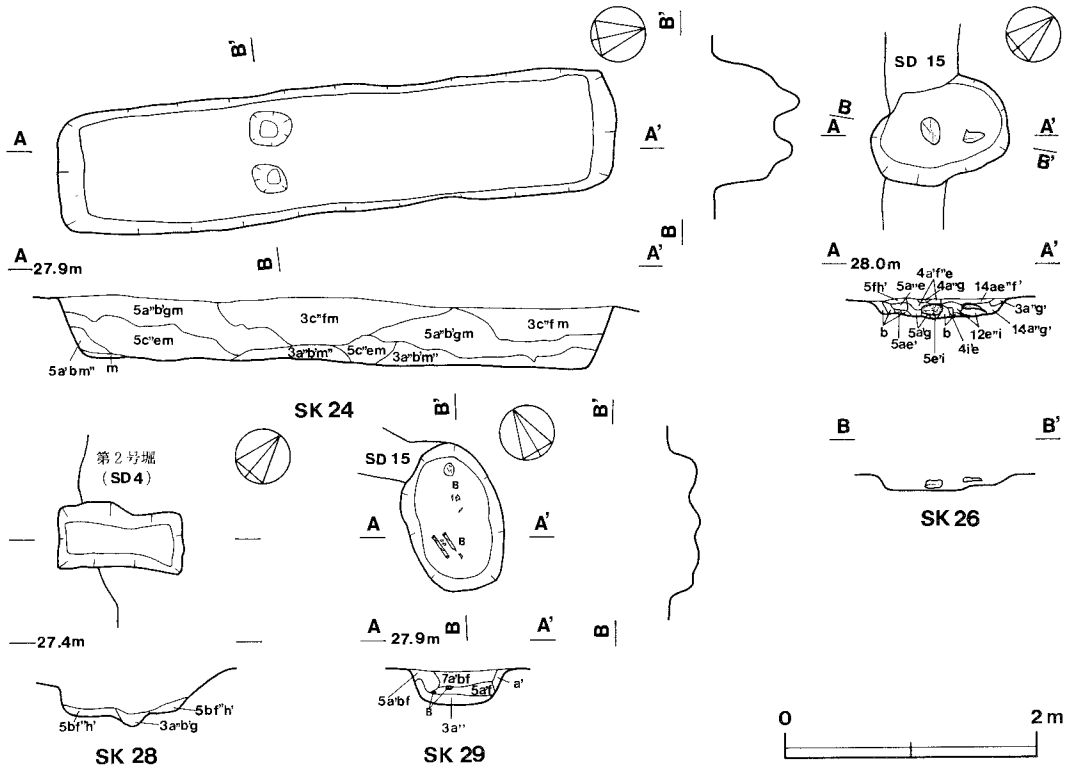
遺構名	位　置	長径方向	平　面　形	規　模（m）			覆土	出土遺物	備　　考
				長径×短径		深さ			
SK1	B11 b_6	N-47°E	隅丸長方形	2.62	1.68	0.69	N	縄3 土5 須3 陶磁2	
2	B10 c_8	N-0°	隅丸長方形	2.43	0.83	0.62	A		
3	A 10 i_7		円　　形	0.97	0.97	0.15	N		底面に多量の炭化物
4	B10 c_6	N-52°W	不整円形	0.73	0.67	0.57	N	縄2 土6 陶磁1	
5	B 9 a_0	N-50°W	楕　円　形	1.68	1.32	0.42	N		
6	B 9 c_9	N-85°W	(楕　円　形)	(1.83)	(1.48)	1.08	N		
7	B 9 c_6	N-19°W	(楕　円　形)	(2.20)	(1.50)	0.68	N		
8	B 9 b_7	N-31°W	楕　円　形	0.65	0.50	0.20	N		
9	B 9 b_7	N-2°-E	楕　円　形	1.17	0.84	0.24	N		
10	B 9 c_2	N-62°E	楕　円　形	1.13	0.91	0.56	N		
11	B 9 c_2	N-65°E	不整円形	1.00	0.86	0.62	N		
12	B 8 c_9	N-39°E	隅丸長方形	2.88	1.71	0.24	N		
13	A 9 j_3	N-37°E	楕　円　形	0.67	0.56	0.65	N		
14	B 8 d_8	N-18°W	楕　円　形	(1.03)	0.80	1.47	N		
15	A 9 a_6	N-11°E	(楕　円　形)	(1.04)	0.79	0.35	N		
16	B 9 a_3	N-27°W	円　　形	1.00	0.88	0.42	N		
17	B 6 e_8	N-51°W	長　方　形	1.41	0.75	0.62	A	礫多数	SD12を切る
18	B 6 d_6	N-13°E	(長　方　形)	(1.33)	(0.85)	0.86	A		SD12を切る
19	B 6 d_6	N-70°W	隅丸長方形	1.88	1.32	0.91	A	礫多数	SD12を切る
27	B 5 d_6	N-67°W	長　方　形	1.65	0.94	0.67	A		SD12を切る



第19図　土坑・墓壙実測図 (1)



第20図　土坑・墓壙実測図（2）



第21図　土坑・墓壙実測図 (3)

6　遺構及び遺構外出土遺物

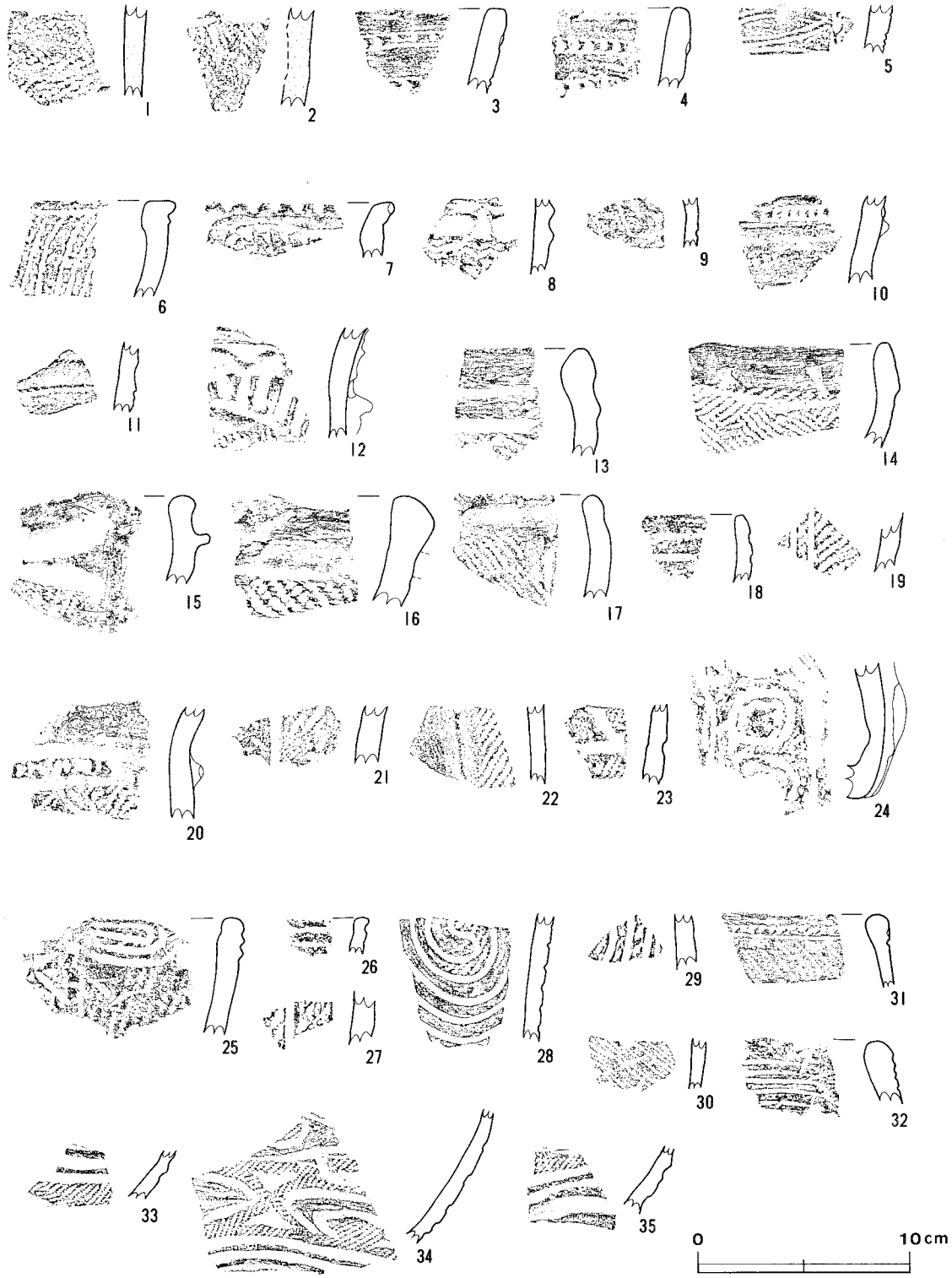
(1)　土器（第22～26図）

○縄文式土器

当遺跡からは，縄文時代の遺構は検出されていないが，遺構の覆土及びグリッド等から縄文時代前期から晩期にかけての土器片が少量出土している。遺構覆土出土の縄文式土器は，直接その遺構に伴うものではないため，ここでは，これらの縄文式土器を一括し，時代ごとに記載することにする。

第1群土器

前期の土器群である。1・2は黒浜式の土器片であり，いずれも単節LRの縄文を施し，胎土に繊維を含む。1はB6g6区，2はトレンチから出土したものである。3～5は浮島Ⅰ式の土器片であり，3・4は半截竹管による平行沈線内に爪形文が，5は半截竹管による柳葉状文（木葉文）が施され，その接点には刺突が加えられている。3・4は第1号古墳周溝の覆土，5はB10c6区から出土したものである。



第22図　出土遺物実測・拓影図（縄文式土器）(1)

第2群土器

中期の土器群である。6～11は阿玉台式，12は中峠式，13～24は加曽利E式の土器片である。6は口唇部及び内面に横ナデ調整が施されており，口縁部には1列の結節沈線文が弧状に施されている。7は口縁端部に棒状工具による押圧が加えられており，口縁部は隆帯により楕円区画され，隆帯に沿って半截竹管による刺突が加えられている。10は，断面三角形の隆帯に沿ってやや幅の広いキャタピラ文が1列施されている。11は，隆帯に沿って結節沈線文が施されている。6～11は，いずれも胎土に雲母を含んでいる。12は，隆帯による区画内に棒状工具による太い沈線が縦位に施されている。6～12は，いずれもトレンチまたはグリッドから出土したものである。13～16・18は波状，17は平縁を呈する深鉢の口縁部片で，13は地文に単節RLの縄文が施され，隆帯と凹線によって区画されている。14は口縁直下に無文帯を有し，以下に単節RLの縄文が羽状に施されている。15は，単節LRの地文上に渦巻文が見られる。16は口縁部を隆帯と幅の広い凹線によって区画し，単節RLの縄文が施されている。17は口縁直下に無文帯を有し，以下に単節RLの縄文が施されている。胴部には「∩」状の沈線が垂下している。18は口縁直下に無文帯を有し，浅い2条の凹線が施されている。19～23は胴部片である。19は，単節LRの地文上に2条の沈線が垂下する。20は，頸部の無文帯下に爪形状の刺突が加えられた幅広の隆帯が貼付され，胴部には単節RLの縄文が施されている。21・22は単節RL，23は単節LRの縄文が施されている。24は山形状の把手であり，側面に沈線が，器表面には沈線による円文が描かれ，径1cm程の孔が穿たれている。13・16・20・23・24は第2号堀，14・15は第1号堀のいずれも覆土から，17・18・21・22はグリッドから出土したものである。

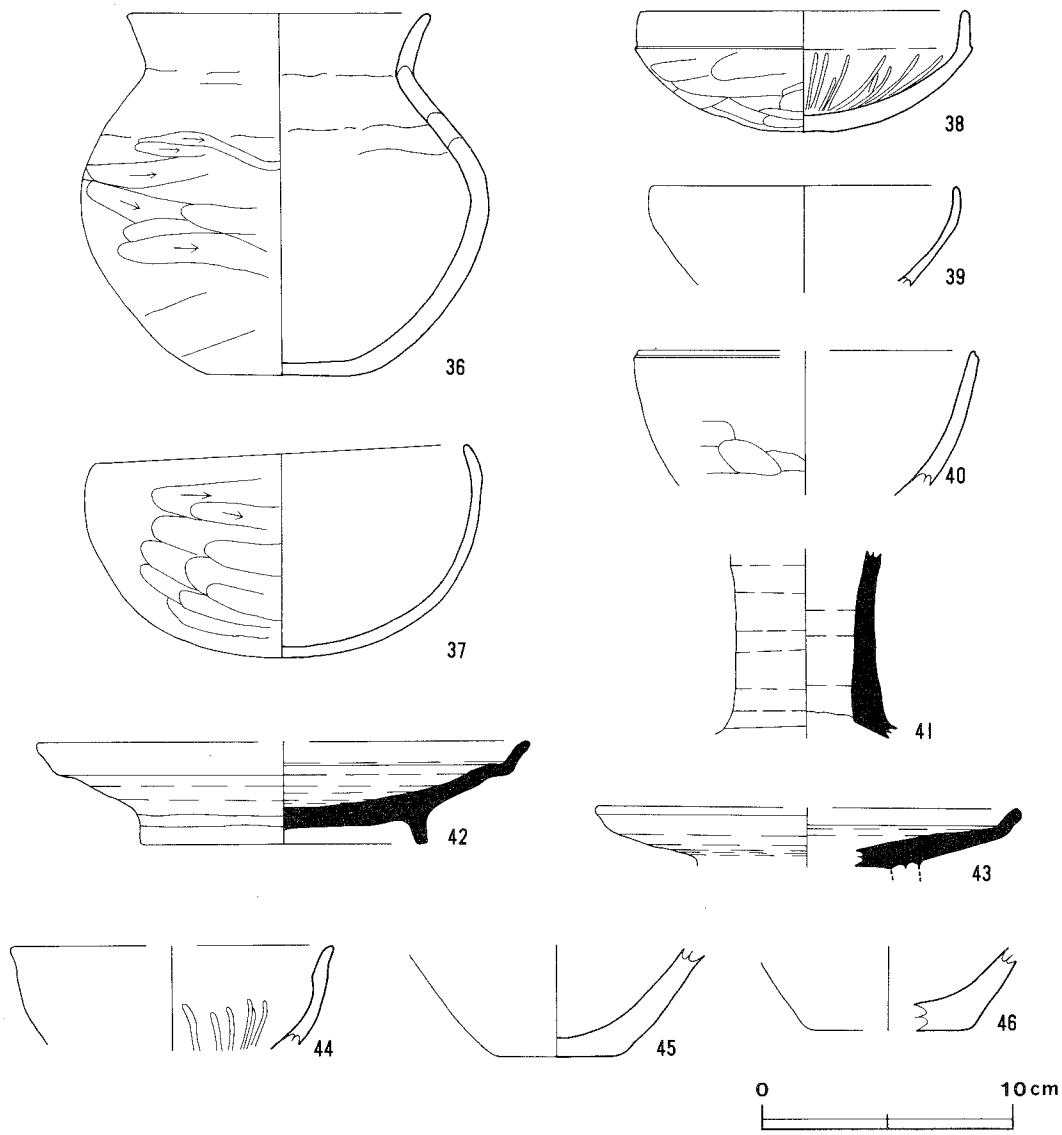
第3群土器

後期の土器群である。25～29は堀之内式の土器片であり，25は，単節LRの地文上に沈線による弧状文が描かれ，隆帯が垂下する。隆帯の上端には円形の刺突が加えられている。26は，口縁直下に細い2条の沈線が見られる。27は，単節LRの地文上に太めの沈線が垂下する。28は，単節LRの地文上に沈線によって描かれた渦巻状の磨消帯が見られる。29は，縄文地文上に沈線による曲線的なモチーフが描かれている。25は第2号堀，27は第15号溝のいずれも覆土から，26・28・29は，トレンチまたはグリッドから出土したものである。

第4群土器

晩期の土器群である。30～32は安行式，33は安行式または前浦式，34・35は大洞式の土器片である。29は，縄文地文上に沈線による曲線的なモチーフが描かれ，30は，櫛歯状工具による沈線文が施されている。31は口縁直下に無文帯を有し，楔状の刺突が1列巡らされ，以下に無節の撚糸文が施されている。32は口唇部の大半を欠損する口縁部片であり，口縁直下には，横位の沈線文が施されている。33は単節LRの地文上に，隆帯と沈線による区画文が見られる。34・35

は同一個体と思われ，細い単節LRの地文上に，隆帯と沈線によって区画された曲線的な磨消帯が見られる。30・31は第5号道路状遺構覆土，31は第1号堀覆土から出土したものであり，33は表採，34・35はグリッド出土の遺物である。

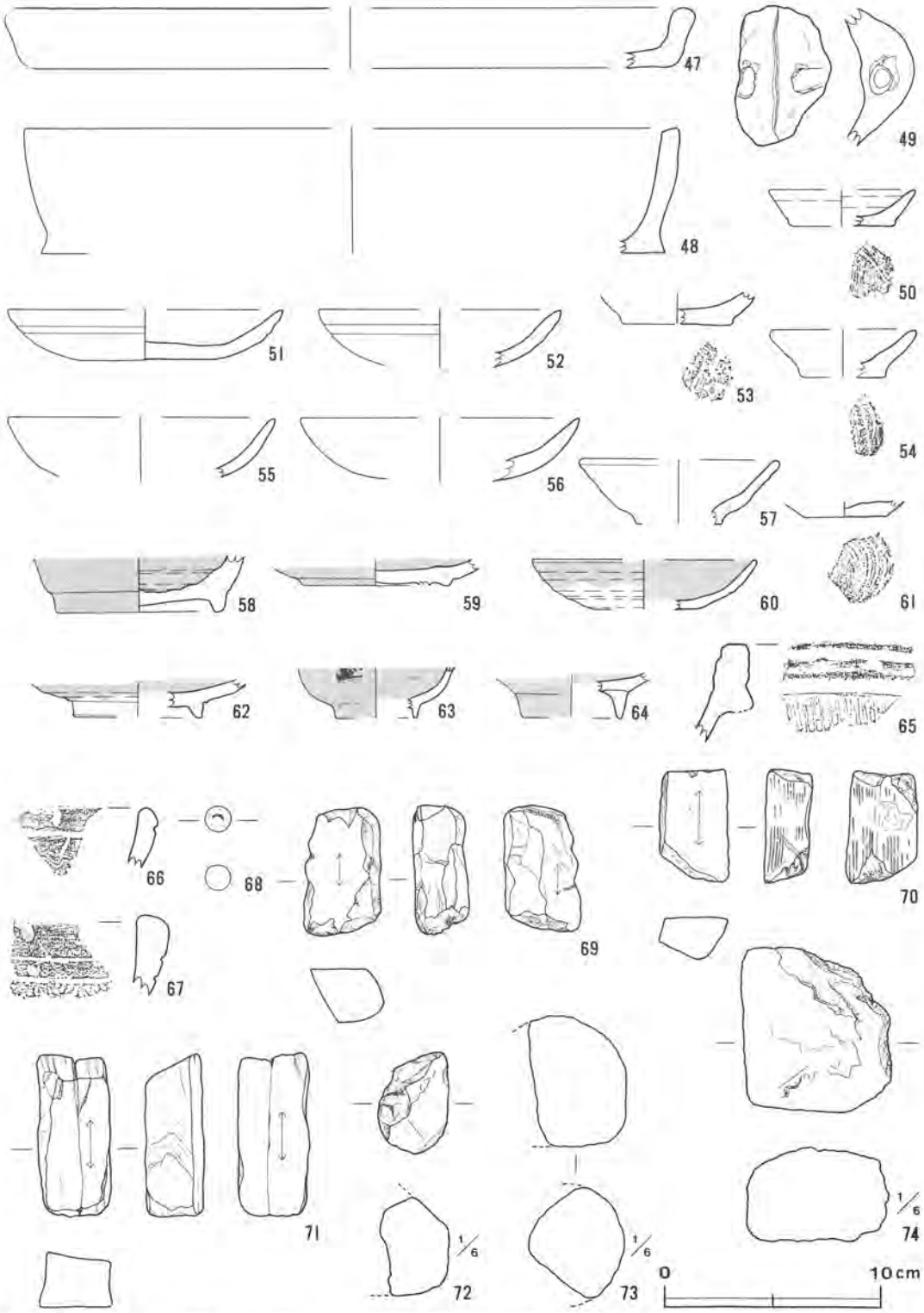


第23図　出土遺物実測図（土師器・須恵器）(2)

○土師器・須恵器

36～39・41は，第1号古墳の周溝覆土，40は周溝外の南側から出土したものである。36は，口縁部及び底部の一部を欠損する小形の甕である。底部は平底を呈し，胴部は内湾しながら立ち上がる。頸部は大きく「く」の字状に屈曲し，口辺部は直線的に外上方に立ち上がっている。最大径は，胴中位よりもやや上に有している。胴上半部には輪積み成形痕が見られ，口辺部は内・

外面とも横ナデ，胴上半部はヘラナデ，胴中位から下半にかけてはヘラ削りの後，ヘラナデ調整が施されている。器表面には，煤が付着している。胎土には砂粒・長石・雲母を少量含み，焼成は普通である。色調はにぶい黄橙色を呈している。口径 12.2 cm，器高 14.5 cm，底径 6.0 cm，最大径 16.4 cm を測る。37 は，現存率 70% 程の丸底の半球形状を呈する埦（盌）であり，口辺部はわずかに内傾している。体部の器厚はほぼ一定しており，口辺部で器厚を減じている。口辺部は内・外面とも横ナデ，体部外面はヘラ削りの後，ヘラナデ調整が施されている。体部外面には，わずかに赤彩の痕跡が認められる。胎土には，少量の砂粒・長石・石英と比較的多量の雲母を含んでいる。焼成は良好であり，色調は赤色を呈している。口径 14.8 cm，器高 8.4 cm を測る。38 は完形の坏で，底部は丸底を呈し，体部は内湾しながら外上方に立ち上がり，口辺部でわずかに内傾する。体部と口辺部との境に稜を有している。口辺部は内・外面とも横ナデ調整，体部外面はヘラ削りの後，ヘラナデ調整が施されている。内面には暗文が見られる。胎土には砂粒・長石・雲母を含み，焼成は良好である。内・外面とも赤彩されており，色調は赤色を呈している。口径 13.1 cm，器高 4.9 cm を測る。39 ・ 40 は，坏の口縁部から体部にかけての破片であり，39 は口縁部内・外面に横ナデ，体部外面にはわずかにヘラナデ調整痕が見られる。胎土には少量の砂粒・長石と多量の雲母を含む。焼成は普通であり，色調は赤褐色を呈している。推定口径は 12.2 cm を測る。40 は，口唇部に強いナデ成形痕が見られ，体部内・外面には丁寧なヘラ磨き調整が施されている。胎土にはわずかに雲母が含まれ，焼成は良好である。色調は赤褐色を呈し，推定口径 13.6 cm を測る。41 は長頸壺（須恵器）の頸部片である。頸部はほぼ垂直に立ち上がるが，上位につれて外反度を増している。内・外面に粘土紐巻き上げ成形痕を残す。外面にはわずかに自然釉がかかっている。胎土に砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐灰色を呈している。42 ・ 43 は，第 2 号堀覆土から出土したものである。42 は須恵器の盤であり，体部は直線的に開き，口縁部は外反し，口唇部は丸味を持っている。高台は「ハ」の字状に開き，接地面は平坦である。器面に水挽き成形痕が残る。胎土に砂粒・長石を含み，焼成は良好である。色調は灰黄色を呈している。現存率は 35% 前後で，推定口径 19.6 cm，器高 4.1 cm，高台径 11.2 cm，高台高 1.1 cm を測る。43 は，高台を欠損する須恵器の盤である。体部は直線的に開き，口縁部は外反し，口唇部は丸味を持っている。体部と口縁部の境には強いナデ痕が見られる。胎土には，多量の雲母と少量の砂粒・長石を含む。焼成は普通であり，色調は黒褐色を呈している。現存率は 10% 前後である。44 ～ 46 は，トレンチまたは表採の遺物である。44 は底部を欠損する土師器の坏の破片であり，内面には暗文が見られる。胎土には砂粒・長石・雲母を含み，焼成は良好である。色調は明赤褐色を呈している。45 ・ 46 は土師器の甕の底部片である。



第24図　出土遺物実測・拓影図（土師質土器・陶磁器・土製品・石製品）(3)

○内耳・外耳土器

47は第23号土坑，48はトレンチ，49は第2号堀から出土したものである。47は口唇部に丸味を持つ。内・外面には横ナデ調整が施され，内面には指頭圧痕が見られる。残存率は5％未満であり，推定口径33 cm，器高2.8 cmを測る。48は底部がやや外側に張り出し，体部は内湾気味に外上方に立ち上がっている。体部は内・外面とも丁寧な横ナデ調整が施されている。現存率は10％未満で，推定口径30.4 cm，器高5.8 cm，底径29.0 cmを測る。49は外耳土器片と思われ，外側に突き出した耳（把手）の部分に径0.8 cm程の孔が一方向（左から右）から穿たれている。器面には煤が付着している。

○土師質土器

50～57は土師質土器の皿であり，50・53・54・56・57・61はトレンチ，51・52・55は第1号堀覆土から出土したものである。50・53・54・57・61は平底で，50・53・54・61の底部には回転糸切り痕が見られる。50は回転糸切り後，ヘラナデ調整を施している。51・52・55・56は丸底を呈し，体部内・外面に横ナデ調整が施されている。51・52は特に強い横ナデ調整痕が見られ，口縁部内・外面に煤が付着している。体部下半から底部にかけては無調整である。

○陶器・磁器・瓦器

58～60は第5号道路状遺構，62はグリッド，63は第2号溝，64・65は第1号堀から出土したものである。58～60，62・64・65は近世瀬戸，63は近世伊万里，66・67は瓦器である。58は鉢の底部片で，内面にロクロ痕が残る。削り出し高台である。胎土は浅黄燈色で，体部下半には明黄褐色の釉が部分的に施されている。59は低い削り出し高台を有する皿であり，浅黄色の釉が施され，貫乳が見られる。底面には目跡が残る。60は鉄釉の皿で，体部下半から底部にかけて露胎となっており，内面には目跡が見られる。62は削り出し高台の皿であり，灰白色の釉が施されている。体部下半以下は露胎である。63は染付の碗である。64は付け高台の碗であり，明黄褐色の釉が施され貫乳が見られる。畳付は露胎である。65は鉄釉の擂鉢の口縁部片である。内面には14条の櫛目が見られるが，1単位当たりの櫛目数は不明である。66・67は，火鉢の口縁部片である。66は1条の横位の沈線下に櫛歯状工具による波状文が，67は2条の沈線間にヘラ状工具による波状文，以下にスタンプ文が施されている。

(2) 土製品

68は，第3号溝から出土した陶丸であり，直径1.2 cm，重量10.5 gを測る。

(3) 石製品

○砥石

69・70はグリッド，71は第2号堀から出土したものである。石質は，いずれも砂岩である。69は使用面が2面であり，最大長6.0 cm，最大幅3.4 cm，最大厚2.5 cm，重量68.0 gを測る。70は使用面が1面であり，残る3面に加工痕が残る。最大長5.2 cm，最大幅3.2 cm，最大厚2.0 cm，重量48.1 gを測る。71は使用面が2面であり，最大長7.1 cm，最大幅3.4 cm，最大厚2.6 cm，重量125.5 gを測る。

○五輪塔

72～78は，第2号堀覆土から出土したものである。石質はいずれも花崗岩である。72・74は火輪，73は空輪の断片である。75・76は空・風輪が同石で造られたものであり，空・風輪は浅い溝によって区画されている。75は最大高25.4 cm，最大径19.9 cm，重量1,345 g，76は最大高24.1 cm，最大径20.1 cm，重量1,290 gを測る。77は水輪であり，押し潰されたような扁平な形状を呈し，やや下方に向かってすぼまっている。最大径24.9 cm，最大高15.3 cm，重量1,510 gを測る。78は火輪である。軒反りは緩やかである。32.7 × 32.1 cmの方形を呈し，最大高16.2 cm，重量2,680 gを測る。

○磨石

79は，第12号溝覆土から出土したもので，約2分の1程が欠損している。石質は安山岩である。

○スタンプ形石器

80・82は，第2号堀覆土から出土したものである。80は断片であり，82は側面に加工痕，底面に使用痕が見られる。最大長10.8 cm，最大厚6.8 cm，重量514 gを測り，底面は三角形状を呈している。石質は，いずれも流紋岩である。

○磨製石斧

81は，第2号堀覆土から出土した基部及び刃部を欠損する磨製石斧であり，残存長7.4 cmを測る。石質は花崗岩である。

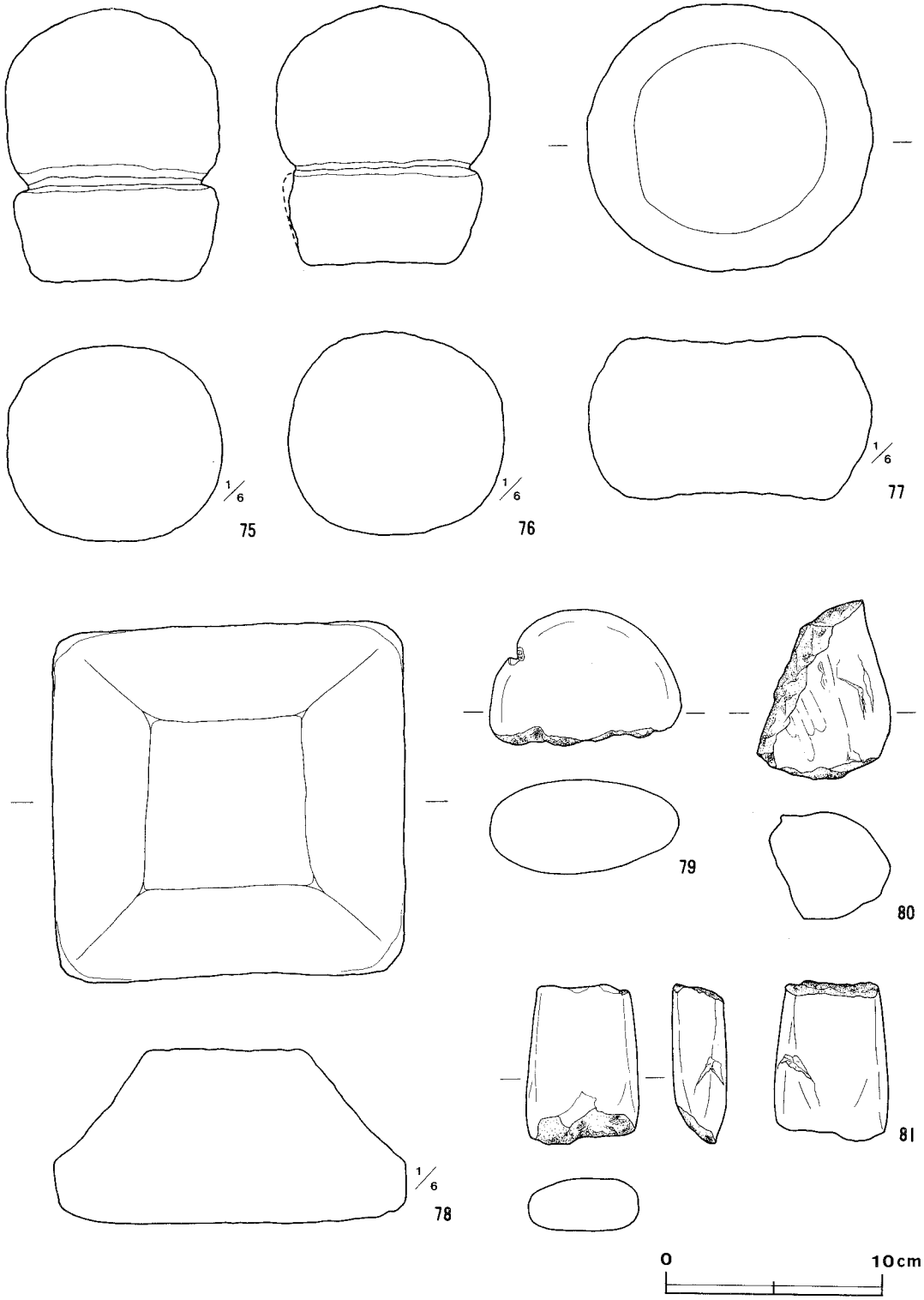
(4) 鉄製品

○鎌

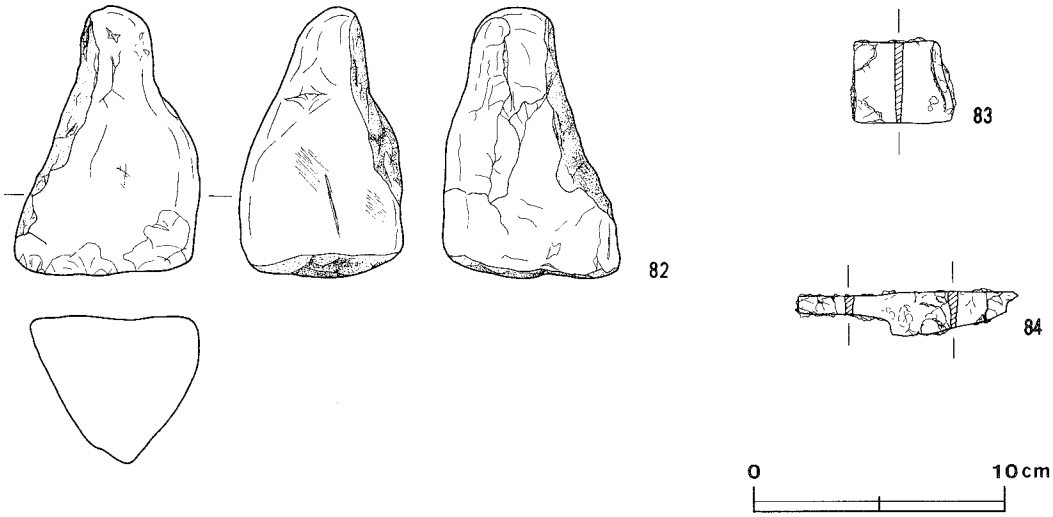
83は，第12号溝覆土から出土したもので，折れ曲がった基部がわずかに残存している。

○刀子

84は，第1号道路状遺構覆土から出土した内反りの刀子で，最大長8.8 cm，最大幅1.7 cmを測る。



第25図　出土遺物実測図（石器・石製品）(4)



第26図　出土遺物実測図（石製品・鉄製品）(5)

第4節　まとめ

松原遺跡・南谷津遺跡の両遺跡は，先にも述べたように，道路を挟んで隣接して所在する遺跡であり，調査の結果，両遺跡から検出された遺構は，位置関係や配置状況等から互いに密接な関連をもつことが明らかとなった。特に，堀や溝については，同一遺構が両遺跡にまたがって検出されており，中世から近世にかけてのある期間において，両遺跡は，同一の性格をもつ遺跡であったことが窺える。このような状況から，ここでは，南谷津遺跡から検出された遺構をも含めて記載することにする。また，松原遺跡から検出された古墳については，第27図に示すように，所謂『松原古墳群』の一部をなすものであるとの認識をふまえ，若干の検討を加えて行くことにする。

1　古墳について（第27図）

所謂『松原古墳群』は，桜川右岸の台地縁辺部に形成された古墳群であるが，封土が完全に失われていたため，長い間，規模や性格は言うまでもなく，その位置すら全く不明であった。しかし，先に述べたように，昭和61年5月，この地一帯の広範に亙る圃場整備が行われ，その過程で，地中に埋もれていた古墳の周溝部が，再びその姿をあらわし，『松原古墳群』を形成する古墳の形状や規模等がおおよそ明らかになった。確認された古墳の数は，第27図に見られるように，松原遺跡の円墳を含め前方後円墳1基（全長約34 m），円墳12基（径約26～27 m のもの6基，14～

第27図　古墳分布図

15ｍのもの6基）であり，この他に箱式石棺2基が発見されている。しかし，これらの古墳の周囲には，他に未確認の古墳が存在している可能性も否定できず，『松原古墳群』を形成していた古墳の実数については，未だ不明と言わざるを得ない。松原遺跡第1号古墳は，周溝が検出されただけで，埴輪の配列の有無や主体部の形態については不明であるが，周溝内から出土した土師器の甕（36）や埦（37），坏（38）等から，古墳時代後期（6世紀中～後半頃）に築造されたものと考えられる。大穂町史[1]によれば，表採遺物等から，確認された他の古墳についても古墳時代後期（6世紀）頃の築造と推定している。『松原古墳群』は，桜川右岸の台地縁辺部に形成されているが，これは，他の多くの古墳（群）の占地がそうであるように，河川や湖沼を臨む台地上が，当時の支配者層にとって政治的にも経済的にも優位に立った「首長」を葬るにふさわしい場所と考えられていたからにほかならない。この台地上からは，これらの古墳群と共に，古墳群の北側に集中するように，24軒余りの住居跡と思われる方形状の黒色の落ち込みが確認されている。未調査のため時期は特定出来ないが，表採遺物や形状等からやはり古墳時代に属するものと考えられる。

当台地上は，古墳時代のある時期には集落が形成され，またある時期には首長層の墓域としても機能していたことが窺える。

2　地割と遺構について（第28図）

松原遺跡及び南谷津遺跡の関連性については先にも述べたが，両遺跡から検出された堀や溝，道路状遺構を現在の地籍図に重ね合わせると，第28図に示すように，現在の地割と一致するものが多く，一致しないものについても，ほぼ地割と方向性が符合していることがわかる。

(1)　地割と一致する遺構

○松原遺跡…第2・3・11・12号溝，第1・5号道路状遺構

○南谷津遺跡…第8号溝

(2)　地割と方向性が符号する遺構

○松原遺跡…第6・8・9・13～15号溝，第3・4号道路状遺構，第1（SD5）・2号（SD4）堀

○南谷津遺跡…第1～7号溝

(3)　地割と関連性のない遺構

○松原遺跡…第7・10号溝，第2号道路状遺構

○南谷津遺跡…第9号溝

次に，これらの遺構から出土した遺物から，遺構の時期や性格について検討を加えてみること

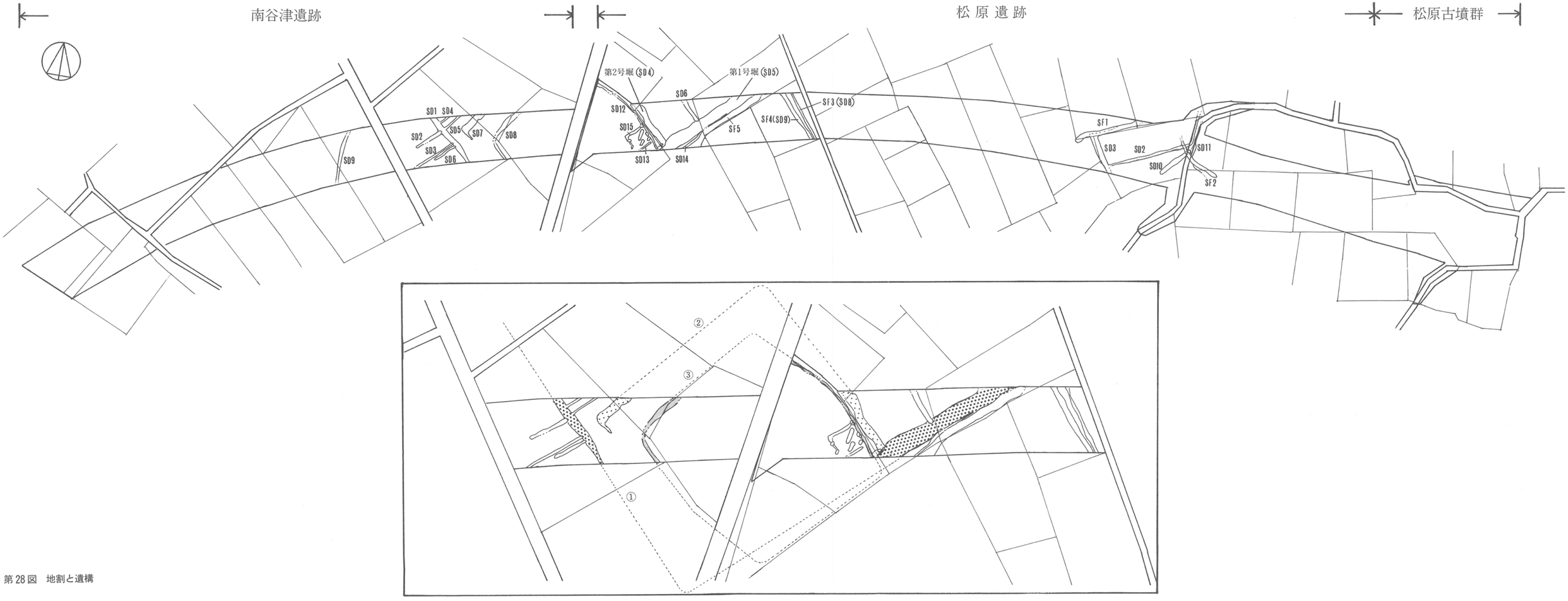
にする。

松原遺跡第2号溝覆土からは，近世伊万里と思われる磁器片（第24図63）や内耳土器片，第3号溝覆土からもやはり近世の陶磁器や内耳土器の小片が出土している。これらの溝は，調査の過程でも新旧関係が把握できず，遺物から見ても同時期に存在していた同一の遺構と考えられる。第2号・第3号溝の上面に構築されている第1号・第2号道路状遺構は，溝の上面に構築されていることから，これらよりも新しい近世の遺構と考えられるが，余り時間差は感じられない。これらの遺構は，いずれも現在の地割と一致する。なお，第1号道路状遺構覆土からは刀子（第26図84）が1点出土している。

第1号堀覆土からは，土師質土器の皿（第24図51・52・55）や近世瀬戸の碗（第24図64）・擂鉢（第24図65）等が出土し，第1号堀の南東側に併走する第5号道路状遺構からは，近世瀬戸の皿（第24図59・60），鉢（第24図58）が出土している。第1号堀と第5号道路状遺構はいずれも近世のものであり，その前後関係については明確でないが，位置関係から見れば，第5号道路状遺構は，堀に沿って歩くという行為の繰り返しによって出来た道であり，堀とこの道との間に見られる細い溝（第14号溝）は，排水溝と考えられる。また，第1号堀は，南谷津遺跡第1号溝と規模・形状が類似し，方向性に共通点が認められる。第1号堀からは土師質土器の皿（第24図51・52・55），近世瀬戸の碗（第24図64）・擂鉢（第24図65）が，南谷津遺跡第1号溝からはやはり近世瀬戸の陶磁器片が出土しており，遺物から見ても，同時期に存在していた同一遺構と考えられる。また，堀や溝の方向性から推定するなら，調査区外でこれらは合流し，全体としては方形もしくは長方形状に構築されている可能性が高い（－①）。なお，規模については第1号溝がやや小規模となっているが，これは現在の地形から見て，後世に第1号溝の上面が削平されたためと思われる。

第1号堀を掘り込んで構築されている第2号堀は，南谷津遺跡から検出された第7号溝と規模・形状がほぼ一致し，それぞれの方向性から推測すると，調査区外で互いに合流し，一辺53m前後の方形状に構築されている可能性が考えられる（－②）。第2号堀からは五輪塔（第24図72～74，第25図75～78）や内耳土器片・土師質土器片（皿）・擂鉢片（近世瀬戸），第7号溝からは土師質土器の皿（第38図51）や近世瀬戸の碗（第38図55）・擂鉢（第38図48・49）が出土しており，遺物から見ても同時期の同一遺構と考えられる。第2号堀は，前述した第1号堀よりも後から構築されたものである。

松原遺跡第12号溝及び南谷津遺跡第8号溝は，いずれも現在の地割と完全に一致している。このことから地割を手掛かりに残る部分を推定すると，第28図のように北東及び南西側の中央部がやや張り出し，北西及び南東側が直線的な六角形状となる。規模は前者が約50m，後者が40m前後と推定される（－③）。第12号溝覆土からは鉄製の鎌（第26図83），第8号溝からは土師


南谷津遺跡
松原遺跡
松原古墳群
第2号堀（SD4）
第1号堀（SD5）
SD1
SD4
SD2
SD3
SD5
SD6
SD7
SD8
SD9
SD12
SD15
SD13
SD14
SD6
SF5
SF3（SD8）
SF4（SD9）
SF1
SD3
SD2
SD10
SD11
SF2
①
②
③

第28図　地割と遺構

質土器の皿（第38図53・54），内耳土器（第38図45），近世瀬戸の鉢（第38図46）・碗（第38図55）・皿（第38図56）・香炉（第38図57），近世肥前の壺（第38図58）の破片や，煙管の羅宇（第38図61），砥石（第38図59），古銭（第39図63～72）等が出土している。出土遺物から近世に構築された溝と考えられ，覆土上層から初鋳年が元文元年（1736）の寛永通寶が出土していることから，少なくとも江戸時代中期頃迄は溝の痕跡が残っていたものと思われる。この溝の内側には，近年まで「天宮様」と呼ばれる祠（江戸時代）が祀られており，地元の人々の信仰を集めていたと言われており，神社の位置を記した江戸時代の絵図が現存している[(2)]。これらのことから，溝は神社の領域を示す区画溝と考えられる。この溝は，第1号堀よりも新しいものであることが確認されている。

「天宮様」を囲むように検出された溝や堀は，位置や方向性，配置等から，いずれも神社の領域を示す近世の区画溝との性格付けが可能であり，遺構の新旧関係から，①（松原遺跡第1号堀・南谷津遺跡第1号溝）→②（松原遺跡第2号堀・南谷津遺跡第7号溝）→③（松原遺跡第12号溝・南谷津遺跡第8号溝）の変遷過程をたどり，次第に規模が縮小されていったものと考えられる。松原遺跡第12号溝と接するように検出された第15号・第13号溝は，方形状に構築されており，方形状の区画内からは墓壙が検出されている。この溝は墓域を区画する溝と考えられる。墓壙の一部が，第12号溝を掘り込んでいることから，墓域は神社を区画する第12号溝よりも新しい江戸時代中期以降のものと考えられる。この一帯は，江戸時代中期以降のある時期において，その一部が墓域として利用されたものと思われる。

南谷津遺跡第9号溝は，出土遺物から奈良時代に位置付けられ，地割との関連性はない。ここで取り上げなかった他の溝や道路状遺構については，地割との関連性や出土遺物，新旧関係等から，いずれも近世に属するものと考えられる。

現在の地割が，果していつの時代に行われたのかは明らかではないが，古くは古代国家の財政的基礎となった条里制がある。現在でもこの条里制の跡は全国各地に残っており，県内でも，常陸太田市周辺の山田川・久慈川流域や，里川流域などの地に条里遺構が認められる。桜川流域では，かつて新治郡衙が置かれた真壁郡協和町古郡付近の門井条里，真壁町付近の伊佐々条里，柴尾条里，桜井条里，筑波郡筑波町（現つくば市）の神郡条里，新治郡桜村（現つくば市）の金田条里・上室条里等の存在が指摘されている[(3)]。中世の城郭（屋代城）遺構と現在の地割が一致した例としては，竜ヶ崎市屋代B遺跡[(4)]の例が上げられる。屋代B遺跡の例から地割と遺構との関係を見ると，この場合，中世に城の縄張りが行われて新たな地割が生じ，それ（土塁や堀等）が城の廃絶後も土地利用の上で大きな制約となり，現在に至る地割（畑や山林の境界）の原形となったものと考えられる。松原遺跡や南谷津遺跡から検出された堀や溝（「天宮様」を囲む）と地割との関連についても，やはり，「天宮様」を囲む神域の区画溝（堀）が，以後の土地利用に大きな制

約（影響）を及ぼし，現在に至る地割の原形となり，畑の境界として現在に至るまで残ったものと考えられる。この区域を除く周囲の地割については，いつの時代にその原形が出来たのかは明らかでないが，その他の溝や道路状遺構と地割との関連性から，少なくとも近世には，現在の地割とほぼ同様の地割が存在していたものと思われる。

3　土坑について

松原遺跡からは30基の土坑が検出されているが，墓壙を除く20基の土坑は，覆土から流れ込みと思われる縄文式土器・土師質土器・陶磁器の小片がわずかに出土しているだけで，覆土も締まりのないものが多い。時期や性格に付いては不明であるが，いずれも近世もしくは現代に属するものと思われる。

注・参考文献

(1)　西宮一男「大穂地方の古墳」大穂町史　つくば市大穂地区教育事務所　平成元年3月

(2)　安田英夫氏（元大穂町社会教育指導員）の御教示による。絵図は，若森在住大久保三郎氏が所蔵する。

(3)　志田諄一「常陸国の成立と展開」茨城県史原始古代編　茨城県　昭和60年3月

(4)　「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書13」屋代B遺跡Ⅰ　茨城県教育財団　昭和61年3月

「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書15」屋代B遺跡Ⅱ　茨城県教育財団　昭和62年3月

「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書17」屋代B遺跡Ⅲ　茨城県教育財団　昭和63年3月

第5章　南谷津遺跡

第1節　遺跡の概要

当遺跡は，大穂町若森字南谷津（現つくば市若森字南谷津）7外13筆に所在する遺跡であり，昭和62年8月1日から9月30日，翌昭和63年4月1日から5月31日までの2年次にかけて，通算4カ月にわたる調査を実施した。調査の結果，溝9条，土坑19基，炭窯1基を検出した。また，これらの遺構からは，縄文式土器（90点）・土師器（149点）・須恵器（2点）・内耳土器（4点）・土師質土器（4点）・陶磁器（44点）等の各種土器片や，石製品（双孔円板・砥石），銅銭（寛永通寶・皇宋通寶），鉄銭などが出土している。遺構や遺物については第3節で扱うことにする。

第2節　調査経過

昭和62年度

8　月　テストピットにより層序を検討した後，隣接する松原遺跡と並行して，3～4日にかけて重機による表土除去及び遺構確認調査を実施する（溝7条・土坑10基を確認）。12日に基準杭打ち，調査区設定を行い，19日からSK1～5，SD1～7，SX1の調査を行う。SX1からは，確認調査の過程で多量の焼土や炭化物・灰が検出され，寛永通寶が出土した。

9　月　前月に引き続き，松原遺跡の調査と並行しながらSK2～10，SD1～7の調査を行う。SD8の覆土からは，陶磁器片と共に寛永通寶を始めとして6点の古銭が出土した。19日に遺構調査を終了し，最終的な遺構数は土坑6基・溝2条となる。21日に松原遺跡及び松原古墳群と併せて航空写真撮影を行う。21日に現地説明会を行い，9月末日をもって予定されたすべての調査を終了した。

昭和63年度

4　月　調査準備（現場倉庫の建設・発掘器材の搬入等）を整え，11日に調査前全景写真撮影を行う。テストピットにより基本層序を確認し，道路のセンター杭に沿って試掘の為のグリッド（2×2m）を設定する。14・15の両日，グリッド発掘による遺構確認調査を行う。この調査により，溝や土坑の存在を確認し，併せて少量の縄文式土器・土師器・陶磁器片を採取する。19日から調査区の北東部（畑）について重機による表土除去及び遺構確認調査を行い，溝1条・土坑14基を確認する。南東側の水田部については重機を使用しトレンチ（2×8×1mを2か所）による遺構確認調査を行ったが，遺構・遺物とも確認さ

れなかった。26日より土坑・溝の調査を開始する。遺構番号は前年度の継続とし，土坑は第7号，溝は第9号から番号を付した。

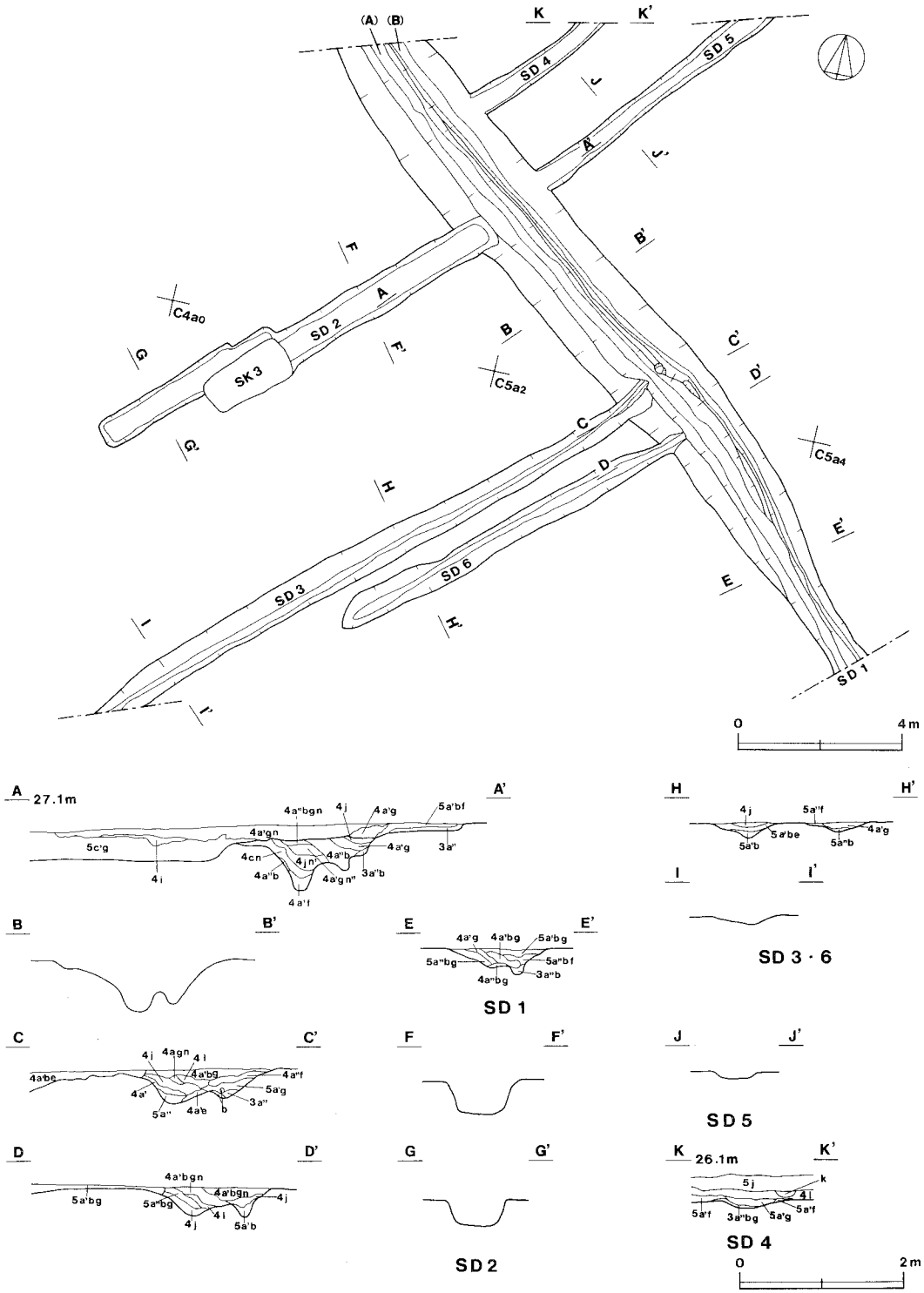
5　月　前月に引き続き，SK 7～20，SD 9の調査を行う。SD 9から土師器片が少量出土したが，全体的に遺構・遺物は希薄であった。25日に遺構調査を終了し，同日航空写真撮影を行う。26日から残務整理を行い，31日をもって前年度から引き続いた南谷津遺跡の調査を全て終了した。

第3節　遺構と遺物

1　溝

第1号溝（第29図・PL7－3）

〔**位置**〕本跡は，調査区のほぼ中央部B 4・B 5・C 5区に確認されたもので，B4i_0区からC5b_4区に達している。北西側及び南東側はいずれも調査区外に延びている。〔**重複関係**〕本跡は，北東側B5i_1区でSD 4，B5i_2区でSD 5，南西側B5j_1区でSD 2，C5a_2・C5a_3区でSD 3・SD 6とそれぞれ重複し，壁上位を掘り込まれている。これらの溝は，本跡に比べいずれも小規模で，本跡と直交するように北西から南東方に延びている。また，本跡は土層の観察結果や溝の底面の状況から，改修が行われたことが窺われ，溝（A）の北東側に，主軸方向がほぼ一致する溝（B）が新たに構築されていることが明らかとなった（以下，古い溝をA，新しい溝をBと表記する）。〔**方向**〕溝は，北西から南東方に延びている。SD1－Aの主軸方向は，B4i_0区からC5a_3区にかけてN－50°－W，C5a_3区でやや南方に傾きN－43.5°－Wを指す。SD1－BはAとほぼ並行に構築されており，B4i_0区からB5j_3区にかけてN－52°－W，B5j_3区でやや東方に傾きN－63.5°－W，C5a_3区でN－35.5°－W，C5b_4区でN－46°－Wを指す。〔**規模**〕全長18.75 mであり，溝A及びBの上幅は0.76～2.43 mである。下幅はAが0.08～0.35 m，Bが0.05～0.28 m，深さはAが0.31～0.70 m，Bが0.25～0.56 mを測る。重複部の土層観察結果から，最初に構築された溝Aの規模は，上幅2.00 m・下幅0.20 m・深さ0.70 m，溝Bの規模は上幅1.30 m・下幅0.10 m・深さ0.57 m前後と推定される。〔**形状**〕溝Aは，底面がほぼ平坦であり，壁は底面から中位にかけて59～77°の傾斜で立ち上がり，その上位は緩やかに外傾しながら立ち上がっている。断面形状は「⋁」状を呈している。Bは，底面は平坦であるがAに比べ幅が狭く，52～65°の傾斜で立ち上がり，断面形状は概ね「⋁」状を呈している。溝全体の断面形状は「W」字状を呈しており，両溝の間は馬の背状を呈している。A・Bの溝はいずれも南東から北西方向に傾斜しており，比高差はAが約0.76 m，Bが約0.44 mである。〔**覆土**〕Aは，壁際及び上層にローム粒子やローム小・中ブロックを含む



第29図　第1～6号溝実測図

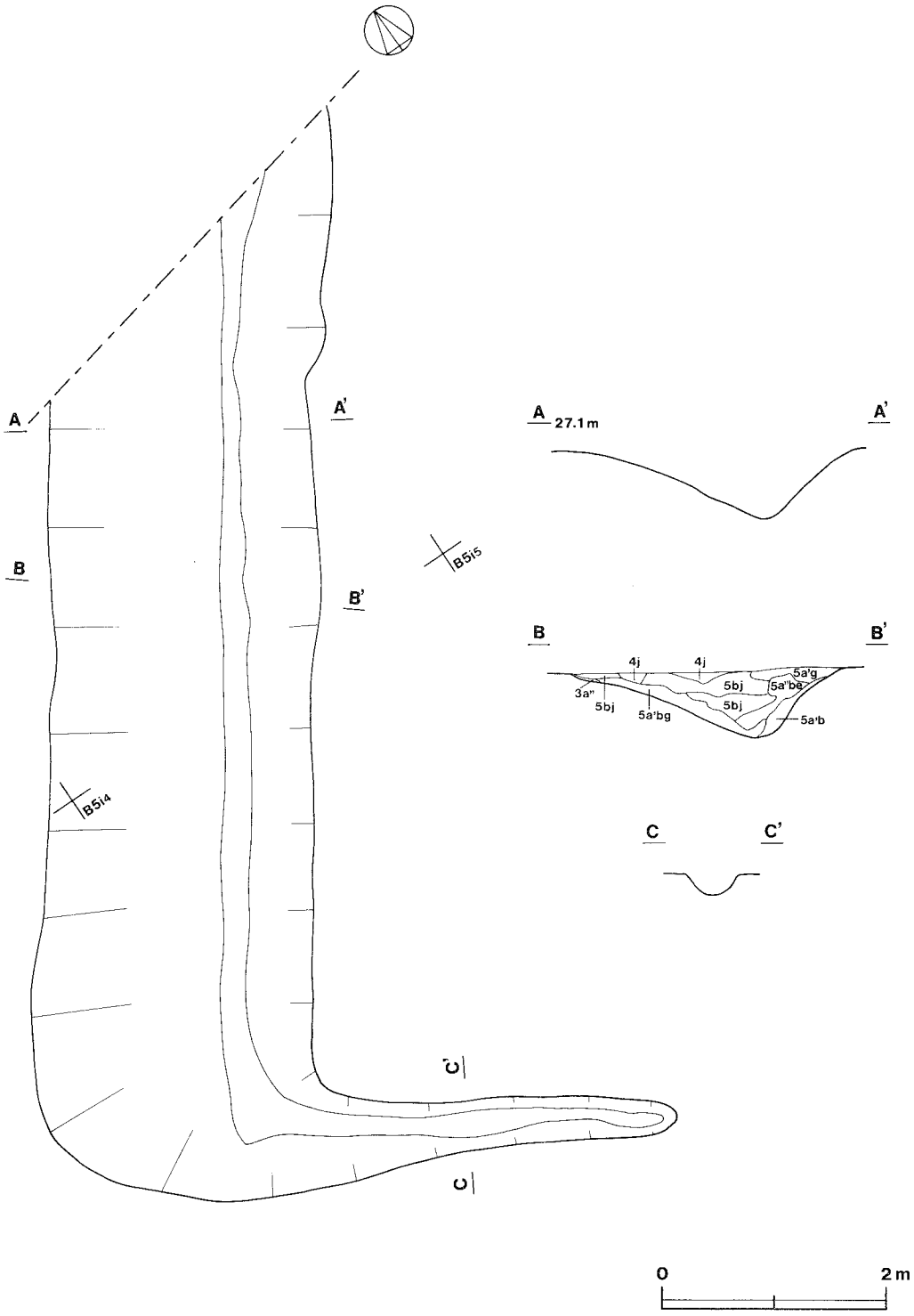
暗褐色土，下層から中層にはローム粒子や炭化粒子・焼土粒子を少量含む黒褐色土が堆積している。覆土は主として南西方向からの自然堆積を示している。Bは，下層にローム粒子，ローム小・中ブロックを含む暗褐色土，中・上層にはローム粒子を含む黒褐色土が自然堆積している。堆積状況はAと同様である。覆土の状況から，BはAが埋まった後に掘り込まれたものと考えられるが，両者間には，あまり時間差はないと推測される。〔**遺物**〕覆土中から，縄文式土器片6点（中期後葉，後期中葉，晩期前葉），土師器片25点（古墳時代後期），陶磁器片1点等が出土している。

第2号溝（第29図）

〔**位置**〕調査区の中央部，B4・B5区からC4区にかけて位置する。〔**重複関係**〕B5j_1区でSD1，C4a_0区でSK3を掘り込んでいる。〔**方向**〕SD1とほぼ直交し，北東から南西方向に延びている。C4a_0区で北西方向に階段状に屈曲するが，主軸方向は概ねN－46°－Eを指している。〔**規模**〕全長10.77 m，上幅0.68～0.90 m，下幅0.46～0.60 m，深さ0.33～0.36 mを測る。〔**形状**〕底面はほぼ平坦で，壁は72～81°の傾斜で立ち上がり，断面形状は「∪」状を呈している。底面の傾斜はほとんど見られない。〔**覆土**〕壁際にローム粒子を多量に含む褐色土，中央部にローム粒子，ローム小・中ブロックを含む暗褐色土が自然堆積している。〔**遺物**〕覆土中から，縄文式土器片（中・後期）32点，土師器片43点，須恵器片1点，内耳土器片1点，陶磁器片17点（内，擂鉢片5点），瓦片6点（近・現代のものか），釘2点，双孔円板1点等が出土している。

第3号溝（第29図・PL7－4）

〔**位置**〕調査区のほぼ中央部，C4・C5区に位置する。C4c_0区の南西側は，調査区外に延びている。本跡の南東側0.25～0.95 mには，SD6が併走している。〔**重複関係**〕B5j_2区付近でSD1を掘り込んでいる。〔**方向**〕SD1とほぼ直交し，北東から南西方向に延びている。主軸方向はN－49°－Eを指している。〔**規模**〕全長15.35 m，上幅0.49～0.81 m，下幅0.06～0.17 m，深さ0.20 mを測る。〔**形状**〕断面形状は，底面がやや凸凹な「∪」状を呈している。壁は11～53°の傾斜で立ち上がり，南西側の先端部に行くほど傾斜は緩やかである。底面の比高は0.08 mであり，北東から南東方に緩やかに傾斜している。〔**覆土**〕下層にローム粒子を含む暗褐色土，上層にローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土が自然堆積している。〔**遺物**〕縄文式土器片（中・後期）6点，土師器片11点，内耳土器片1点，瓦片1点，不明土製品1点等が出土している。また，本跡の周囲からは縄文式土器片が多数出土しているが，これに伴う遺構は検出されなかった。



第30図　第7号溝実測図

第4号溝（第29図）

〔**位置**〕調査区のほぼ中央部，B5区に位置する。B5h_2区の北東側は調査区外に延びている。〔**重複関係**〕B5i_1区でSD1と重複し，SD1の北東壁を掘り込んでいる。〔**方向**〕SD1とほぼ直交し，北西側にわずかに湾曲しながら，南西から北東方の調査区外に延びている。主軸方向は，概ねN－42.5°－Eを指している。本跡の南東側1.80m程にはSD5が併走している。〔**規模**〕全長3.50m，上幅0.48～0.63m，下幅0.43～0.45m，深さ0.11mを測る。〔**形状**〕底面は平坦であり，壁は38.5～61°の傾斜で立ち上がる。北西壁は南東壁に比べなだらかに立ち上がる。断面形状は概ね「◡」状を呈している。底面の比高は0.05m程であるが，北東から南西方にわずかに傾斜している。〔**覆土**〕下層にローム粒子を多量に含む褐色土，上層にローム粒子を中量含む暗褐色土が自然堆積している。〔**遺物**〕無し。

第5号溝（第29図）

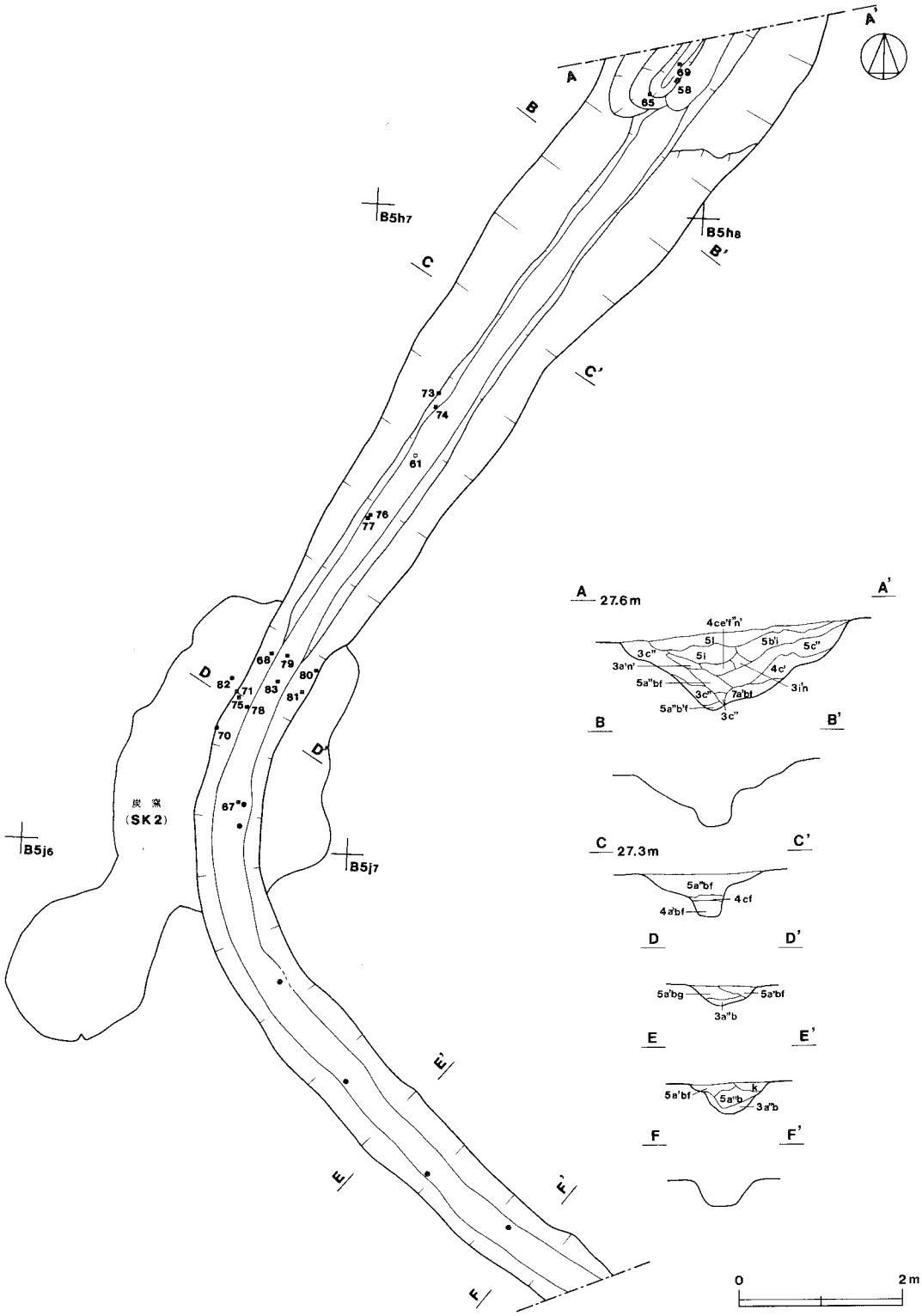
〔**位置**〕調査区のほぼ中央部，B5区に位置する。B5h_2区の北東側は，調査区外となっている。〔**重複関係**〕B5i_2区でSD1と重複し，SD1の北東壁を掘り込んでいる。〔**方向**〕SD1とほぼ直交しながら，南西から北東方にほぼ直線的に延びており，主軸方向はN－40°－Eを指している。〔**規模**〕全長6.43m，上幅0.42～0.62m，下幅0.25～0.31m，深さ0.09mを測る。〔**形状**〕底面は平坦で，壁は52°前後の傾斜で立ち上がる。断面形状は「◡」状を呈している。底面の比高は0.05mほどで，北東から南西方に緩やかに傾斜している。〔**覆土**〕覆土は1層で，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を極少量含む暗褐色土が堆積している。〔**遺物**〕縄文式土器片（堀之内式）1点，須恵器片1点，土師器片3点等が出土しているが，いずれも細片である。

第6号溝（第29図・PL7－4）

〔**位置**〕調査区のほぼ中央部，C5区に位置する。〔**重複関係**〕C5a_3区でSD1と重複し，SD1の北東壁を掘り込んでいる。〔**方向**〕SD1とほぼ直交しながら，北東から南西方にほぼ直線的に延びており，主軸方向はN－48.5°－Eを指している。〔**規模**〕全長9.50m，上幅0.28～0.77m，下幅0.13～0.24m，深さ0.10～0.12mを測る。〔**形状**〕壁は17°前後の傾斜で緩やかに立ち上がり，断面形状は皿状を呈している。〔**覆土**〕下層にローム粒子を含む暗褐色土，上層にローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を含む黒褐色土が自然堆積している。〔**遺物**〕縄文式土器片3点，土師器片3点が出土している。

第7号溝（第30図）

〔**位置**〕調査区のほぼ中央部，B5区に位置している。〔**重複関係**〕無し。〔**方向**〕B5h_4・h_5区か



第31図　第8号溝実測図

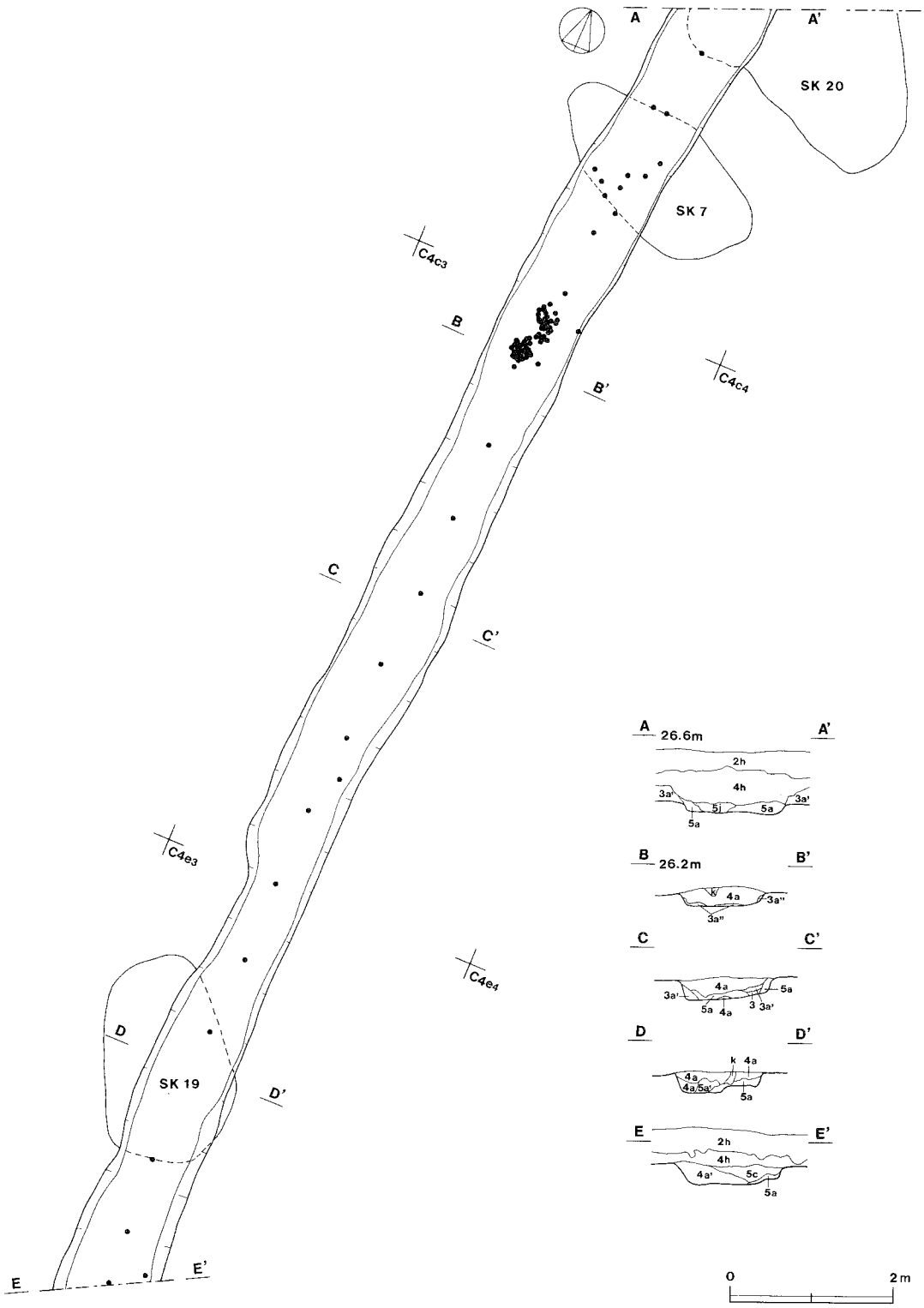
らB5i_3・i_4区にかけて，北東から南西方に直線的に延び（N－35°－E），B5i_4区でほぼ直角（93°）に屈曲して南東方に延びる。〔**規模**〕B5h_4区からB5i_3・i_4区にかけて上幅 2.32 ～ 2.52 m，下幅 0.10 ～ 0.25 m，深さ 0.45 ～ 0.65 m を測る。B5i_4区から溝先端部に向かって細くなり，上幅 0.34 ～ 1.00 m，下幅 0.10 ～ 0.22 m，深さ 0.15 m 前後となる。〔**形状**〕溝は，「L」字状を呈する。壁は，北西側が 22.5°，南東側が 45° 前後で立ちがり，断面形状は概ね「⌣」状を呈している。B5i_4区付近から溝の先端部にかけて，50° 前後の傾斜で立ち上がり，断面形状は「⌣」状を呈する。溝の底面は，先端部から屈曲する付け根の部分にかけて，南東から北西方に傾斜するが，そのほかは概ね平坦である。〔**覆土**〕下層にローム粒子を多量に含む暗褐色土，上層にローム粒子やローム小ブロックを含む黒褐色土が自然堆積している。〔出土遺物〕縄文式土器片（中・後期）10 点，土師器片 33 点，土師質土器片 2 点，陶磁器片 12 点（内，擂鉢片 2 点・甕片 1 点），瓦片 1 点等が出土している。

第 8 号溝（第 31 図）

〔**位置**〕調査区の南側，B 5 区から C 5 区にかけて位置する。B5g_7区の北東側，C5a_7区の南東側はそれぞれ調査区外に延びている。〔**重複関係**〕本跡はB5i_6区で SK 2（江戸時代の炭窯）と重複し，その上面を掘り込まれている。〔**方向**〕B5g_7・g_8区からB5i_6区にかけて，北東方から南西方にほぼ直線的に延び（N－30°－E），B5i_6・j_6区付近で大きく湾曲し，南東方の調査区外に直線的に延びている（N－47°－W）。〔**規模**〕長さ 19.00 m，上幅 0.75 ～ 2.10 m，下幅 0.20 ～ 0.40 m，深さ 0.24 ～ 0.95 m を測る。平均的な深さは，0.25 m 前後である。溝は，B5g_7区付近が最も広く掘り込みも深いが，C5a_7区の南東端部に向かうほど細くなる。〔**形状**〕調査区内における溝の形状は，概ね「L」字状を呈している。底面は平坦もしくは皿状を呈しており，壁は，22 ～ 84° の傾斜で立ち上がる。断面形状は，鍋底状・逆台形状・「⋁」状を呈している。溝の底面は，屈曲部に当たるB5j_6区付近が最も高く，北東方に傾斜している。底面の比高は，0.44 m 程である。〔**覆土**〕下層にローム粒子を多量に含む褐色土・黒褐色土，中層に硬く締まった褐色土，上層にローム粒子を含む黒褐色土・暗褐色土が自然堆積している。〔**遺物**〕縄文式土器片 7 点，土師器片 27 点，土師質土器片 1 点，陶磁器片 8 点（内，擂鉢片 1 点），古銭 21 枚（寛永通寶 8 ・皇宋通寶 1 ・鉄銭 11 ・不明 1），煙管 1 点，砥石 1 点，磨石 1 点，瓦片 1 点，石 8 点（2 点は熱を受け，脂肪・炭化物付着）等が出土している。

第 9 号溝（第 30 図・PL7－5）

〔**位置**〕調査区の南側，C 4 区に位置する。溝の両側は，それぞれ調査区外に延びている。〔**重複関係**〕C4a_3・b_3区で SK 20，C4e_3区で SK 7，C4e_3区で SK 19 と重複し，これらの土坑を掘り込ん



第32図　第9号溝実測図

でいる。〔**方向**〕C4b_3区からC4f_3区にかけて，北北東から南南西方にほぼ直線的に延びており，主軸方向はN－6°－Eを指している。〔**規模**〕調査区内における溝の規模は，長さ24.25 m，上幅0.80～1.20 m，下幅0.64～1.03 m，深さ0.20～0.26 mを測る。〔**形状**〕底面はやや凸凹状を呈する部分も見られるが，概ね平坦であり，わずかに南南西方に緩く傾斜している。壁は54～82°の傾斜で立ち上がる。断面形状は，逆台形状を呈する。〔**覆土**〕壁際にローム粒子を多量に含む褐色土，下層にローム粒子を少量含む暗褐色土，上層にローム粒子を少量含む黒褐色土が自然堆積している。〔**遺物**〕覆土上層から縄文式土器片6点，土師器（甕）片92点が出土している。

2　土　坑（第33・34図）

第1号土坑

〔**位置**〕B4i_8・j_8区。〔**重複関係**〕無し。〔**方向**〕N－48°－E。〔**平面形**〕北東側の4分の1程が調査区外となっているが，平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。〔**規模**〕推定規模は，長径2.24 m，短径0.88 m，深さ0.28～0.33 mを測る。エリア境界の土層によれば，本来は，さらに25 cm程上面から掘り込まれていたと考えられる。〔**形状**〕底面は浅い皿状を呈し，壁は56～61°の傾斜で立ち上がる。断面形状は「◡」状を呈している。〔**覆土**〕下層にローム粒子・ローム中ブロック・炭化粒子を含む黒褐色土，上層にローム粒子・ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土が自然堆積している。〔**遺物**〕覆土中から縄文式土器片8点，土師器片9点，土師質土器片1点が出土している。

第3号土坑

〔**位置**〕C4a_0区。〔**重複関係**〕SD 2と重複し，中位以上を掘り込まれている。〔**方向**〕N－46°－E。〔**平面形**〕長方形。〔**規模**〕長軸2.20 m，短軸1.02 m，深さ0.50 mを測る。〔**形状**〕底面は平坦で，壁は75.5°の傾斜で立ち上がる。断面形状は，概ね「U」字状を呈している。〔**覆土**〕下層にローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土，中層にローム粒子を含む黒褐色土が自然堆積している。その上位には，SD 2の覆土であるローム粒子，ローム小・中ブロックを含む暗褐色土が堆積している。〔**遺物**〕縄文式土器片（中期中葉）1点。

第4号土坑

〔**位置**〕B5f_0・g_0区。〔**重複関係**〕無し。〔**方向**〕N－8.5°－E。〔**平面形**〕卵形。〔**規模**〕長径1.57 m，短径1.45 m，深さ0.31～0.35 mを測る。〔**形状**〕底面には，中央部に2か所，南壁際に1か所，径15 cm・深さ5 cm程の小穴が見られる。壁は，38°程の傾斜で緩く内湾気味に立ち上がり，断

面形状は，概ね鍋底状を呈している。〔**覆土**〕1層からなり，ローム粒子，ローム小・中ブロックを多く含む暗褐色土が堆積している。自然堆積と考えられる。〔**遺物**〕阿玉台式の土器片が1点出土している。

第5号土坑

〔**位置**〕B6f_2区。〔**重複関係**〕無し。〔**方向**〕N－34°－W。〔**平面形**〕不整楕円形。〔**規模**〕長径1.30 m，短径0.80 m，深さ0.43 m～1.67 m。〔**形状**〕底面に，深さ1.06～1.24 mの不定形のピットが掘り込まれている。ピットは，湧水のため底面まで掘り込むことができなかった。〔**覆土**〕下層にローム粒子，ローム小・中ブロックを含む暗褐色土，上層にローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土が自然堆積している。〔**遺物**〕無し。

第6号土坑

〔**位置**〕B6h_1区。〔**重複関係**〕無し。〔**方向**〕N－67°－E。〔**平面形**〕楕円形を呈するが，中央部は隅丸長方形状に掘り込まれている。〔**規模**〕長径2.27 m，短径1.83 m，深さ1.00 mを測る。中央部は長軸1.97 m，短軸0.79 mを測る。〔**形状**〕底面は平坦であり，南東・南西壁はほぼ垂直に，南東壁は斜めに立ち上がる。また，北西壁は外傾し，中段から緩やかに立ち上がる。〔**覆土**〕底面に褐色土，下層にローム粒子を含む暗褐色土，中層及び壁際に褐色土，上層にローム粒子を含む暗褐色土が自然堆積している。〔**遺物**〕無し。

第7号土坑

〔**位置**〕C4b_3区。〔**重複関係**〕SD 9に上面を掘り込まれている。〔**方向**〕N－65°－W。〔**平面形**〕楕円形。〔**規模**〕長径2.71 m，短径1.40 m，深さ0.54 mを測る。〔**形状**〕底面は平坦であるが，やや南東側に傾斜している。北西壁はなだらかであるが，南東壁は階段状を呈している。〔**覆土**〕壁際に暗褐色土，最下層にローム大ブロックを含む黒褐色土，下層から上層にローム粒子を含む黒褐色土が自然堆積している。〔**遺物**〕北西側の覆土上層から，縄文式土器片（堀之内式）1点が出土している。

第8号土坑

〔**位置**〕C4e_5区。〔**重複関係**〕無し。〔**方向**〕N－64°－E。〔**平面形**〕楕円形。〔**規模**〕長径1.72 m，短径1.07 m，深さ0.38 mを測る。〔**形状**〕底面は平坦であり，壁は56～73°の傾斜で立ち上がる。〔**覆土**〕最下層にローム粒子・粘土粒子を多量に含む黒褐色土，中・上層にローム粒子・粘土粒子・焼土粒子を極少量含む黒褐色土が自然堆積している。〔**遺物**〕無し。

第9号土坑

〔位置〕C4c_2区。〔重複関係〕無し。〔方向〕不明。〔平面形〕円形。〔規模〕長径1.00 m，短径0.93 m，深さ0.17 mを測る。〔形状〕底面は，北西側にやや傾斜しているが，ほぼ平坦である。壁は，北側がなだらかであるが，他は60°前後の傾斜で立ち上がる。断面形状は，概ね鍋底状を呈する。〔覆土〕下層にローム粒子・暗褐色土を含む褐色土，上層にローム粒子を含む暗褐色土が自然堆積する。〔遺物〕北西壁際から，土器片1点出土。

第10号土坑

〔位置〕C4c_2・d_2区。〔重複関係〕無し。〔方向〕N－52°－E。〔平面形〕楕円形。〔規模〕長径1.86 m，短径1.36 m，深さ0.56 mを測る。〔形状〕底面は平坦であり，壁は中位まで64～80°の傾斜で立ち上がるが，上位はなだらかである。〔覆土〕下層にローム粒子・粘土粒子を含む黒褐色土，中～上層にローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土が自然堆積する。〔遺物〕無し。

第11号土坑

〔位置〕C4d_2区。〔重複関係〕無し。〔方向〕N－58.5°－W。〔平面形〕不整楕円形。〔規模〕長径1.80 m，短径1.67 m，深さ0.33～0.62 m。〔形状〕底面は擂鉢状を呈し，中央に楕円形を呈する深さ30 cm前後のピットが2か所に見られる。〔覆土〕下層にローム粒子を含む褐色土，上層にローム粒子・粘土粒子・焼土粒子を含む暗褐色土や黒褐色土が自然堆積する。〔遺物〕覆土上層より礫2点出土。

第12号土坑

〔位置〕C3e_9区。〔重複関係〕無し。〔方向〕N－89°－W。〔平面形〕不整楕円形（卵形）。〔規模〕長径1.48 m，短径1.22 m，深さ0.42 mを測る。〔形状〕底面は，中央部に向かって傾斜している。壁は22～43°の傾斜で外傾して立ち上がり，断面形状は，概ね「V」字状を呈する。〔覆土〕下層にローム粒子・粘土ブロックを含む黒褐色土，上層にローム粒子・粘土粒子を含む暗褐色土・黒褐色土が自然堆積する。〔遺物〕縄文式土器片5点（黒浜式1点，加曽利EⅡ～Ⅲ式3点等）。

第13号土坑

〔位置〕C3f_9区。〔重複関係〕無し。〔方向〕N－73°－W。〔平面形〕楕円形。〔規模〕長径1.97 m，短径0.97 m，深さ0.53 mを測る。〔形状〕底面は平坦で，壁は72～74°の傾斜で立ち上がり，上位でやや外傾する。断面形状は「◡」状を呈する。〔覆土〕下層から中層にローム粒子・粘土小ブロックを含む黒褐色土，上層に同様の含有物を含む暗褐色土が自然堆積している。〔遺物〕無し。

第14号土坑

〔位置〕C3g_8区。〔重複関係〕無し。〔方向〕N－12°－W。〔平面形〕楕円形。〔規模〕長径1.62 m，短径1.22 m，深さ0.17 mを測る。〔形状〕底面はやや凸凹しており，壁は北東側が62°，その他は緩やかな傾斜で立ち上がる。断面形状は概ね皿状を呈する。〔覆土〕壁際にローム粒子を多量に含む暗褐色土，下層から上層に，ローム粒子を少量含む黒褐色土が自然堆積する。底面からは湧水が見られた。〔遺物〕無し。

第15号土坑

〔位置〕C3e_6区。〔重複関係〕無し。〔方向〕N－46°－W。〔平面形〕楕円形。〔規模〕長径1.96 m，短径1.25 m，深さ0.28 mを測る。〔形状〕底面はほぼ平坦であり，壁はなだらかに立ち上がる。断面形状は概ね鍋底状を呈する。〔覆土〕下層及び上層に，黒褐色土が自然堆積している。下層は，上層に比べローム粒子を多く含んでいる。〔遺物〕無し。

第16号土坑

〔位置〕C3f_6区。〔重複関係〕無し。〔方向〕N－35°－E。〔平面形〕楕円形。〔規模〕長径1.92 m，短径1.09 m，深さ0.19～0.45 mを測る。〔形状〕底面は，北東側は平坦であるが，南西側が楕円形状に掘り込まれている。壁は33～43°の傾斜で立ち上がる。〔覆土〕下層にローム粒子を多量に含む褐色土，中・上層にローム粒子を含む黒褐色土が自然堆積している。〔遺物〕無し。

第17号土坑

〔位置〕C2j_9区。〔重複関係〕無し。〔方向〕N－7.5°－E。〔平面形〕楕円形。〔規模〕長径1.93 m，短径1.26 m，深さ0.28～0.51 mを測る。〔形状〕北西側底面は平坦であるが，中央部は楕円形状に掘り込まれている。壁は25～45°の傾斜で立ち上がり，北東側はなだらかである。〔覆土〕壁際に褐色土，下層から上層に黒褐色土が自然堆積している。覆土中には，ロームブロックが含まれている。〔遺物〕無し。

第18号土坑

〔位置〕D2a_9区。〔重複関係〕無し。〔方向〕N－45°－E。〔平面形〕楕円形。〔規模〕長径1.70 m，短径0.92 m，深さ0.53 mを測る。〔形状〕底面はほぼ平坦であるが，北東側がやや窪んでいる。壁は，北東及び南西側が65°，北西及び南東側が43°前後の傾斜で立ち上がる。断面形状は概ね鍋底状を呈している。〔覆土〕下層に褐色土，中・上層に暗褐色土が自然堆積している。下層にはロームブロック，中・上層にはローム粒子が含まれている。底面からは，湧水が見られた。〔遺物〕無し。

第19号土坑

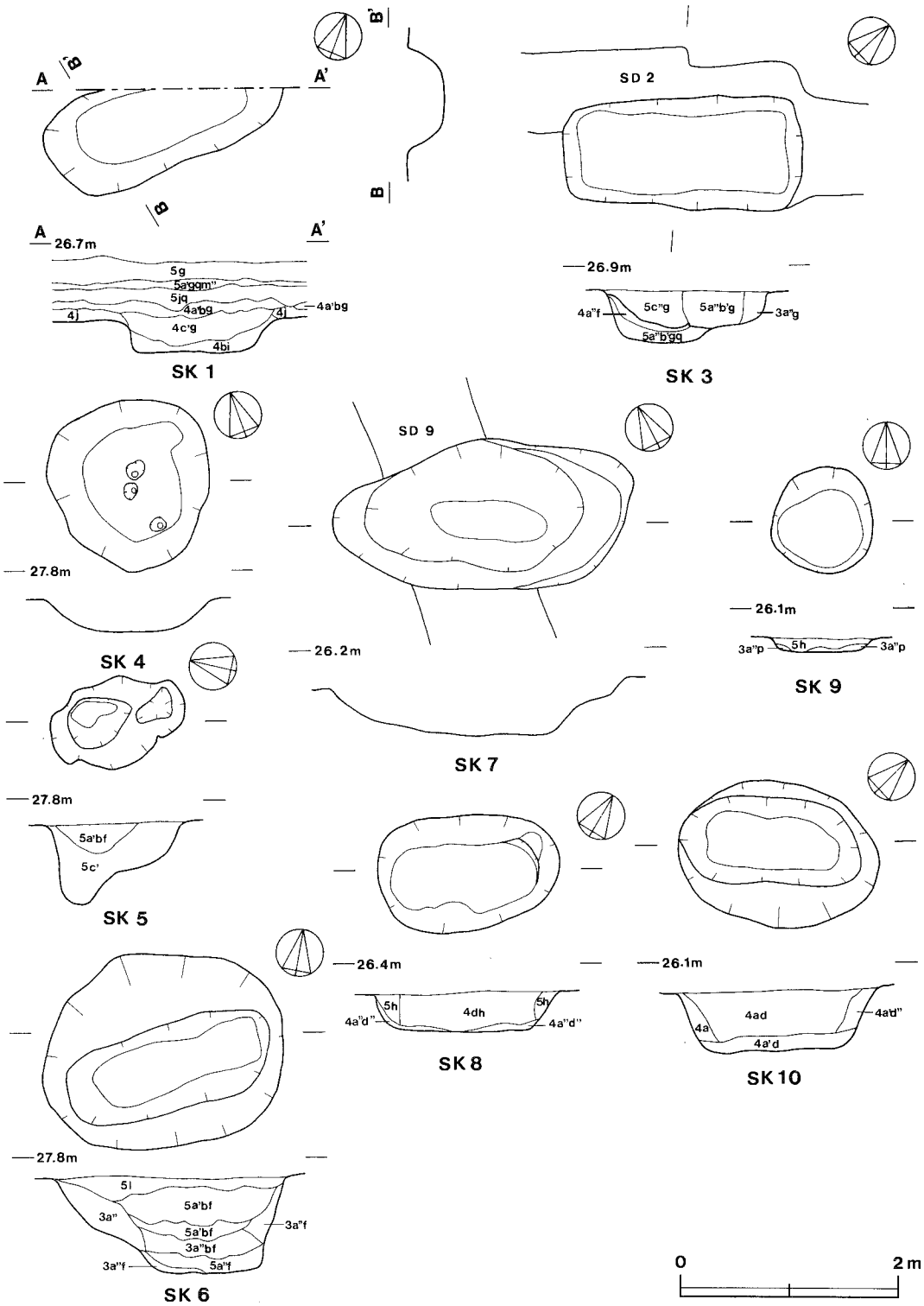
〔**位置**〕C4e3区。〔**重複関係**〕SD 9に掘り込まれている。〔**方向**〕N－29°－W。〔**平面形**〕楕円形。〔**規模**〕長径2.54 m，短径1.53 m，深さ0.35 mを測る。〔**形状**〕底面は，南東側に向かってやや傾斜するが，ほぼ平坦である。壁は40～54°の傾斜で立ち上がる。断面形状は，皿状を呈している。〔**覆土**〕下層から中層にかけて褐色土，上層に暗褐色土・黒褐色土が自然堆積している。〔**遺物**〕覆土中から，縄文式土器片2点（内，堀之内式1点）。

第20号土坑

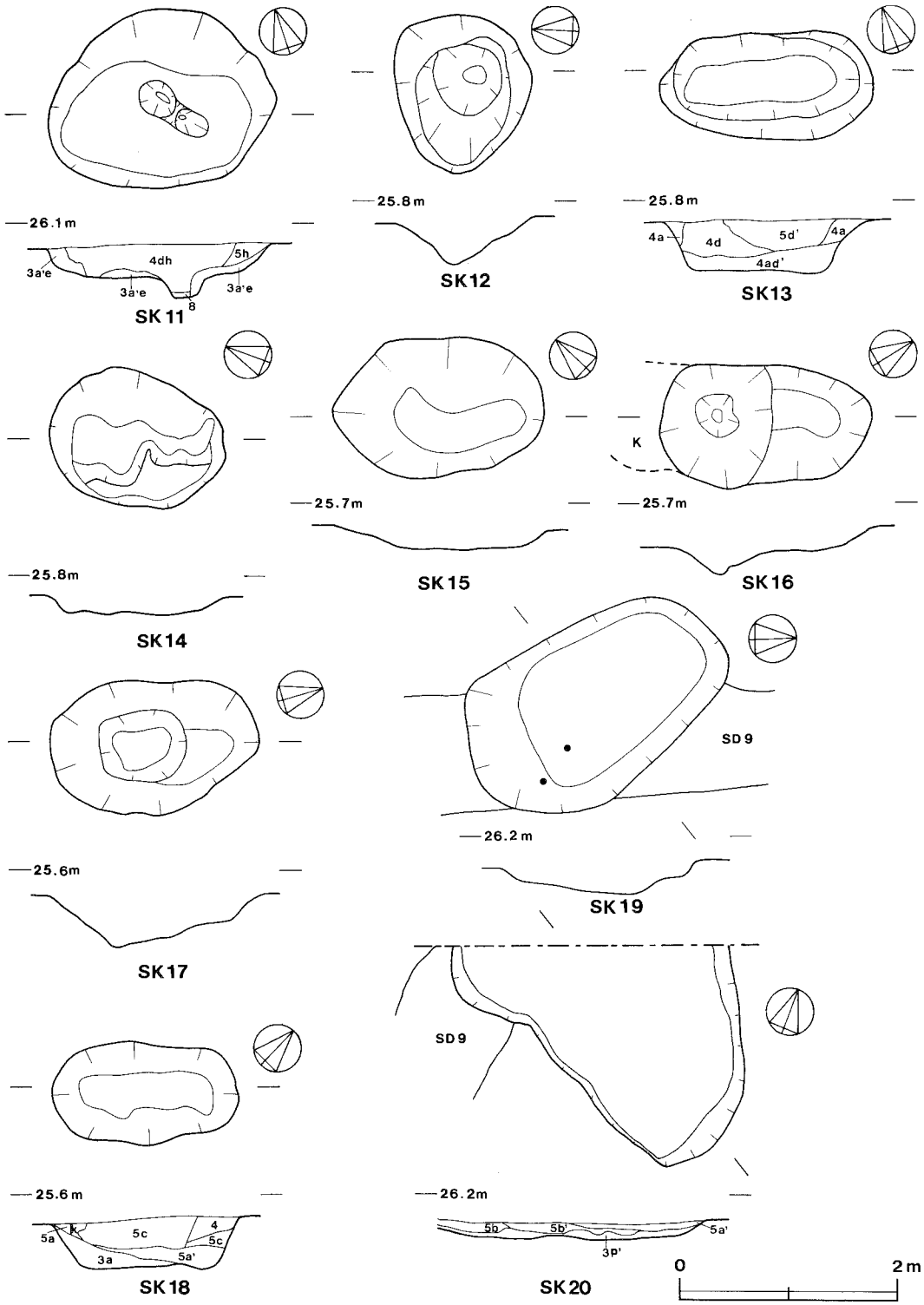
〔**位置**〕C4b4区。〔**重複関係**〕SD 9に掘り込まれている。〔**方向**〕不明。〔**平面形**〕不整楕円形状を呈するものと推定される(北西側2分の1程は調査区外)。〔**規模**〕深さは0.18 mを測るが，他は不明である。〔**形状**〕底面は平坦であり，壁は緩やかに立ち上がる。〔**覆土**〕下層に暗褐色土を少量含む褐色土，中・上層にローム粒子，ロームブロックを含む暗褐色土が堆積している。自然堆積と考えられる。〔**遺物**〕覆土中から，阿玉台式の土器片が1点出土している。

3　炭窯（SK 2）（第35図）

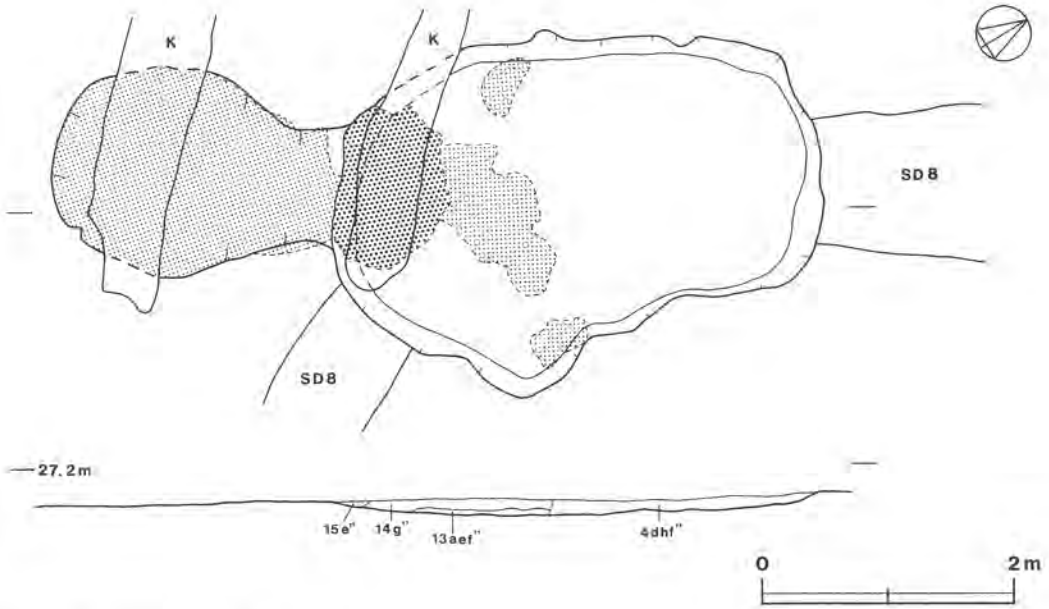
〔**位置**〕B5i6・j6区。〔**重複関係**〕SD 8の上面に構築されている（調査の過程でSX 1と呼称した遺構は，本跡と同一の遺構であるため，欠番とした)。〔**方向**〕N－22.5°－E。〔**平面形**〕瓢形。〔**規模**〕窯口は長径2.40 m，短径1.55 m，燃焼部は長径3.70 m，短径2.25 m，深さ0.07～0.14 mを測る。〔**形状**〕上面が削平されており，窯口及び燃焼部の底面がわずかに残存しているにすぎず，形状は不明である。断面形状は，浅い皿状を呈している。〔**覆土**〕燃焼部の底面は，北西壁際（1.60×1.00 mの範囲）及び南東側の一部（0.70×0.50 mの範囲）が残存しており，熱を受けレンガ状に硬化している。覆土は黒褐色で，焼土粒子・焼土ブロック・炭化粒子・炭化物・灰を含んでいる。南西壁際からは，少量の粘土粒子が検出されている。〔**遺物**〕寛永通寶や陶磁器片が出土しているが，重複するSD 8に伴うものと考えられる。SD 8との切り合いから，近世（江戸時代後半頃）の炭窯と考えられる。


A
A'
B
B'
26.7m
5g
5a'gm''
5jq
4a'bg
4a'bg
4j
4j
4c'g
4bi
SK 1
SD 2
26.9m
4a''f
5c''g
5a''b'g
3a''g
5a''b'gg
SK 3
27.8m
SK 4
SD 9
26.2m
SK 7
26.1m
3a''p
5h
3a''p
SK 9
27.8m
5a'bf
5c'
SK 5
26.4m
5h
4dh
5h
4a''d''
4a''d''
SK 8
26.1m
4ad
4a
4a'd
4a'd''
SK 10
27.8m
5l
5a'bf
3a''
5a'bf
3a''f
3a''bf
3a''f
5a''f
SK 6
0
2m

第33図　土坑実測図 (1)


26.1m
4dh
5h
3a'e
3a'e
3a'e
8
SK11
25.8m
SK12
25.8m
4a
4d
5d'
4a
4ad'
SK13
25.8m
SK14
25.7m
SK15
K
25.7m
SK16
SD9
26.2m
SK19
25.6m
SK17
SD9
25.6m
5a
5c
4
5c
3a
5a'
SK18
26.2m
5b
5b'
5a'
3p'
SK20
0
2m

第34図　土坑実測図(2)



第35図　炭窯（SK 2）実測図

4　遺構及び遺構外出土遺物

(1)　土器（第36～38図）

○縄文式土器

当遺跡からは，縄文時代の遺構は検出されていないが，遺構の覆土及びグリッド等から縄文時代前期から晩期にかけての土器片が少量出土している。覆土出土の縄文式土器は，直接その遺構に伴うものではなく，おそらく周辺から流れ込んだものと考えられる。ここでは，これらの縄文式土器片を一括し，時代ごとに記載する。

第1群土器

前期の土器群である。1は第12号土坑覆土から出土した黒浜式土器の胴部片で，太い単節RLの縄文が施され，胎土に繊維を含む。2は第13号土坑の覆土から出土したもので，上帯に単節LR，下帯に単節RLを用いた羽状縄文が施されている。上下帯の間に綾繰文が見られる。前期末から中期初頭頃に位置付けられるものであろう。

第2群土器

中期の土器群である。3・5は阿玉台式，4は勝坂式，7～10，12～14は加曽利E式の土器片である。3は，第4号土坑覆土から出土した深鉢形土器の口縁部片である。4は，第6号土坑覆土から出土したもので，キャタピラ文が施されている。5は，第20号土坑覆土から出土した口

縁部片で，断面三角形の隆帯を貼付し，窓枠状に区画されている。6は，第7号溝覆土から出土したもので，中期後半から後期前半頃の深鉢または鉢の口縁部片である。7は，第12号土坑から出土したもので，口縁部に円形刺突文を2列に巡らし，単節RLの撚糸文を縦位に施している。8・10は第2号溝覆土から出土したもので，8は口縁端部外面にナデが施され，口縁直下に1条の沈線が巡らされている。10は摩滅しているが，口縁部に隆帯による曲線的なモチーフが描かれている。9は，B5区から出土した深鉢形土器の口縁部片である。11は，第3号溝覆土から出土した胴上半部の小片で，摩滅が著しい。曲線的・直線的な数条の沈線が見られる。12は，遺跡の西端部から出土した深鉢形土器の口縁部片で，隆帯と沈線により楕円形に区画され，単節RLの縄文が施されている。加曽利EI式の土器片である。14は，第6号溝の覆土から出土したもので，7と同系統の土器である。15は，遺跡の西端部から出土したもので，地文に単節LRの縄文を施し，沈線による渦巻状のモチーフが描かれている。16～19は，中期後半頃の深鉢形土器の胴部片である。20は，C4区から出土した深鉢形土器の底部片であり，阿玉台式と思われる。

第3群土器

後期の土器群である。21～31は堀之内式，32・33・36・37は加曽利B式土器である。21・22は，無文の深鉢形土器の口縁部片であり，21はC4区出土，22は表採である。23は，C5区から出土した波状口縁を呈する深鉢形土器の口縁部片で，口縁直下に1条の沈線を施し，やや不明瞭な無節の縄文地文上に，2条の沈線を垂下させ，その上端に円形の刺突文を加えている。内面には，横位のナデが施されている。24は，B4区から出土したもので，地文に太い単節LRの縄文を横位または斜位に施し，口縁部無文帯を1条の沈線によって区画している。25は，遺跡西端部から出土したもので，口縁直下に無節の縄文が施され，口唇部及び内面には横位のナデ調整が施されている。26は，第7号土坑覆土から出土した深鉢形土器の胴部片で，縄文地文上に直線的な磨消帯が垂下する。後期前葉頃の土器片であろう。27は，C4区から出土したもので，単節RLの縄文が施されている。28は遺跡西端部から出土したもので，無節Lの縄文が施されている。29は第19号土坑覆土から出土したもので，単節RLの地文上に押圧の加えられた隆帯を貼付している。30は第5号溝覆土から出土した深鉢形土器の胴部片で，斜行する数条の平行沈線が施され，器表面には煤が付着している。31は遺跡西端部から出土したもので，単節LRの地文上に沈線による曲線的なモチーフが描かれている。32・34・38は第2号溝覆土から出土したもので，32は，口縁直下に太い単節LRの縄文が施されている。34も単節LRの縄文と思われる。38は，細い単節RLの縄文である。33は，口縁直下に刺突が施されている。35は，第1号土坑覆土から出土した深鉢形土器の口縁部片，36・37は，第7号土坑から出土した深鉢形土器の胴部片である。

第4群土器

晩期の土器群である。39は第1号溝覆土から出土した凹縁部片で，細い単節LRの縄文が施されている。40は，C4区から出土した波状を呈する口縁部片で，やはり細い単節LRの縄文が施されている。

○土師器

土師器片は，古墳時代から奈良時代頃にかけてのものが，遺構の覆土やグリッドから比較的多く出土している。しかし，これらはいずれも小片で胴部片が多く，器形の窺えるものや実測可能なものは極めて少ない。実測可能なものを，第37図に掲載した。

41・42は，遺跡の中央部C4区から検出された第9号溝のほぼ底面から，胴部片と共に潰れた状態で出土したものである。これらは同一個体であり，第9号溝に伴う遺物と考えられる。41は甕の口縁部から頸部にかけての破片で，頸部はほぼ直立し，口縁部は外反している。口縁端部は外上方につまみあげられており，口縁部から頸部にかけての内・外面には，横ナデ調整が施されている。推定口径は22.6 cmである。42は平底の底部片で，胴下半部は内湾しながら外上方に立ち上がり，底部外面にヘラナデ，胴下半部外面に斜位のヘラナデ調整が施されている。底径は10.5 cmである。色調は明褐色で，胎土には砂粒・長石・雲母を含む。現存率は20%前後である。8世紀の土器であろう。43は，第7号溝覆土から出土した坏の破片である。口辺部には横ナデ調整が施されており，体部には輪積み成形痕が残っている。色調はにぶい赤褐色で，胎土にはスコリアを含む。現存率は10%前後である。44は，B5区から出土した木葉痕の見られる甕の底部片である。現存率は5%である。

○陶器・磁器

45・56～58は第8号溝，47は第2号土坑，55は第7号溝のいずれも覆土から出土したものである。45は内耳土器片であり，平底で，体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。現存率は5%程で，底部はわずかに残存しているに過ぎない。推定口径32.4 cm，器高5.5 cmである。体部下半及び底面を除き，内・外面は横ナデ調整されている。器表面には煤が付着しており，色調は，内面がにぶい赤褐色，外面が黒色となっている。胎土には，砂粒・長石・雲母を含んでいる。47は，近世の大甕の口縁部片である。内・外面に横ナデが施されており，胎土には砂粒や長石を多く含んでいる。色調はにぶい赤褐色である。55は瀬戸・美濃系の碗であり，褐釉を施している。高台は浅く，体部は内湾しながら立ち上がる。胎土は浅黄色で，緻密である。残存高3.6 cm，高台径6.4 cm，高台高0.7 cmを測る。56は瀬戸・美濃系の志野皿である。体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。推定口径10.4 cm，残存高2.5 cm，高台径6.3 cmを測る。57は近世瀬戸の鉄釉の三足香炉である。底面は露胎であり，逆三角形の粘土塊を三か所に貼付している。58は近世肥前の草花文壺（磁器）の破片である。口径6.3 cm，残存高8.8 cmで，内面に水挽き成形痕が残る。

○土師質土器

50は表採，51は第7号溝，52は第1号土坑，53・54は第8号溝のいずれも覆土から出土したもので，いずれも小片である。50は平底で，体部は器厚を減じながら，直線的に外上方に立ち上がる。推定口径6.6 cm，器高1.1 cm，底径4.2 cmで，現存率は40%である。色調はにぶい燈色で，胎土には砂粒・雲母を含んでいる。51・52は，底部から体部下半にかけての破片であり，51は，底部内面中央が凹んでいる。53は平底で，体部は器厚を減じながら外上方に直線的に立ち上がっている。口縁の内・外面には煤が付着しており，灯明皿として使用されたものと思われる。推定口径5.9 cm，器高2.6 cm，底径2.9 cmで，現存率は20%である。色調は浅黄燈色で，胎土にわずかに雲母を含んでいる。54は現存率5%未満の口縁部片であり，推定値は口径10.8 cmである。

○擂鉢

46は第8号溝，48・49は第7号溝のいずれも覆土から出土したものである。46・48は瀬戸・美濃系の鉄釉の擂鉢である。46は内面に段を有し，細いまばらな擂目が見られ，内・外面に光沢のある鉄釉が掛けられている。推定口径28 cm，残存高6.8 cmである。48は擂目の1単位の幅が広く，また1条が太く深い。光沢の無い鉄釉が掛けられている。49は無釉で焼き締められている。擂目は細く密である。赤褐色を呈し，炻器質である。

(2) 石製品（第38図）

○砥石

59は，第8号溝覆土から出土した砥石である。最大長8.90 cm，最大幅3.30 cm，最大厚2.25 cm，重量59.8 gを測る。使用面は2面であり，側面に加工痕が残る。長軸の断面形は三角形状を呈し，使用面が強くねじれている。石質は凝灰質砂岩である。

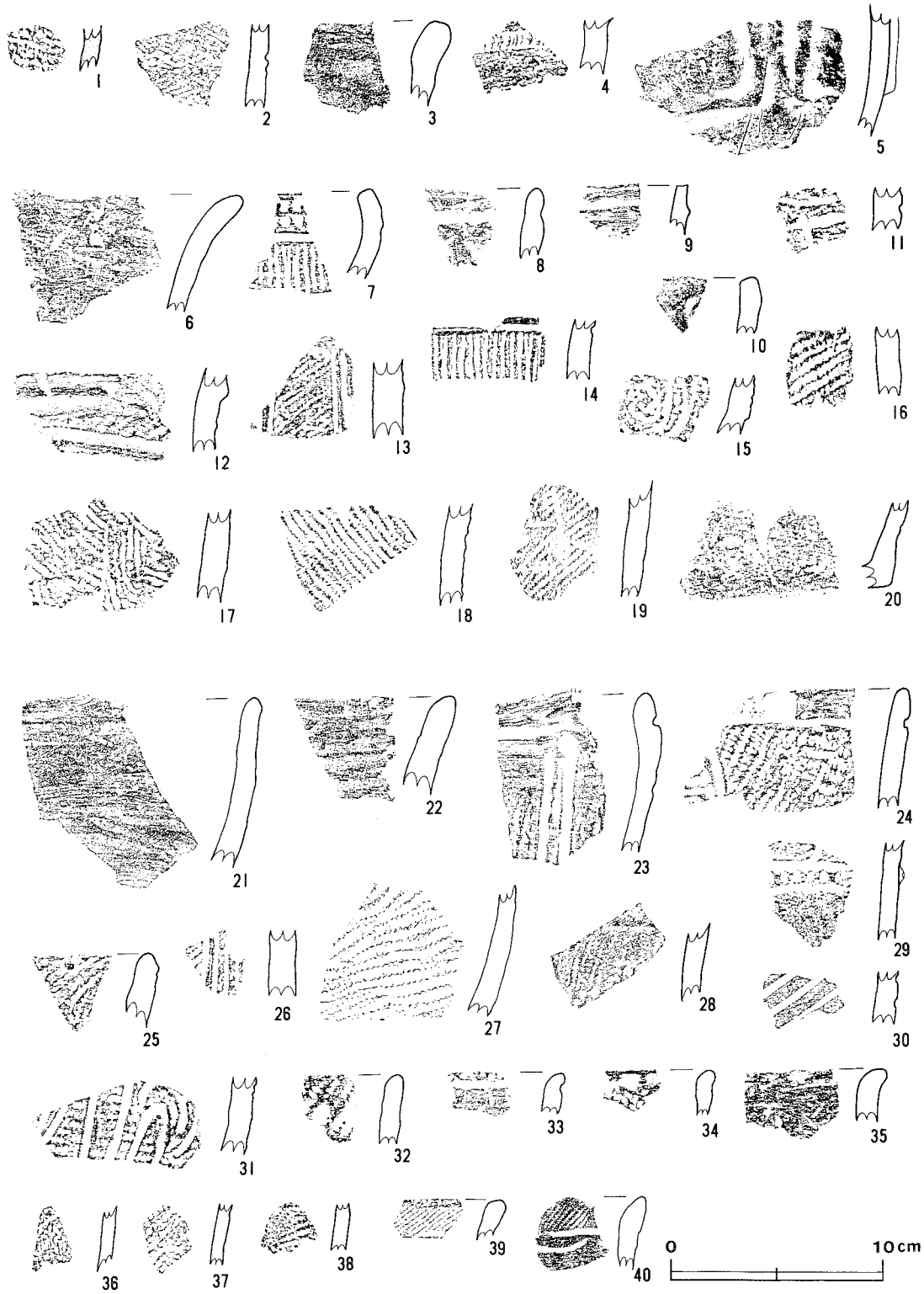
○双孔円板

60は，第2号溝覆土から出土した双孔円板である。最大径2.3 cm，長さ1.8 cm，厚さ0.3 cm，重量2.6 gを測る。孔は，5 mm程の間隔で2孔（孔径1 mm）が一方向から穿たれており，側面は研磨されている。石質は滑石である。

(3) 金属製品（第38図）

○煙管

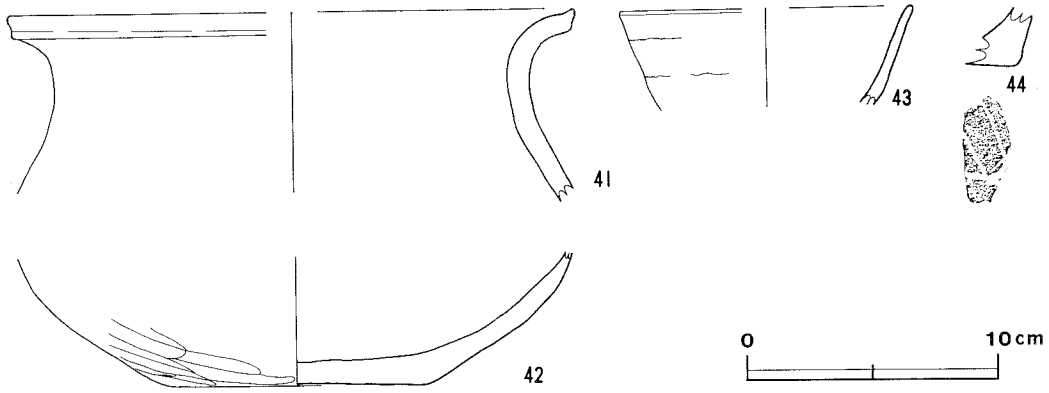
61は，第8号溝覆土から出土した煙管の羅宇の部分である。吸い口に近い羅宇の先端部は押し潰され，欠損している。現存長4.4 cm，最大径1.0 cmを測る。銅製で，側面には合わせ目が見られる。



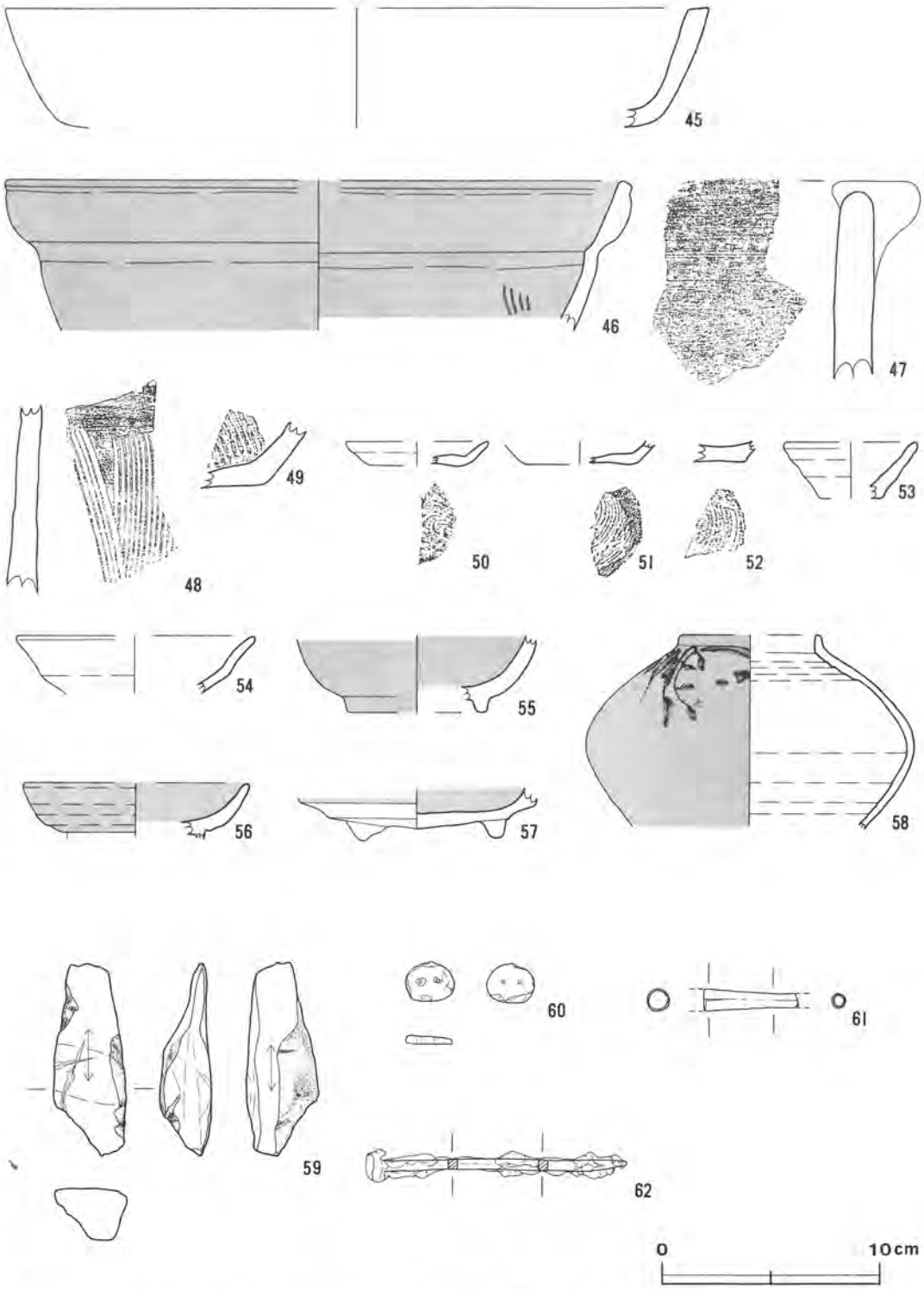
第36図　出土遺物実測・拓影図（縄文式土器）

○不明鉄製品

62 は，第 2 号溝覆土から出土した不明鉄製品である。最大長 12.1 cm，最大幅 2.5 cm，最大厚 0.5 cm を測る。断面は四角形で，頭部が L 字状に折れ曲がっている。腐蝕が著しい。



第 37 図　出土遺物実測・拓影図（土師器）

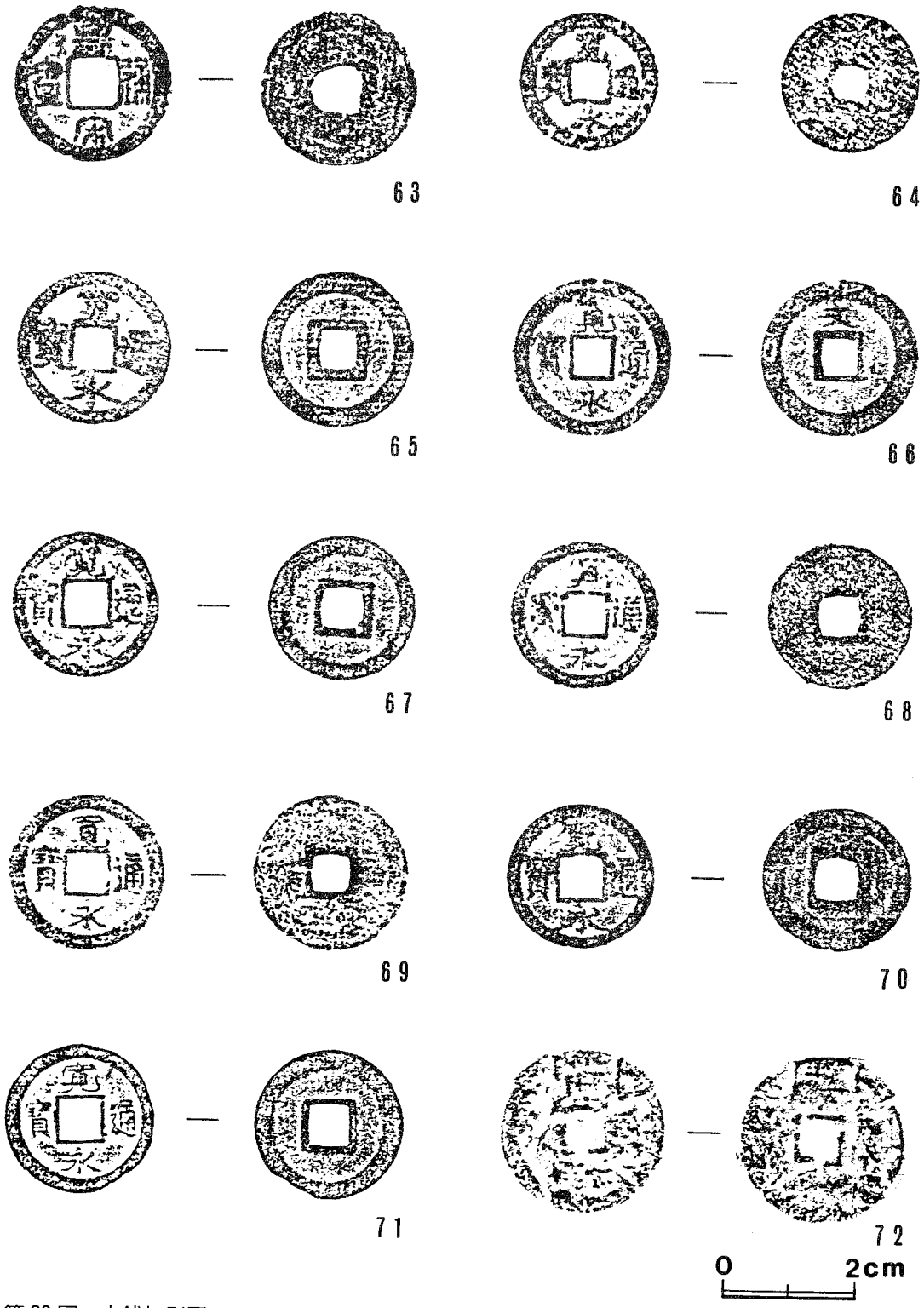


第38図　出土遺物実測・拓影図（陶磁器・土師質土器・石製品・金属製品）

(4) 古銭（第39図）

表4　古銭一覧表

番号	銭　名	初鋳年（西暦）	鋳造地名	出土地点	備　考
63	皇宋通寶	宝元2年(1039)	北宋	第8号溝	
64	寛永通寶	寛永3年(1636)	日本	〃	古寛永
65	〃	〃　（〃）	〃	〃	〃
66	〃	寛文8年(1668)	〃（武蔵國江戸亀戸）	〃	新寛永(裏面に「文」の文字)
67	〃	宝永5年(1708)	〃（　〃　）	〃	〃
68	〃	〃　（〃）	〃（　〃　）	〃	〃
69	〃	〃　（〃）	〃（　〃　）	〃	〃
70	〃	〃　（〃）	〃（　〃　）	〃	〃
71	〃	元文1年(1736)	〃(武蔵國江戸深川十万坪)	〃	〃
72	不　明	――――	――――	〃	銅銭(判読困難)
73	〃	江戸時代(中期)	日本	〃	鉄銭(腐蝕著しく判読困難)
74	〃	〃	〃	〃	〃（〃，一部欠損）
75	〃	〃	〃	〃	〃（〃，〃）
76	〃	〃	〃	〃	〃（〃，残　欠）
77	〃	〃	〃	〃	〃（〃，一部欠損）
78	〃	〃	〃	〃	〃（〃，〃）
79	〃	〃	〃	〃	〃（〃，残　欠）
80	〃	〃	〃	〃	〃（〃，〃）
81	〃	〃	〃	〃	〃（〃，〃）
82	〃	〃	〃	〃	〃（〃，〃）
83	〃	〃	〃	〃	〃（〃，〃）



第39図　古銭拓影図

第4節　まとめ

南谷津遺跡からは土坑20基，溝9条が検出されている。検出された20基の土坑の内，近世の炭窯と考えられる第2号土坑を除く19基の土坑の中で，遺物が出土しているのは第1～4・6・7・11～13・19・20号の11基である。しかし，これらの土坑についても，縄文前期から後期にかけての土器片や近世の土師質土器・陶磁器片等が覆土から少量出土しているにすぎず，土坑の時期や性格を特定することは困難である。重複関係から見ると，奈良時代の第9号溝によって掘り込まれている第7号・第9号の2基の土坑や，近世の第2号溝によって掘り込まれている第3号土坑については，重複するこれらの溝よりも古い時代に属するものと言える。

溝については，第9号溝が奈良時代に属するものと考えられるほかは，いずれも近世に属するものであり，第7号溝や第8号溝のように神域を区画する溝も検出されている。これらの遺構が，隣接する松原遺跡と密接な関連をもつことはさきに述べた通りであり，詳細については，第4章第4節の松原遺跡のまとめの項を参照されたい。

終章　む　す　び

松原古墳群・松原遺跡・南谷津遺跡の３遺跡は，桜川右岸の同一台地上に隣接してその所在が確認された遺跡である。調査の結果，検出された遺構の種類や分布状況，そして出土遺物の種類や時期等から，これらの３遺跡は互いに密接な関連をもつことが明らかとなった。

当台地上では，縄文時代前期頃には人々の生活の跡が認められるようになり，黒浜式土器をはじめとする前期から晩期にかけての土器片が少量出土している。しかし，これらはいずれも後世の遺構の覆土に混入する形で少量出土しているに過ぎず，当該期の遺構が検出されていないことから，縄文時代については，わずかに出土した遺物等からその生活の一端を垣間見るに過ぎない。古墳時代後期頃になると，この地一帯を治めた首長層の墓（古墳）が，桜川を臨む台地縁辺に形成されるようになる。先にも述べたように，『松原古墳群』を形成する古墳の墳丘は既に完全に失われており，その大半が未調査であるため全体像については不明な点が多い。しかし，『松原古墳群』の一部を成す松原遺跡第１号古墳の築造年代が，おおよそ古墳時代後期頃（６世紀中～後半頃）と推定されることから，『松原古墳群』はこれとほぼ同時期か，もしくはそれよりもやや前後する時期に形成されたものと考えられる。また，同台地上からは圃場整備に伴い，古墳の周溝とともに住居跡の痕跡が確認されており，その周辺の採集遺物から，古墳時代後期頃の集落跡の存在が窺われる。古墳群と集落との関連については，いずれ明らかにされるであろう。

南谷津遺跡からは，奈良時代のものと考えられる１条の溝が検出されているが，部分的な調査のため，その性格については不明である。

近世（江戸時代）になると，松原・南谷津両遺跡の一部に神社や墓域が形成される。神域を区画する溝（堀）は，おおよそ３期に亙り，その規模は次第に縮小していることが明らかとなった。また，溝の覆土上層から出土した寛永通寶や鉄銭の時期から，この区画溝は，江戸時代の中頃までわずかにその痕跡を残していたことが窺われる。この神域を区画する溝が，現在に至るまで畑の境界（地割）としてその名残を留めていたことは，先にも述べた通りである。このことは，「地割と遺構」の関連を知るうえで，大きな収穫と言えよう。また，この内側にはつい最近まで『天宮様』と呼ばれる祠が祀られており，地元の人々の信仰の対象となっていたことが窺われる。墓域からは，火葬骨をはじめとする数体分の人骨が出土しており，近世の葬法を知る上で興味深い。

若干の私見を交えながら，松原古墳群をはじめとする３遺跡について検討を加えて来たが，これらは，道路幅という限定された範囲内における調査成果に基づくものであり，その内容は十分と言えず，また，その妥当性についても一抹の不安が残されている。先学諸氏の御指導と御批判をいただきたい。

なお，本書をまとめるに際しては，調査担当者はもとより，関係機関・関係各位から御指導と御協力を賜ったことに対し，文末を借りて，衷心より深く感謝の意を表する次第である。

写　真　図　版

松原古墳群

松原遺跡

南谷津遺跡

遺跡全景（松原古墳群・松原遺跡・南谷津遺跡）

PL 2

松原古墳群

2

3

4

PL2

1　松原古墳群全景
2　　〃
3　グリット調査状況
4　第１号土坑
5　松原遺跡第１号古墳
6　周溝出土遺物
7　　〃

松原遺跡

5

6

7

PL3

1　松原遺跡第１・２号堀，第６号溝
2　第１号堀
3　第３号(SD８)・第４号(SD９)道路状遺構
4　第2号堀遺物出土状況
5　墓　域
6　墓壙群
7　第15号溝遺物出土状況

1

2

3

4

5

6

7

1

2

3

4

5

6

7

8

1　松原遺跡第２・３号墓壙

2　第５号墓壙

3　第４・８号墓壙

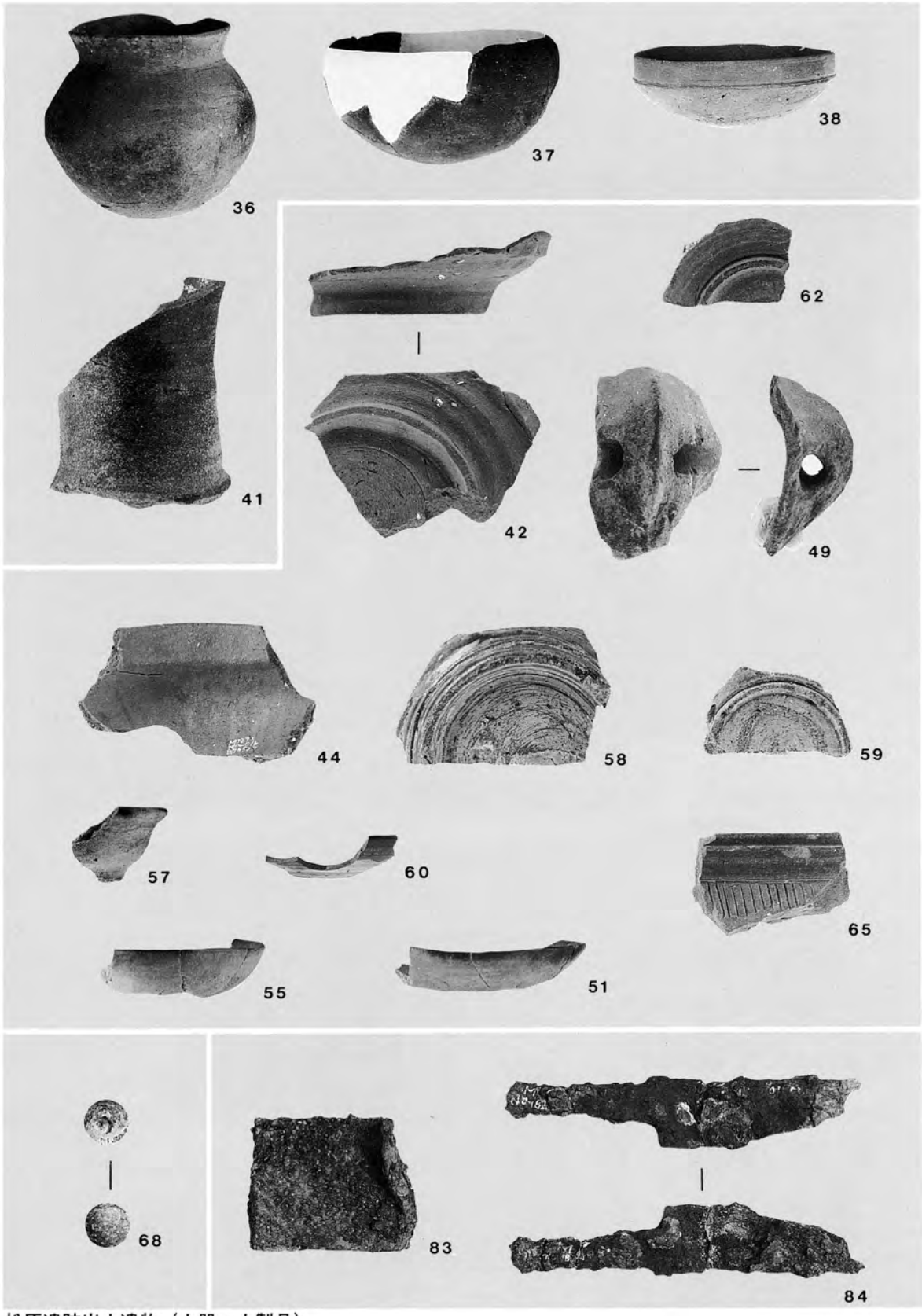
4　第７号墓壙

5　第１号道路状遺構遺物出土状況

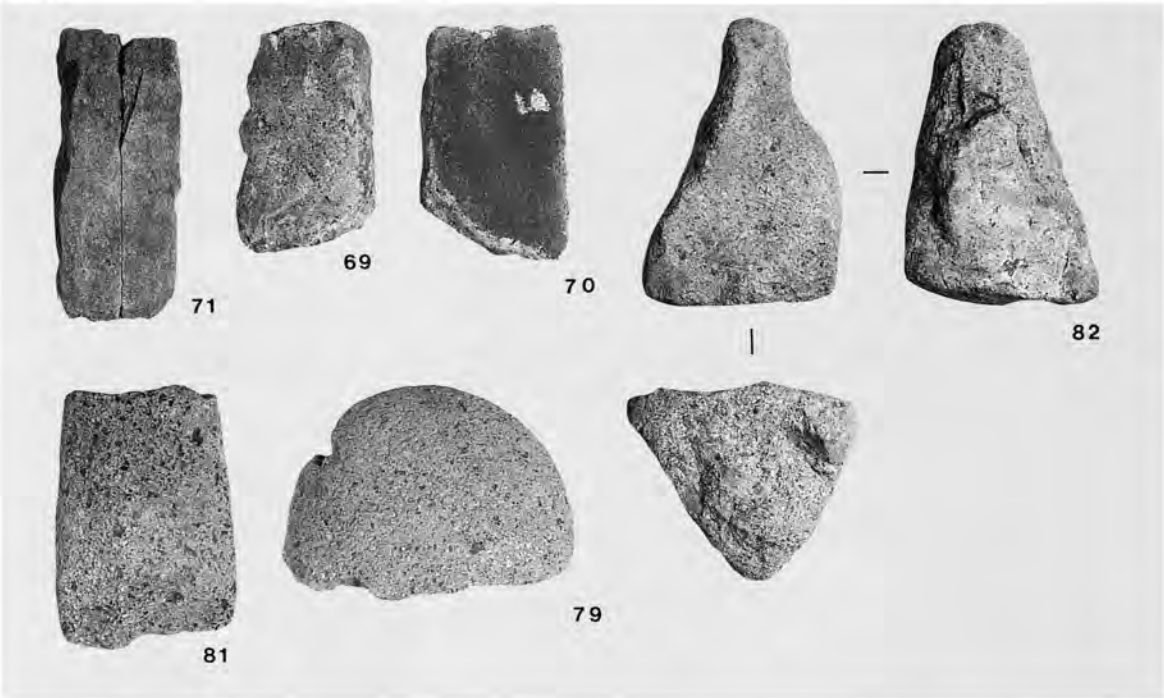
6　第15号溝，第５号墓壙

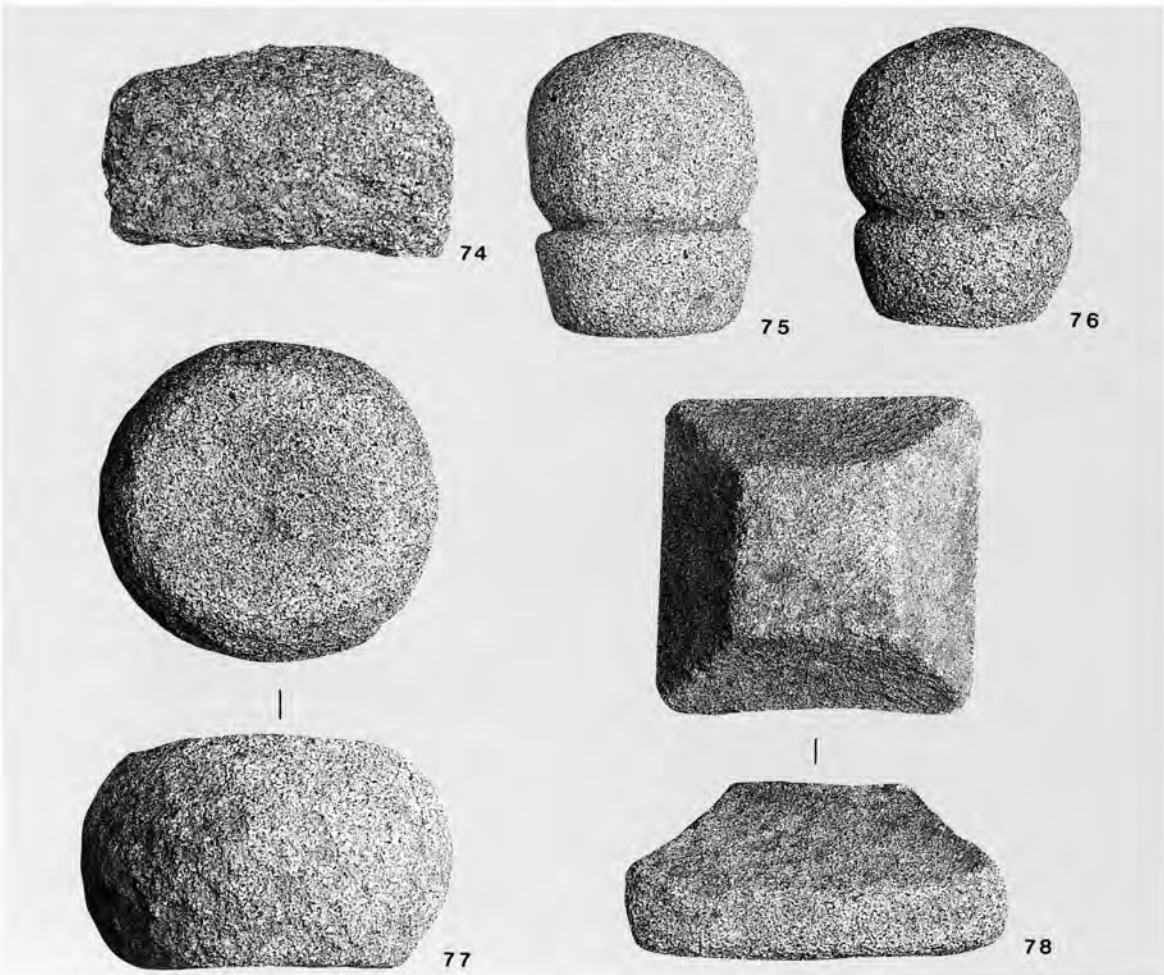
7　第12号溝，第２号堀

8　第７号溝



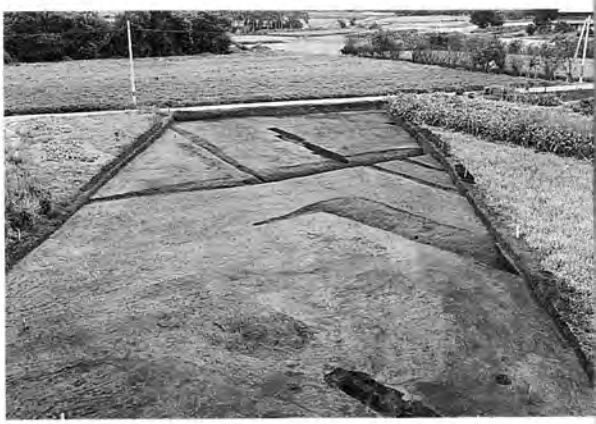
松原遺跡出土遺物（土器・土製品）





松原遺跡出土遺物（石器・石製品）

1



2

3

4

5

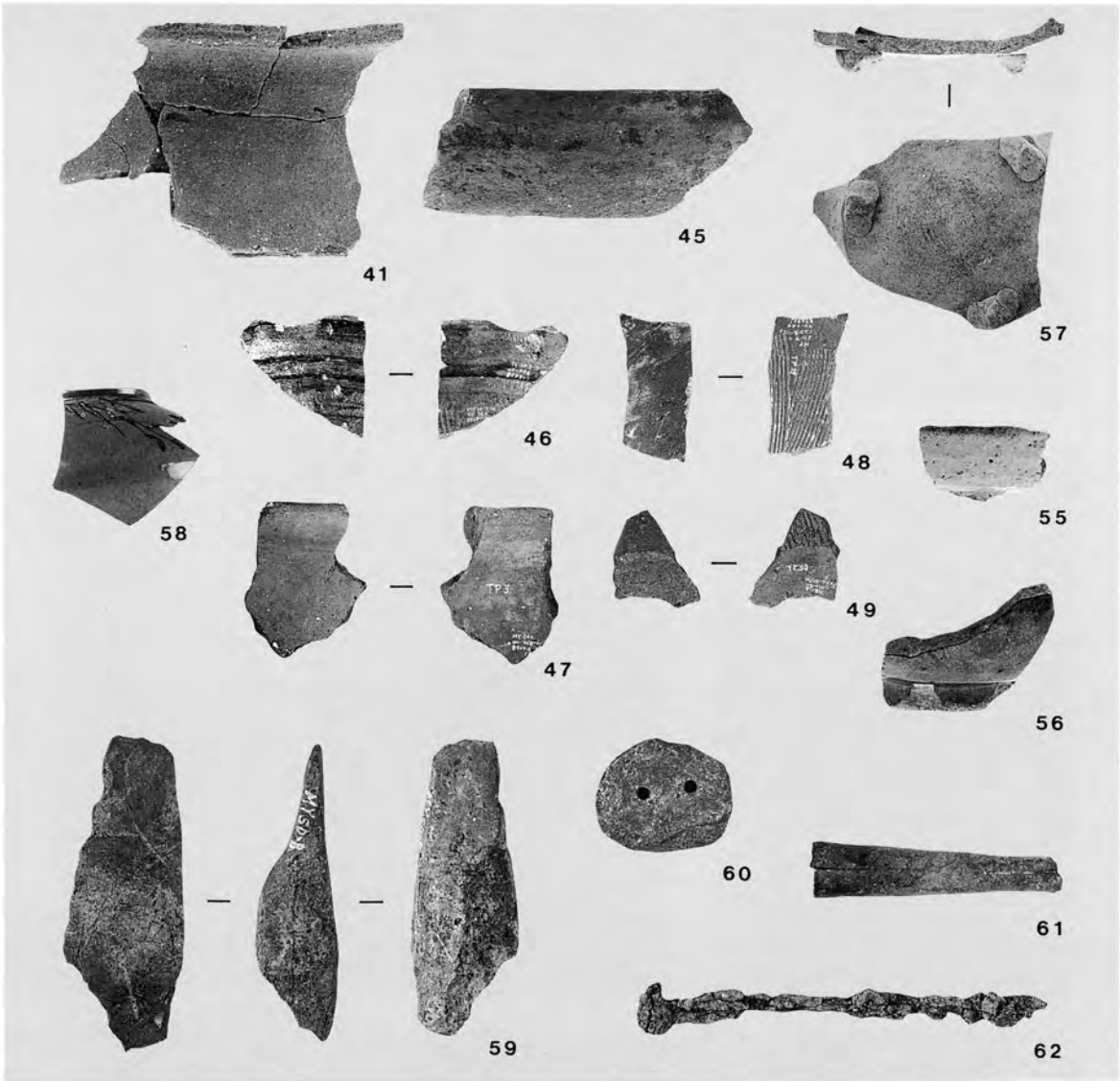
6

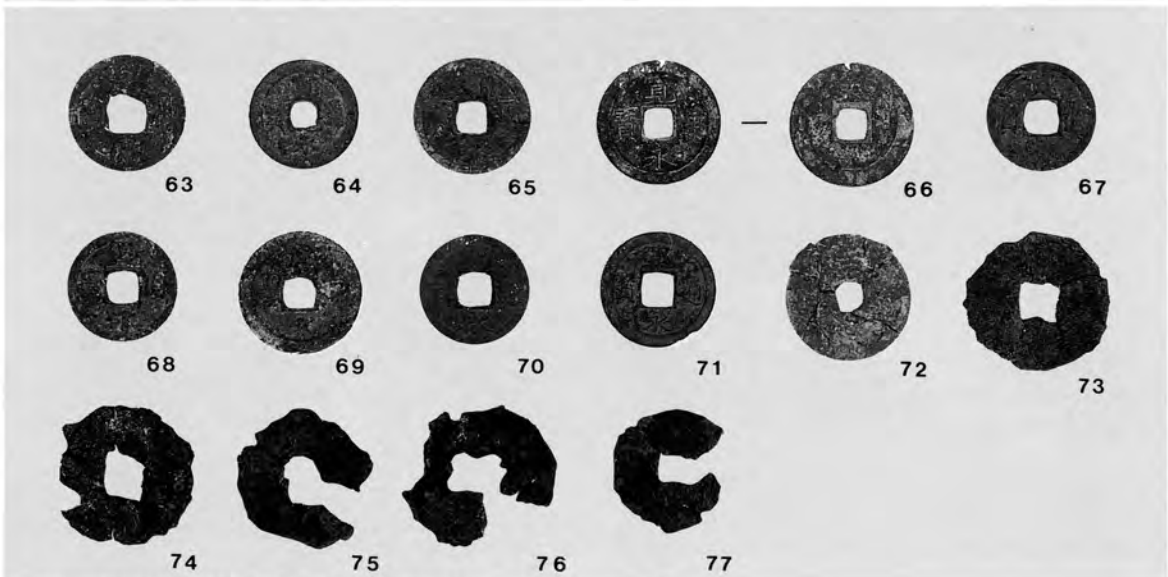
7

8

9

1　南谷津遺跡全景（南西側）
2　　〃　　（北東側）
3　第１号溝
4　第３・６号溝
5　第９号溝遺物出土状況
6　第８号溝遺物出土状況
7　第１号溝土層
8　第８号溝，炭窯
9　第２号溝





南谷津遺跡出土遺物（土器・石製品・銅製品・鉄製品・古銭）

茨城県教育財団文化財調査報告第56集

主要地方道大穂千代田線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

松原古墳群
松原遺跡
南谷津遺跡

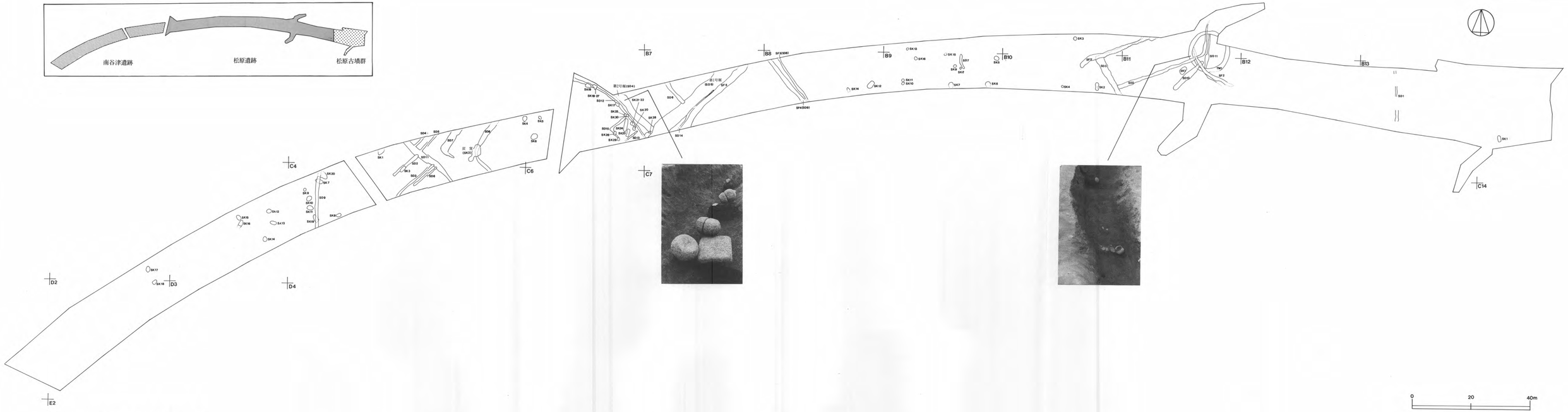
平成2年3月26日印刷
平成2年3月31日発行
発　行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町3丁目4番57号
印　刷　ワタヒキ印刷株式会社
〒310 水戸市城東1-5-21
☎ 0292 (21) 4381㈹

付　　図

茨城県教育財団文化財調査報告第56集

主要地方道大穂千代田線道路改良
工事地内埋蔵文化財調査報告書

松原古墳群
松原遺跡
南谷津遺跡



付図 1　松原古墳群・松原遺跡・南谷津遺跡遺構配置図